





Red seal impression with calligraphic characters, likely the artist's signature or studio mark.

重信の むかし話



はじめに

美しい自然と氣候風土に恵まれた重信町は古い歴史をもち、文化財や民俗資料が数多く残っている香り豊かな土地であります。この牧歌的な農村も、近年は急激な人口の増加により都市化の傾向にあり、加えて愛大医学部を中心とした教育諸施設の整備充実が進み、本町の目指している文化田園都市に躍進の一途をたどっております。

本町がさらに県下の雄町として飛躍をとげるためには、日本人が古来の伝統として受け継いでいる愛郷心のいっそうの高揚が望まれるところであります。この精神こそ「うるおいと安らぎのある町づくり」に通ずるものと確信しています。

このたび、この豊かな町づくりの一環として、ふるさとのむかし話を集めて、先祖から語り継がれた心温まる話を一冊の本にまとめ発刊することになりましたことは誠に意義深く御同慶に存じます。

この一冊の読み物は、重信町の伝説や民話を知り、先人の生きざまをしのび、さらにふ

るさと意識を高め、よりよき重信町民となつていただくために作られたものであります。ふるさとのむかしの面影をとどめ、古い時代の人々の素直で美しい心が今なお脈打っているむかし話が、物の豊かさに慣れ、心の豊かさを忘れがちな子どもが本来の美しさを取りもどす糧となることを願っております。また、成人の方々には、郷土を新しく見直し、本町の文化遺産を通してふるさとの温もりを感じ取っていただく道標となることを期待するわけであります。こうした、先祖から子や孫へ言い継がれ語り継がれてきた伝説や昔話を、収集保存して後世に伝え、郷土への認識を深める努力は、私達に課せられた使命であることを思うとき、この本は大きな価値があると思ひます。

多くの町民の方々が、この「重信のむかし話」を愛読され、先人の温かい気持ちを受け継ぎこれから開けゆく未来に大きくはばたき、心の通い合う住みよいふるさとづくり活躍されますよう祈つてやみません。

おわりに、この本を発行するにあたり、表紙絵をいただきました徳本立憲画伯及び編集や資料提供に温かい御協力をいただきました皆様に心から感謝し、厚くお礼を申し上げます。

昭和五十八年十一月三日

重信町長 束 村 旭

発刊のことば

山美しく水清らかな自然と風土に恵まれた重信町には、この地を愛した祖先が、長い歴史の中で、こつこつと築いてきた文化があります。

この地に生きた私たちの祖先は、生活の中で、人知をこえた自然の不思議に畏敬いけいの念を抱き、人の不幸に限りない同情を寄せ、万物に宿る生命に永遠なるものを信じてあげ、祭り、幾百年もそれを守り続けてきたわけで、その心は親から子に語り伝えられてきました。まさに、昔話や伝説は、先人が、あとに続く者に伝える愛であり、肌のぬくもりであったといえましょう。

なかには、道理に合わない話、史実に相違する話もありますが、これらを通して、祖先の暮らしや願いを知ることができます。私たちの祖先は、代々その心を受け継ぎ、むかし話とともに、それらにまつわる社や樹木等を守ってきました。

しかし、この重信町も都市近郊の町として、日々激しく変容しつつあり、伝説の地の地形も変わり、あるいは年経た老木となって朽ち果てるなど、伝説につきものの証拠の跡も

失われてゆこうとしています。また、生活様式の変化により、むかし話を語り継ぎ受け継ぐ風習も少なくなり、ともすれば身近なことが忘れ去られようとしています。

この度、町内に残されてきた昔話や伝説、六十編を選んで「重信のむかし話」として刊行することになりました。この本が四季を通じて多くの方々に読まれ、私たちの抱いている人情が、遠い祖先のころより、これらの話によって育はぐまれていたことを知り、郷土への親しみがさらに増し、人間性豊かな心情が深まることを願ってやみません。そして、その心が郷土愛につながり、豊かな郷土の文化づくりの土壌となることを信じます。

終わりに、この本の執筆編集及び、さし絵等に精魂を傾けられた諸先生、御指導くださった先生方に心からお礼を申しあげますとともに、出版をおひきうけくださった青葉図書の御支援に感謝の意を表し発刊のことばといたします。

昭和五十八年十一月三日

重信町教育委員会 教育長 野 中 信一郎

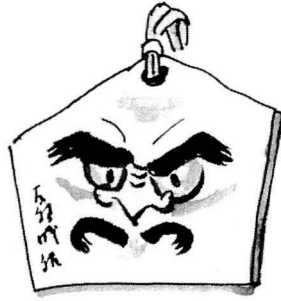
この本を読まれる方へ

一 この本は、学校・家庭教育資料冊子として、すでに町内で編集されてきた話や、古老の方々からの聞きとりを、小学校四年生以上を対象に読みやすいようにまとめたものです。

一 六十編の話は、すべて、重信町の古い歴史や、すばらしい自然、そして、その中で精一ぱい村づくりのために生きぬいてこられた先輩のくらしなどにまつわる、人情豊かではほえましい話、不思議な話、又悲しい話等々であり、家庭や学校で読み合い話し合う資料として、十分役立ててほしいものです。

一 忘れ去られようとしているなつかしい方言で記述してありますので、むかしの人々の心のぬくもりを、感じとることができると思います。

一 話の内容を、より身近かなものとするために、北吉井・南吉井・拜志の三地区ごとに編集し、それぞれの位置を示す絵地図をつけました。お子さん達と一緒に、話に出てくる場所を訪ねられ、重信町のむかしをしのび、良さを見直し、そして、郷土を愛する心を育てていきたいものです。



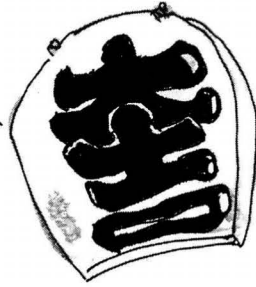
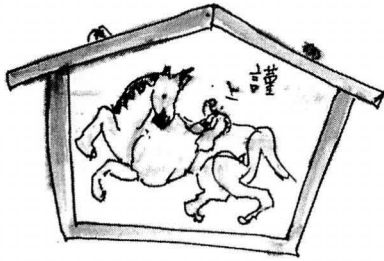
目次

はじめに

発刊のことは

一、北吉井地区にのこる話

- | | | | |
|---|--------------------------------------|----------------------------------|----|
| 1 | 行き合い裁面 <small>さいめん</small> | (山之内関屋 <small>せきや</small>)..... | 一四 |
| 2 | 杉原家のお飾りさん <small>かざり</small> | (山之内木地)..... | 一六 |
| 3 | 七色樹 <small>なないろのき</small> | (山之内黒滝)..... | 一八 |
| 4 | 俵飛山福見寺の由来 <small>ひょうとび</small> | (山之内福見)..... | 二〇 |

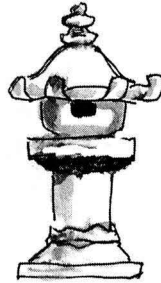
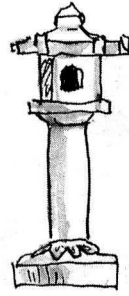


- 5 みこが淵……………(山之内神子野)……………二四
- 6 からびの河原……………(山之内神子野)……………二五
- 7 かくされた宝もの……………(山之内)……………二八
- 8 爺の石・婆の石……………(山之内コブ谷)……………三〇
- 9 蛇塚さん……………(山之内大畑)……………三二
- 10 水の中にいた神様……………(樋口向井)……………三四
- 11 観音さん……………(樋口)……………三九
- 12 大杉さん……………(樋口片山)……………四二
- 13 身代わり狸……………(横河原棧敷)……………四五
- 14 追い出し地蔵……………(志津川)……………四八
- 15 あらうまさん……………(志津川)……………五二



- | | | | | | | | |
|---------------------------------|-----------|--------|---|--|---|-------|---------------------------------|
| 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 |
| 七社権現 <small>ごんげん</small> と七人みさき | 西岡にきた八幡さん | ごうりんさん | 菅公 <small>かんこう</small> の腰掛石 <small>こしかけ</small> | 金網 <small>かなあみ</small> を破 <small>やぶ</small> つた絵馬 | 強力 <small>ごうりき</small> 大明神のお狸 <small>たぬき</small> さん | 首なし馬 | どだんさんとお和田さん |
| | | | | | | | |
| (西岡) | (西岡河ノ内) | (志津川) | (志津川出口) | (志津川出口) <small>いでぐち</small> | (志津川弘川) | (志津川) | (志津川八反地・庵 <small>あん</small> の下) |
| | | | | | | | |
| 八〇 | 七七 | 七四 | 七一 | 六八 | 六四 | 六〇 | 五六 |

二、南吉井地区にのこる話



- | | | | | | | | | |
|----------------------------|--------------------------------|---------|---------------------------------|------------------------------|----------------------------------|-----------------------------|------------------------------|---------------|
| 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 雨乞い面の由来 <small>あまご</small> | 長塚の石地藏 <small>ぶか いしじぞう</small> | ほごつり | 六十歩松 <small>ふ</small> | お鷹殺しと七人みさき <small>たか</small> | 牛渕の村移りと経塚 <small>うしぶち うつ</small> | 牛鬼塚 <small>うし おに ぶか</small> | 立石狸 <small>たて いしだぬき</small> | 四角なむくの木とむく宮さん |
| | | | | | | | | |
| (牛渕北野田) | (牛渕岸ノ上) | (牛渕牛頭守) | (牛渕牛頭守) <small>うしぶちごずもり</small> | (牛渕五月田) | (牛渕経塚) | (田窪水木) | (見奈良柚寿木) <small>ゆすのき</small> | (見奈良柚寿之木) |
| | | | | | | | | |
| 一〇九 | 一〇七 | 一〇五 | 一〇二 | 九八 | 九六 | 九三 | 九〇 | 八六 |



- | | | | | | | | | | | |
|-------------------------------|---------------------------------------|---|---|--------------|---|----------------------------------|---------------------------------|-------------------------------|--------------------------------|---------------------------------|
| 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 |
| お産狸 <small>おさんね</small> | 弘法大師 <small>こうぼうだいし</small> の二つ石..... | 一升 <small>しゅうこんこう</small> 五合シヤリシヤリ..... | 高坊 <small>たかぼう</small> 主 <small>ず</small> | おさえさん..... | 橋 <small>はし</small> の下の泣 <small>な</small> き声..... | 菅公 <small>かんこう</small> の腰掛石..... | 茶縞狸 <small>ちやしまねね</small> | 蛇 <small>へび</small> のたたり..... | どじよ <small>がめ</small> 亀さん..... | 三高 <small>さんたかまつ</small> 松..... |
| (南野田)..... | (南野田若宮)..... | (北野田新村)..... | (北野田新村)..... | (北野田新村)..... | (北野田新村)..... | (北野田深井)..... | (北野田深井)..... | (北野田深井)..... | (北野田深井)..... | (北野田北野)..... |
|一四〇 |一三七 |一三五 |一三三 |一二九 |一二七 |一二四 |一二〇 |一一八 |一一五 |一一二 |

三、拝志地区にのこる話



- | | | | | | |
|---|---|-------|-----------------------------------|-------|-----|
| 9 | お定力さん
<small>じょうりき</small> | | (下林定力) | | 一七二 |
| 8 | お京が測
<small>かち</small> | | (上林札場
<small>かた</small>) | | 一六九 |
| 7 | えじろ狸
<small>なま</small> | | (上林於檢校
<small>おけんぎょう</small>) | | 一六六 |
| 6 | ほろせ岩 | | (上林ござ童
<small>わえ</small>) | | 一六三 |
| 5 | ござ石 | | (上林ござ石) | | 一五九 |
| 4 | 千人塚
<small>つか</small> | | (上林上駄場
<small>だば</small>) | | 一五六 |
| 3 | 矢取地藏
<small>やとりじぞう</small> | | (上林死出ケ成
<small>しでなる</small>) | | 一五四 |
| 2 | 不入山と吉岡一味齋
<small>いらすやま よしおかいちみさい</small> | | (上林上ケ成
<small>うわなる</small>) | | 一五〇 |
| 1 | 山爺・山婆
<small>やまんじい やまんばあ</small> | | (上林) | | 一四六 |



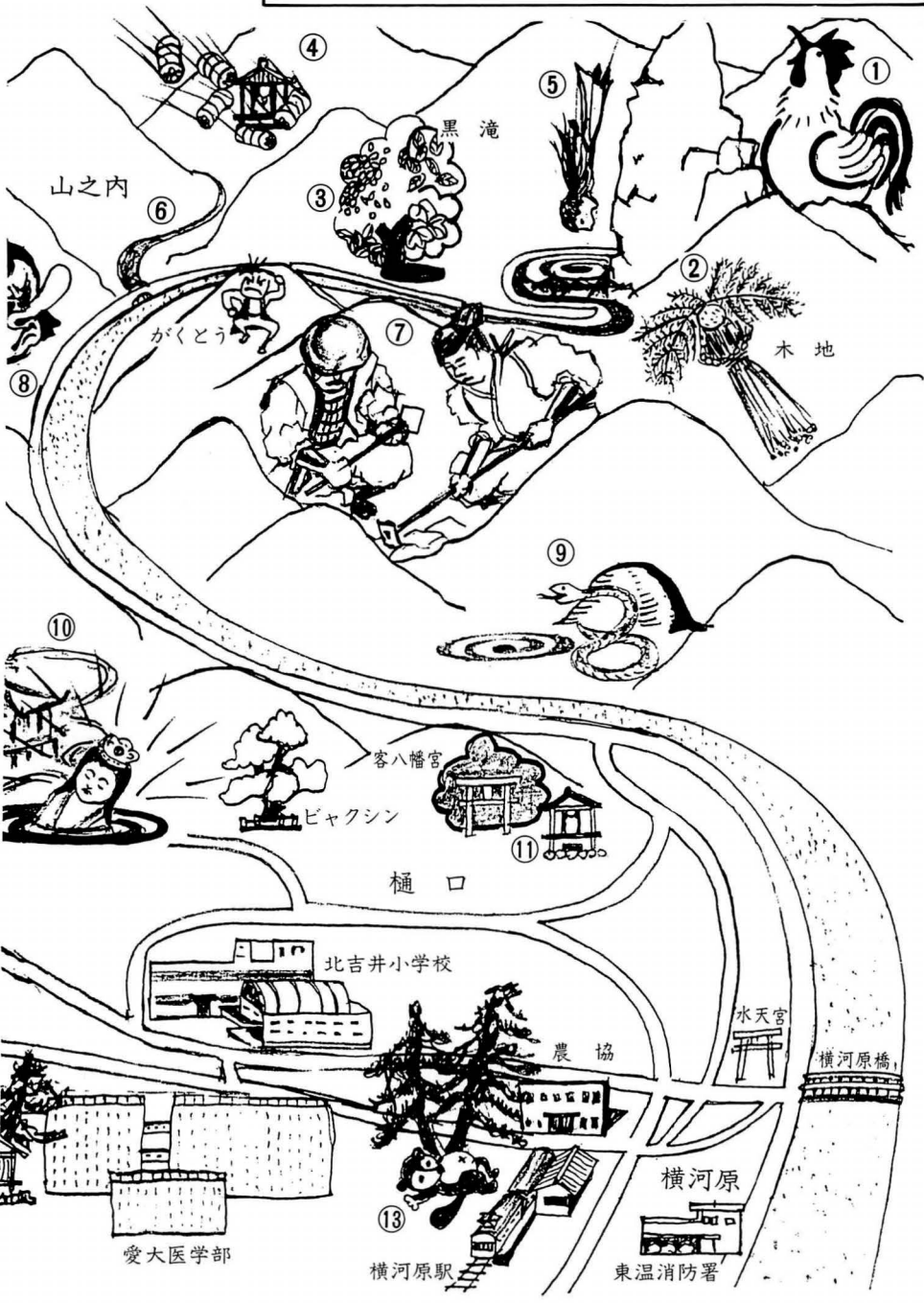
- 17 おわりに
高市家のお大師さんだいし……………(上村竹ノ下)……………一九七
- 16 お幸こうがえる……………(上村宮ノ元)……………一九四
- 15 彦八池……………(上村上ノ段)……………一九一
- 14 將軍地蔵しやうぐんじぞうさん……………(上村上ノ段)……………一八九
- 13 お宮の大松……………(下林宮ノ段)……………一八六
- 12 芋根八軒いもねはちけん……………(下林芋根)……………一八三
- 11 おさんが渚かち……………(下林)……………一七九
- 10 刀をさがす怪火あまじび……………(下林)……………一七六

表紙絵 徳本 立憲
題 字 梅本 昌一



きたよしいちく はなし
北吉井地区にのこる話

きたよしいちく ばなしちず
北吉井地区のむかし話地図



山之内

黒滝

木地

がくとう

客八幡宮

樋口

北吉井小学校

農協

水天宮

横河原橋

横河原

愛大医学部

横河原駅

東温消防署

- ① 行き合い裁面
- ② 杉原家のお飾りさん
- ③ 七色の樹
- ④ 俵飛山福見寺の由来
- ⑤ みこが淵
- ⑥ からびの河原
- ⑦ かくされた宝もの
- ⑧ 爺の石・婆の石
- ⑨ 蛇塚さん
- ⑩ 水の中にいた神様
- ⑪ 観音さん
- ⑫ 大杉さん

- ⑬ 身代わり狸
- ⑭ 追い出し地蔵
- ⑮ あらうまさん
- ⑯ どたんさんとお和田さん
- ⑰ 首なし馬
- ⑱ 強力大明神のお狸さん
- ⑲ 金網を破った絵馬
- ⑳ 菅公の腰掛石
- ㉑ ごうりんさん
- ㉒ 西岡にきた八幡さん
- ㉓ 七社権現と七人みさき



行き合い裁面さいめん（山之内関屋せきや）

むかし、山之内と周桑郡しゅうそうぐんの関屋とが村の境さかいのことで
かれこれもめたことがあつた。

どちらも、お互たがいに自分とかが得とくになるようにいう
てゆずらんので、なかなか境が決まらなんだ。

どこを境にするか、話し合うた末に、両方から代表
を出して、同じ時刻ときくに村を出て、代表者が出会うたど
ころを境にしようと決めた。

それで、一番どりが鳴なくのを合図に歩きはじめること
になった。ところが、関屋の方がこすくまわって、
にわたりのとまり木たけづつに竹筒たけづつでお湯をかけて、にわとり
を早く鳴かせて出たんじやと。



そうとは知らん山之内村の方は、まっ正直に一番どりが鳴くのを待つてから出たもんじゃけん、関屋の方がずうっと山之内側に来てしもうて、山之内の木地から三丁ほど上の「出合」というところで、ばったり顔を会わしたそうな。

山之内側は、くやしゅうて、じだんだをふんでおこったけど、両方が話し合ったことじゃけんというてあきらめ、そこを「出合」と呼んで、山之内と関屋の村境にしたそうな。



杉原家のお飾りさん^{かぎ}

(山之内木地)

むかし、東予地方で合戦があつてその戦いに敗れた落武者^{おちむしや}が、まどの峠^{とうげ}をこえて、山之内のおくの木地という所へにげこんできたんじゃないやそうな。

その日は、ちようどおおみそかの日であつたので、あしたはお正月であるということ、気持ちだけでもお正月を祝^{いわ}おうと、いろいろなことをすることにしたそうな。

そこで大急ぎでお飾りさんを作つて、ありあわせの穀物^{こくもつ}でおもちをついて、正月のお神様をお祭りしたそうな。



あんまりうろたえたもんじゃけん、後で見るとお飾りさんに付けた山くさが反対になっていた。だいたいお飾りさんの山くさは、裏側うらの白い方を表にせないかんのに、反対に青い方が表になつとつたんと。

これに気付いた落武者たちは、いろいろと考えた末、正月そうそうやり直すのもえんぎが悪いというのでそのままにしておいた。

ところが、それがそのまま、家のしきたりになつてもうて、それから、木地の杉原家では、正月のお飾りさんの山くさを、よその家と反対に付けるようになったんじゃそうな。





黒滝竜神社

七色樹 (山之内黒滝)

山之内の黒滝に、黒滝竜神社という古い社があるが、この社の境内には、「七色樹」という大きな大きな木があった。今は、本殿わきの林の中にたおれたままで、くちはてどるといふが。

「七色樹」といわれたわけは、その木は、カシ・シラカバ・サクラ・ウメ・エングリ・サルスベリなどの木が寄り集まって一本の木になっていたけんじや。葉も七つの葉で、花もいろいろに咲く変わった木で、ほかのところでは見られん、めずらしい木じゃったそうな。



俵飛山福見寺の由来（山之内福見）

むかし、三蔵法師さんぞうぼうしという人が、インドの国から、仏教を広めるためにわが国に来られたときの話じゃ。

瀬戸内海せを通っていた法師は、はるか東の山の上に浮うかんだ紫むらさきの雲の中に光るものを見付けたそうなの。

ふしぎに思おうた法師は、船ふねを和氣わげの浜へ着けて東の方を向いて、すずをふつた。すると法師の体がちゆうに浮いて、山の上をめざして飛びはじめたんと。

法師が山に来てみると、何やらよい香りかおがし、ふしぎな光がさして、そこには十一面の観音かんのん様が立たつておられた。

法師は、すぐ仮かりのお堂を作り観音様をお祭りしたそうなの。

それから十年ほどたつて、この山深い村が大雪におおわれたことがあった。村人は、食べ物べ物がなくなり、十日以上も水だけで、死しにそうになつていたんじやと。

そのころ法道せんだん仙人せんじんというえらいお坊ぼうさんがおつた。

法道仙人は、山へ登って観音様をお祭りしたお堂にこもり、村人のためにおいのりをしたそうな。

ある日、瀬戸内海を見ていると、米俵だわらをいっぱい積んだ船が通りよつたので、仙人は、村人のために米を分けてもらおうと思つて、空を飛んで船に行き、

「なにとぞ、大雪でうえている村人たちにお米をほどこしてやつてはくれまいか。」
と、船主にたのんだそう
うな。

船主は、がんこもので、

「これは、年貢米ねんぐまいゆえ
ほどこすわけにはい
かん。」

と、なかなか聞き入れてくれなんだ。

「それでは。」



聖観音菩薩立像

というて、仙人はそれ以上はたのまず山へ帰りかけたそうなの。

ところが、おどろいたことに、米俵がどんだん仙人の後を追って飛んでゆくのである。

船主は、これには、たまげてもうて、あわてて、米俵の後をつけ山の中へ行つて仙人にあやまったそうなの。

そうすると仙人はな、

「これはお前があまりにも欲ばりだからこらしめたまでじゃ。慈悲の心を持って、一俵だけこのうえに苦しんでいる村人たちに分けてはくれまいかの

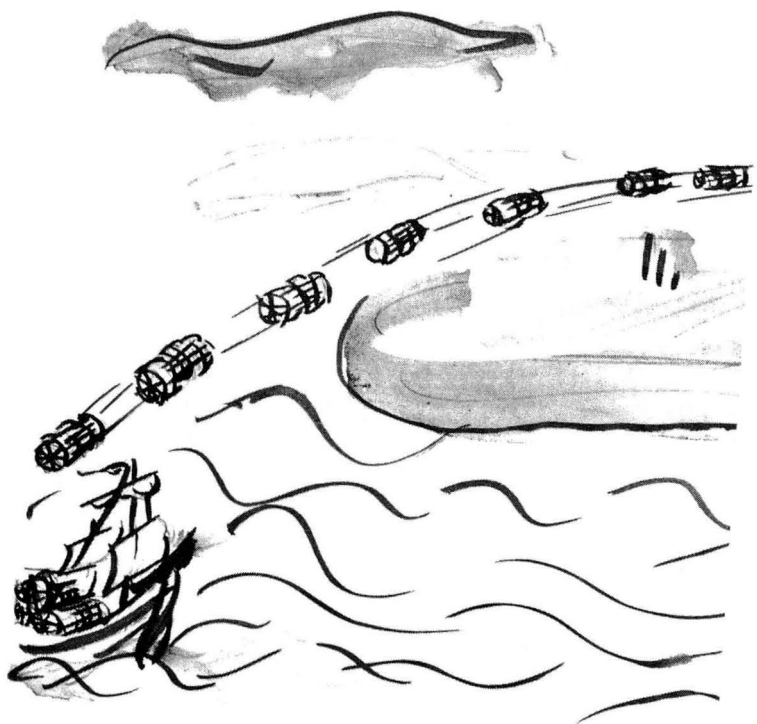


う。後はすべて船に返すけん。」

というたそうじゃ。

船主がしうちして村人たちに一俵をあたえると、山の中に飛んで来た米俵は、ふたたび、ちゅうにまい上がり、もとの船に返っていったんど。

このことがあってから、この寺のことを「福見寺」、この山を「俵飛山」と呼ぶようになったそうな。



みこが 淵ふち（山之内みこの神子野）

山之内の木地きじから三丁（約三百メートル）ほど入ったところ
に「みこが 淵」という淵があったそうなの。

今は、土や砂すなで埋うまれてしまったそうなの。

むかし、神子野にいたみこさんがとなり村まで用があった
て、この淵のそばまで来たところが、寒い朝じゃったので、
淵には、氷が張はって、道もつるつるになっとった。

みこさんは、用心しもって歩きよったが、運の悪いこと
に足をすべらし淵に落ちてしまった。そしてとうとう、淵
からよう出んとこごえて死んでしまったそうなの。

それから、この淵のことを「みこが 淵」と呼よぶようにな
ったそうなの。



からびの河原（山之内神子野）

むかし、山之内の神子野というところへ、ひとりのお
遍路^{へんろ}さんがやってきたんじや。暑い夏のことじやけん、

水が飲みとうなつたお遍路さんは、ある家へ行き、

「のどがかわいて困^{こま}っています。水をいっばい飲まして
ください。」

と、ていねいにたのんだんじやと。

すると、婆^{ばあ}さんが出てきて、お遍路さんをじろじろ見ながら、

「あんたなんかに飲ます水はない。ここは水が不自^{ふじ}由^{ゆう}じやけん。遠い谷までくみに行かに
やいかんけん。」

と、意地悪く断^{ことわ}ってしまったんじや。その婆さんは、たいそうな欲^{よく}ばりだつたんじやそうな。

お遍路さんは、さみしそうな顔で、

「そうですか。」



と、ひとことそう言って、
その家を出て行った。

そうして、すぐ近くの
もう一けんの家へ行つて
たのんでみた。その婆
さんは、親切な人だった
けん、

「それはおやすいことじ
ゃ。どうぞ、これでたる
ほどお飲みください。」
と、湯飲みを出してあげ
たんじゃ。

お遍路さんは、水を飲
むと、そこでつえをふっ
ておったが、その場では



つと消えてしもたんよ。

この不思議なお遍路さ

んは、こうぼうだいし弘法大師様だった

ので、水を断った欲ばり

婆さんの家は、年中水に

困るようになったんじゃ

と。

そして、いつもからか

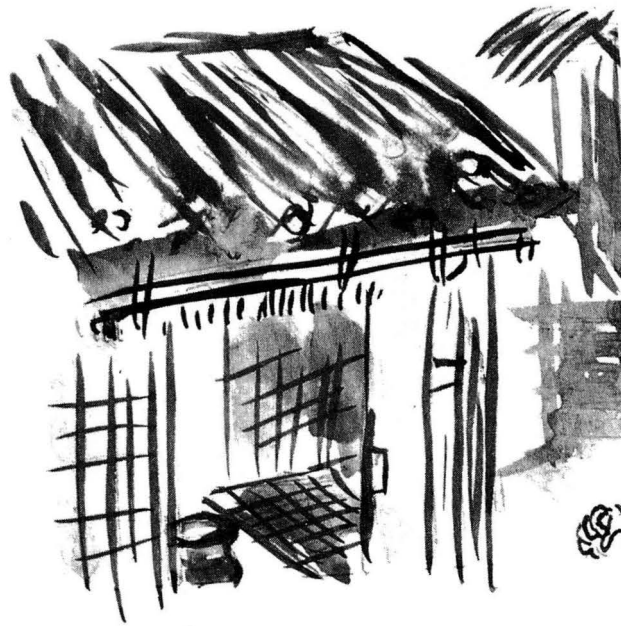
らにかわいとするもんじゃ

けん、欲ばり婆さんの家

の近くを、「からびの河原」というようになり、今もからからにからびているんじゃと。

それと反対に、お遍路さんを親切にしてあげた家は、からびの河原のすぐ近くじゃのに

なんぼ日やけが続いても、年中水のきれるといふことがないんじゃと。



かくされた宝ものたから

(山之内)

むかし、どこかわからんけど、
はげしい戦いがあつて、戦いくさに負
けた殿様とのさまが、宝ものを持ってこ
の山之内にに逃げこんできた。

しかし、重いし、人目にもつ
くので、殿様はその宝もののし
まつにこまつて、家来たちに命
じて埋うめることにした。

埋め終わると、その上に大き
な石を置いて、目印めじるしに白南天しろなんてん
の木を植えて、よくわかるように



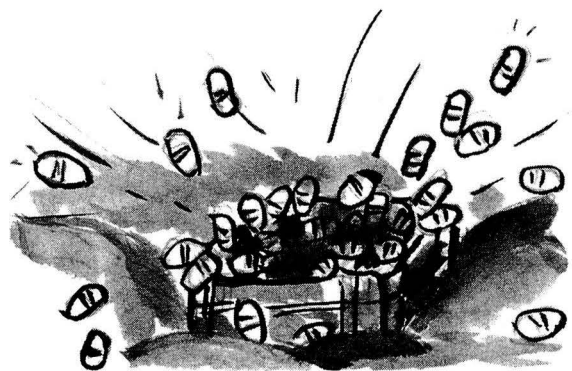
しておいたそうな。

ところがせつかく目印までしておいたのに、殿様も死に、家来たちも次々に死んでしまうて、宝ものもそのままになってしまった。

それから、山之内のどこかにたくさんの宝ものが埋められているといわれるようになり、そこには朝日がさし、夕日の当たるところじやそうなどか、大雨が降って重信川の水が増えたときに、むかし目印に植えた白南天の小枝が、ときどき流れて来たりするとか、そんな話が伝えられるようになった。

それで、これまでにたくさんの方が上流の方までこの宝ものを探しに行ったけど、まだに見付からんのよ。

今でも、村の人の中には、宝ものは必ずこの山之内のどこかに埋められている、と信じている人もおるそうな。



爺じいの石・婆ばあの石（山之内コブ谷）

山之内のコブ谷というところに、「爺の石」「婆の石」というて大きな岩があるんよ。どうして、この大きな岩がこう呼ばれるようになったんかのう。

ある日のことじゃ。コブ谷へ山仕事に來た年とつたおそま（きこり）さんが、山小屋を作ろうと思つて、よい場所を探さがしておつたところ、ちょうどどこもあいのいい大岩があつたので、これさいわいと、その岩の上に山小屋を作つたんじゃ。

ところが、夜中になると山小屋が、ぐすら、ぐすら、動きだし、どうどうおそまさんは眠ねむることができなんだそうじゃ。

つぎの日も、つぎの日も、やっぱりそうじゃつたので、おそまさんは氣味が悪くなつて、そこでの仕事をあきらめて、山を降りてしもうた。

おそまさんは、山を降りてから村の人にその話をしたら、その大岩は、「天狗てんぐの休み石」と呼ばれる大岩じゃつたそうな。おそまさんは、「天狗の休み石」の上に小屋を建てたもんじゃけん、天狗がおこつて、山小屋をぐすらぐすら、ゆさぶつたんじゃろうのう。

このおそまさんの話を聞いた村の人は、山小屋の土台にした「天狗の休み石」を「爺の石」と名付け、この岩から七十メートルぐらい下にある大岩を、「婆の石」と呼ぶようになったんじゃと。



蛇塚さん（山之内大畑）

山之内の御所ごしよの下に、蛇口じゃぐちという淵ふちがあった。いまはつぶれてしまったけれど、この淵に、むかし、大蛇だいじゃがときどき水を飲みに来よつたそうなの。

この大蛇は、相当そうとうな大もので、なんでも、この淵に頭あたまがあつて、尾おは除よけまで届とどいていたということじゃ。それで、この淵のことを蛇口じゃぐちと呼よぶようになったんじゃと。

この大蛇は、ときどき、岩伽羅山いわがらからコブ谷こぶやを通つて、蛇口じゃぐちへ水を飲みに通つていたんだよ。そのとき、この大蛇を見た者は、熱を出して寝こんでしまつたそうなの。

ところが、さすがのこの大蛇も、ある年の大洪水こうすいで流されて、大畑おほはたけに流れついてしまつたんだよ。

流れついた大蛇の死体を埋うめたのが、この蛇塚へびづかなんじゃ。

それで、蛇塚へびづかの近くを通ると、ときどき、ゴー、ゴーと、蛇へびがゴロタをひく音が聞こえておつたそうなの。



水の中にいた神様（樋口向井）

むかし、重信町が樋口村や志津川村などと呼ばれていたころより、まだまだむかしのことじやと。

ある日、弥助やすけというお百しようさんが、日吉谷の谷川で畑にやる水をくもうとして川をのぞいたところ、何やらぎようさんきらきら光つとるもんがあつたんじやと。

「やつ、ありやあなんだ。」

「水の中に御光ごこうがさしとるぞ。」

「こりやあ、いよいよまぶしゅうなつてくるわい。ただことじやあないぞ、おおことじや。」
今まで、こんな光景こうけいを見たことがなかつた弥助さんは、もう驚おどろいたのなんの、水くみのおけをほおり出して、もときた道をどんどこんどこかけもどつてきたんじやと。そこでみんなを精せいいっぱいの声で呼び集めて聞いてもろたんじやと。こんな話は、みんな聞いたことがなかつたんで、

「そりやあ、月のいん石かもしれんぞ。」

「かぐや姫ひめが落ちたんじやろか。」

「金こんごう石にまちがいあるまい。大金持ちになれるかもしれないぞ。」

「そうか、それなら、これからは、今までの苦勞がむくわれて遊あそんで暮くらせるけん、ありがたいぞ。」

「そうもいくまい。お代官だいかんさんに届とどけ出ないとおどがめがあるぞ。」

村人たちは、まるで、もう、宝物たからものでも手に入れたように、口々にわいわいさわぎ立てながら、弥助さんと連つれだつて日吉谷へ坂道を登つていったんじやと。

そうしたところが、まあ、どうじや。水の中からさしているその光は、それは、それは見事ごとにかがやきよつて、まん中のところは、とくによく光つとつてわのようじやつたそうな。

それに、その光の先は天にも届とどいどるかと思おもわれるぐらい光つて、その根もどの方は、何か宝物をかくしどるようにも、守つどるようにも見えたんじやと。ところが、それは、いん石でも、金ごう石でもなかつたんよ。集あまつた人々は、その光があんまりきれいのにびつくりして、息が止まりそうになつて、その場にくぎ付けのようになつてもたんじやど。ちいとないだ、そこらじゆうしいんとなつとつたけど、やがて、庄助しょうすけさんが、

「こりやあ、もつたいないぞ。みなものしゆう。早う、里へもどつてお祭りの用意をしなさい

れ。そまつにしたらばちが当たるわい。」

部落のもの知りで有名な庄助さんは、まつ先にわれに返ってこういうたんじやと。

もの知り庄助さんの話じゃ、そのまぶしくて光るもつたないものは、なんと、神さんのご神体しんたいじやということじゃ。

人々は、大急ぎで手分けをして、野菜やさいやお酒の用意をしたり、笛ふえや太こ、踊おどりなどのお祭りのもよおしの計画を立て、にぎやかにお祭りしたんよ。

こうして、このご神体は、当時の樋口部落の人々の手で手あつく祭られたんじやそうな。そして、よそからひよつこり来なされたお客さんの神さんだから、樋口の人々は、だれいうともなしに、「客八幡きやくはちまんさん」と呼ぶようになったんじやと。

ところが、明治時代の初めのころのこと、客八幡さんは、今の三島神社に合わせてお祭りしたんじやと。ちようどこのころ、樋口部落にはいろいろと災難さいなんが続いて、たいそう困こまったんじやそうな。悪い病やまいかはやって、人がつきつきと死んでいくので、樋口の人たちは、偉いお坊ぼうさんに拜おがんでもろたり、ああでもない、こうでもないと相談したりして、どうしたもんかとまようてもとつたんよ。そんなにしてるうちにひよいと、三島神社にお祭りしとる客八幡さんのことに気がついたんよ。

「客八幡さんはきゆうくつじゃわい。ひとのお社やしろじゃけん。」

「もとのところにもどしてあげにやなるまい。ゆつくりくつろいでもらいたいけん。」

「それがええ、い心地ごちちのええところへおむかえしてお祭りしようや。」

ということに、話がとんとんまどまって、やっと、大正の十四年に、今の樋口の中ほどの日吉谷ひよしだにの入り口の小高い丘おかに客八幡さんをおむかえして、お社をつくり、めでたくお祭りすることができたそうなの。

もともと、信心しんじん深い樋口部落の人々のことじゃけん、その後もあつい信こうが続いとるんじやと。八幡さんもそんなわけで、すっかり満足なさっておられるそうなの。そのしょうこになあ、それからというもの樋口部落には災難はなくなつたということなんよ。

樋口の里はなあ、むかしから人々の信こうもかれこれ厚いということを、神さんはすっかりお見通しで、わざわざ樋口の山の谷川に降りて来なさつたんかもしれんどのう。

この話を聞かしてくれたじいさんもなあ、なかなかの信心者しんじんもので、毎日、神さんと仏さんを拜とやまんではお灯明とうみょうをあげているそうなの。そうそう、一生けん命信心する人のところへ神さんは来てくれるんじやと。



観音さんかんのん（樋口）

背せなか中一ぱいに荷物にもつをつけた馬が、お城下じよかに行きよつたときのことよ。

「ヒヒーン、ブルブルブル。」

と、馬が急に大きな声を出して立ち上がつて、前足でもがくようにしたともたら、ばつたんことこけてしもうてのう、ずんだまんま口からあわみたいなもんを出しもつて、

「ふう！」

「ふう！」

と鼻息はないきもあろうに首をふり、足をばたばたさしてひろくもんじゃけん、馬方さんも、かけつけた近所のもんも、どうにもこうにも手がつけられなんだちゆうこつちゃ。

「かわいそうにのう、この馬どうどう死んでしもたがや、何ぞ悪いもんでも食わしたんけ。」

「うんにや、今まで元氣まくつとつたに、急にひろきだして、何のことやらわからん。」

「こないだもなあ、死にやあせなんだけど、病氣になつた馬があつたんぞなもし。」

「そうそう、三月ほど前にや、こけて大けがした馬もおつたんぞな。」

「ほうけ、そりやなんぞおたたりでもあるんかやのう。」

「そうじゃ、おたたりかも知れんのう。よう拝おがんでく

れるお坊ぼうさんを知つとるけん、たのんでみようか。」

ということになってのう。あるお寺のお坊さんに拝ん

でもろたんじゃ。ほしたらそのお坊さんが

「お八幡はちまんさんの下の方に観音かんのんさんがあるはずじゃ。そ

の観音さんが今はだあれもお祭りしてくれんのでお

こつとられる。早ういんで、みんなとお祭りすると

ええ。」

といわれたんで、早速さっそくもってきて、みんなど八幡さん

の下をさがしたんじゃと。ほたらのう、ぼうぼうと生

えた草むらの中に、こわれかけの古ぼけた、こんまい

お社やしろがあつたんじゃそうな。

お社の中には、観音さんとその下にかしの木の箱はこが

置いたったそうな。その箱に、一枚の紙はが張りつけて



あつて、「この箱はぜったい開けていかん。」と書いてあったそうな。

そこで、草を引くやら、お社を直すやらして、ていねいにお祭りしたんじゃそうな。それから、馬が死んだり、たおれたりすることはのうなつたんじゃそうなが、悪いことしたもんが通ると幽霊や、首なし馬なんかは今でも出てくるちゆうこつちや。

ちようどそのころのことじゃつた。今出の人が、家のお倉の中をそうじしていたら、古くさい木の箱がでてきたので開けてみたら、中に巻物があつてのう、「何が書いてあるんじやろ。」と思つてひもを解いて開けてみたら、「久米群の井口という所に観音さんが預けてある。」と書いてあつたんじゃそうな。そこで今出の人は、その巻き物を持って樋口の井口まで観音さんをさがしにきたんじや。井口のみんなは、その巻き物を見てびっくりして、「あの観音さんは、むかし今出にあつたものかやのう。井口の人が預かつたのには、どんなわけがあつたかは知らんけど、観音さんは、もとの所にお返しするのがいつちええこつちやろ。」と思つてお返しすることにしたんじやと。

今出の人は、その観音さんと、かしの木の箱をていねいに包み、背中に負つていんだそうな。今でも八幡さんの下の方には、そのお社の跡が残つとるんじやそうな。

大杉さん（樋口片山）

三島神社のあがり口からちよつと東の山のすそに、お荒神さんこうじんのお社やしろがあるじやろう。お荒神さんちゆのはのう、三宝大荒神さんちゆうて、体が一つで、顔が三つもある神さ
んじや。おくどさんをお守りする神様で、三つまたになつた松の小枝えだに、ごふんという粉をまぶしたものをお供えそなして拝むおがんじや。名前のおり、大変荒あちつばい神様でのう、よく拜むとお守りして下さくだるが、拜みもせずにそまつにするとひどいおたたりがあるんじや。その荒神さんの境内けいだいの北東のすみに、二かかえもあるうかと思われる大きな大きな杉の木が、空高ううにそびえておつたんじや。それを村の人びとは「大杉さん。」と呼よんどつた。ところがある日、だあれも火をつけたもんがおらんのに、大杉さんがメリメリ、ボウボウと大きな音をたてもつて、黒い煙けむりをもくもくと出して燃もえだしたんじやそうな。村のものはびつくりして、水おけや、かまや、のこなんかを持つてかけつけたんじやけど、なんせ高い所で燃えとるんで、どうにもこうにもならんけん、ぼけつとつ立つたまま下から見上げとつただけじゃつたそうな。でも、火の粉がばらばら落ちてくるんで、お荒神さん

のお社や、山が火事にならんように火の粉を消すのに精せいいっばいじゃったそうな。あんま
り大けな木じゃったもんで、三日間も燃え続けたそうじゃ。

「大杉さんもかわいそうに、幹みきだけになつてしまつたのう。」

「あんなに黒こげになつてしても、もう枯かれてしもたわい。」

「あんな大きなんが、枯れてたおれてきたらどうするぞ」

「そうじゃのう。今のうちにみんなで切つてたおしておこうや。」

「お荒神さんの方へたおれでもしたら大事おおごとになるけん、切りた
おしとかないかんぞよ。」

「そじゃつたら、わしとこに、のこも、おのもあるけん、持つ
てこうわい。だれぞ綱つなを持つてこいや。」

と、それぞれが、わあとこにある道具を持ちよつてきて、大杉
さんを切りだしたんよ。ほじゃけど、あんまり大きな木じゃけ
ん、半分ぐらい切つたごろに日が暮くれてしもうてのう。

「くろなつてしもたけんもうやめて、あしたにしようや。」
といつて、それぞれが家にいんだんよ。



翌朝よくあさになって、今日きょうのうちにみんなで片付けかたづてしまおうと、早うから、かけやや、くさびや、綱なわなんかを持って、よんべ目立めだちてしておいた大おほのこを肩かたにかけて、大杉おおいさんまでやってきたんじや。みんなはそれぞれ道具道具をおろし、足場あしばづくりなどしかけたんじやが、大おほのこで大杉おおいさんを切ろうとした人が、大杉おおいさんの株かぶの辺あたりをのぞきこみもって、ぐるぐる回り、あちこちをさすりまわつとるんじや。

「お前は何しよるんぞはよ切らんかや。」

「はよ切れいうたてて、おかしなこともあるもんじや。昨日きのうの切り口きりぐちがありやあせんがや。」
「いいもって、まだ木の株かぶの方かたを手でさすりもってぐるぐる回まわつとるんじやと。」

「うそいえ、きのうわしがこを……ええこりやあどしたんぞ。」

どたまげてしもうて、みんなで切り口きりぐちをさがしたけど、どこにも切り口きりぐちがありやあせん。
おまけに皮かわまでちゃんと元通もととおりについてつたんじやと。

「こりやおかしい。きつねにつままれとんとちがうか。不思議ふしぎじやのう。」

「うんにや、この木きにはむかしから古ふるだぬきが住すんどつたんを見たちゆうもんがおるけん、そりやあ古ふるだぬきがひつつけたんにちがいない。もうまがらんほうがええぞよ。」

ということになって、それから、大杉おおいさんを切るもんがおらんのだそうな。

身代わり狸だぬき
(横河原棧敷さじき)

むかしむかし、横河原の二本松（手ひき松）の
ねきに、清二郎せいじろうというたいへん親孝行おやこうこうな息子むすこと年
老いた母親が住んどった。

この親子は、とても心やさしく、情け深なさこうて
のう。この松の木のことにおったお狸ねこさんに、毎
日毎日、きちんとあぶらげをお供そなえしとったんじ
やと。

ところが、ある日年老いた母親は、それはそれ
は重い病気になって、清二郎の必死かなの看病かんもかい
なく、どうとう死んでしもうた。清二郎は、悲しくて悲しくて、何をする気もなくなつて
しもうたんじゃが、一つだけ、母親がいつもしよったお狸ねこさんにあぶらげを供そなえることだ
けは忘れわすれんと、今日きょうも松の木のところへ、それを持って行つたんじゃ。



二本松

すると、どうしたことじゃ。あぶらげが、ちゃんと供えてあるんじや。清二郎は、「不思議なことよ。おつかあは死んでしもうたのに、いつたい、だれがあぶらげを供えてくれたんじやろ。」

そう言いもつて、その辺を見回したときのことじゃ。

「あつ」

と、清二郎は、大きな声を出したんよ。

おどろいたことに、一ぴきの狸が松の木の根元のところで死んだるじゃあないか。毎日、あぶらげをお供えしとつたというのに……………。かさねがさ

ねの不幸に清二郎は、すっかりしおれてしもうて、

「なんということじゃ。こんな悲しいことがあつてええもんか。おつかあが死に、お狸さんまで

……………」

と言いもつて、力なくとぼとぼと家へ帰つたんよ。

帰つてから、母親に線香せんこうでもあげようと、障子しょうじ



を開けると、こりやどうしたことじゃ。死んだはずの母親が生き返って、ふとんの上にするわつとるのが目にはいったんよ。

「清二郎かえ。お帰り。」

と言う母親の声にも、しばらく口をぽかんと開けていたが、やつとのこととで、

「おつ、おつかあ。」

と言うて走りより、

「おつかあが生きとる。おつかあ、生き返ったんか」

と、清二郎は、大声でさげびもって、母親を強くだきしめ、二人は、うれしなみだを流して喜びあつたそうなの。

清二郎は、

「おつかあが生き返ったんは、きつとあのお狸さんが恩を忘れずに、おつかあの身代わりになつてくれたけんじゃ。」

と言うて、手を合わせて拝んだそうなの。

清二郎と母親は、その後も、よく生きものをあわれみ、親子いっしょに仲良くしあわせにくらしたそうじゃ。あぶらげも毎日ちゃんとあげてのう。

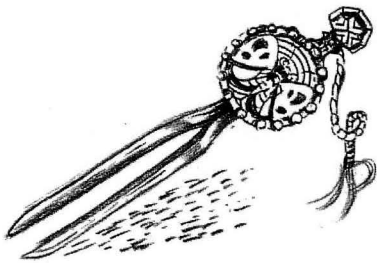
追い出し地蔵じぞう（志津川）

志津川の北の山手に、下池した・中池なか・上池うわという三つの池があるんじや。その池のそば、（温泉病院の上の方）に、花やお菓子かしを供そなえてもらっているお地藏様じぞうさまがあるんよ。そのお地藏様の前には「当村中安全」後ろには「弘化三年良園信女こうか しょうえんしんによ」と刻きざまれているが、それには、こないわれがあるんよ。

今から百四十年ぐらいむかしのことじやそうな。志津川に米田屋よねだやという庄屋しぢやさんがおつたんじやと。庄屋さんとは、村人たちの長おきで、たくさんの田や畑をもつとつて、お金もぎようさんあるお家のことなんじや。そんなお家じやから、やとつている男の人や女の人がぎようさんおつたんじやというとつたわい。

ある日のこと、米田屋さんのおくさんがそれはそれはだいにしておつた銀ぎんのかんざしかんざしがのうなつてしもうたんじや。

おくさんは、顔をまっさおにして、



「ない、ない。あんなに大事にしとったかんざしがない。

それはそれは、たまげて大声でわめきもって、鏡台の引き出しやたんすの中をさがし回ったんじやと。

なんぼさがしてもあの美しい銀のかんざしは出てこなんだんでのう。あの子がとったんじやろか、この子がとったんじやろかと、たいへんな騒ぎになつてのう。どうどうしまいに樋口から来ていた女中さんに罪がかかつてしもうたんよ。かわいそうにその女中さんは言いわけも聞いてもらえず、ひまを出されてしもたんじや。

泣く泣く帰りよつたが、無実の罪を思うと、なきけなくて、つろうてたまらなんだんじやろのう。ちようど中池のところにさしかかった時、死んでうたがいはらそうと、

「神様仏様どうぞお守りください。」

とお祈りして、ドブと池の中へ飛び込んでしもたんじや。

あとでわかつたことじゃが、銀のかんざしは、たんすの上にあつたそうじゃ。それちゆうのも、米田屋さんの家で飼つていたさるが、いけずをしてたんすの上にかくしておつたんじやと。

それからというものは、どうしたもんか白い大きな大きなへびが、毎晩毎晩志津川じゆ

うをはいずり回って、しまいには米田屋さんのうちへやって来たんじゃそうな。そしてのう、どこからともなくつるべで水をくむ音がしたり、つらそうに人が泣いているような声が聞こえてきたそうじゃ。

また、夜道を歩いておって、その大きな白いへびを見たもんは高い熱が出てたいそう苦しんだということじゃ。

米田屋さんは、どうしたことかどこわくなって^{おが}拝んでもろたら、罪もない女中さんを疑^{うたぐ}ったんで女中さんのたたリじゃということでのう。

すまんことをしたと思うた米田屋さんは、すぐに、村の人々にたのんで大きな大きな白いへびのすみをさがしてもらうことにしたそうな。ある晩のこと、白いへびを見つけたんで、そのへびの後をつけていきよったら、へびは、するする、するするとはって、中池へはいつて行ってしもうた。

村人たちは、口々に、



追い出し地藏

「この池じゃ、この池へ身投げしたんじゃ。」

というたり、

「この池で死んだんじゃ。さつそく、お女中のために供養くようをせないかん。」

というたりする人もあつたので、米田屋さんは、高い熱を出して苦しんだ人のことも思うて、

「お女中許ゆるしておくれ。罪もないお女中を疑つたりして悪いことをした。村人もたくさんのものが苦しんだ。わしのせいじゃ。許しておくれ。」

と、願うて、地蔵さんを建てたんじやと。そうして、ねんごろに供養をやつたんじやそうな。

そのかいがあつて、それから後は、へびが出んようになったということじゃ。

志津川村から、あの大きな白いへびを追い出したから、この地蔵さんを追い出し地蔵と呼ぶようになったんじやそうな。また、中池へ白いへびが入り込んだから中池のことを追つて池とも呼ぶんじやがな。

あらうまさん（志津川）

ずっとむかし、志津川の村が戦場になった時の話じやがのう。

あるえらい侍がたいそうかわいがっていた馬に乗って、戦に行つたとき、相手の侍たちにとり囲まれてしもうて、今にも討たれそうになつたんじや。馬は主人の侍をかばおうと思つて、とりまいている侍たちに向かつて行き、けとばそうとしたそうな。ほじやけど、相手の侍たちは勇ましく、あばれまくる馬の体の方々を切りつけたので、侍の命は助かつたんだが、かわいそうに馬はどうとう死んでしもうたんじやと。

自分の身代わりになつて死んだ馬のことを思つと、侍はつろうて、つろうて、たまらなんだんじやろう。真心こめておむろを作つて、馬の供養をしたんじやそうな。

それから戦は続いて、侍たちも戦死してしもうたんじやと。

しばらくたつたある日のこと、作平さんが牛を連れてそのおむろのそばを通りかかつた時、牛がしょんべんをたれたんじや。すると、急に牛は足がすくんで動かなくなつたんじやと。

「牛がのらこいだわい。ここですこし休ませてやるのがよからう。」

と、おむろのそばで作平さんもいっしょに休んどったんじゃがな。

そのうち、作平さんもしょんべんがしたくなつたんで、立ちしょんべんをやつてから、

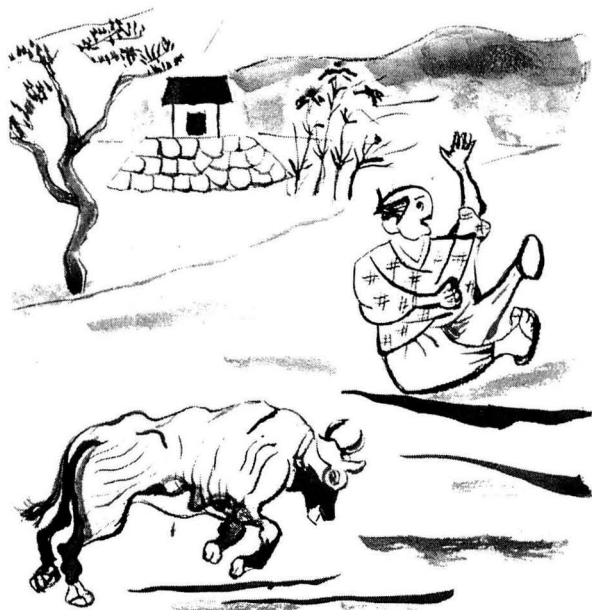
「もういっぶくしようか。」

と、またすわりこんでたばこをのんどつただ、

「もうまあ田へ行かんと、日ぐれまでに仕事ができんわい。」

と、思つて立ち上がろうとすると、どうしたことかきつぱり足が立たなくなつてしもうたんじゃと。

それからというものは、その馬のおむろの



近くでおしっこをしたり、うんこをしたりすると、足が立たなくなったり、牛がすくんで動かなくなったりするようになったそうなの。

また、夜になると、馬はひづめの音をたてて、だれかをさがしもどめているように村中を走りまわったそうなの。

こんなにいろいろと不思議なおこるんで、

「これは、困こまったことじゃ。かわいがってもらったお侍さんも死んでしもうて、だれにも供養してもらえんのじゃろ。」

と、ひとりがいうたら、

「主人思いの馬が、主人をさがして、毎晩ぼんあばれているのじゃろうのう。」
と、もうひとりの村人があいづちをうち、

「こんな不思議なことが起こらんように馬の霊れいをなぐさめようじゃないか。」
と、みんなで話し合つて、あら馬霊社を作り馬の霊を供養したんじゃと。

それから、その馬はおとなしくなつて出てこなくなつたし、また、お社やしろのそばを通つても、足が立たなくなつたり、牛が動けなくなつたりする不思議なことも起こらんようになつたそうなの。

村人たちは、それはそれは喜んで、にぎやかにお祭りをしたり、通りがかりに立ちよつて、拜おがんであげたりしだして、このあら馬うま霊社しんにぎょうさん親したしみをもつて「あらうまさん」とか「あらまさん」とか呼よぶようになつたんじゃがな。



中木原神社

この霊社れいしやは、明治四年（一八七一）まで、今、愛媛大学医学部いま えひめだいがく いがくぶのあるところにあつたんじゃが、明治三年（一八七〇）に、神社は、どの村も一つにまとめるきまりができたんで、志津川の天満神社の東にたたずんでおる中木原神社なかぎ はらじんじやの御殿ごてんといっしよにしてお祭りしだしたそうな。

どだんさんとお和田さん（志津川八反地・庵の下）

これは、今から四百年以上もむかしの天文二十三年（一五五四）九月のことじゃ。岩伽羅城六代の城主、和田三河守通興の子、和田河内守吉盛は、吉山城を居城にして、その力をほこっていたそうじゃ。

この親子は、道後の湯月城（今の道後公園のところ）の河野通宣に仕えておったのじゃが、自分たちの武力をほこって、河野氏を軽くみ、いつも言うことを聞かんと勝手なふるまいをするようになったそうじゃ。

これに腹をたてた河野氏は、どうとう、和田氏を討ちほろぼすことを決め、荏原城の平岡大和守房実に命じて、和田氏の岩伽羅城を攻めさせたんじゃ。（岩伽羅城の戦い）

こうして、両軍とも必死のはげしい戦いをくり広げたのじゃが、岩伽羅城の守りはかたくなかなか勝敗がつかなんだそうじゃ。

——これは普通の攻め方では、簡単には城は落ちない——と思った平岡房実は、和田勢を城の外へおびき出して討ちとろうと考えたんじゃ。

そこで、田窪原たくぼらの林の中に、兵のほとんどをしのばせておき、少しの兵を連れて、再び岩伽羅城を攻めたのじゃ。それとも知らない和田吉盛は、これならすぐにやつつけられると思うて、敵を討ちとろうと、ついに城の外へ打って出たんよ。

平岡房実の軍は、戦うと見せては、退却たいきやくし、また戦うと見せては退却して、ごんごん和田勢を田窪原へとおびき寄せていったんじや。

和田吉盛が率ひきいる軍勢は、勢いにのり、にげる平岡勢を追って、どうとう田窪原まで進んでいってしもうた。こうして、まんまと房実のわなにはまってしまう、かくれていた房実の兵に、四方から一いっ気にとり囲まれてしもうたんじやよ。

おりしも、和田吉盛は、急にお腹はらがはげしく痛みだし、ついには、立つておることさえもでけんようになつてしもうたんよ。家来の中にも、次々とお腹の痛む者が出て、もはや敵と戦うどころではなくなつてしもうた。

和田吉盛は、もはやこれまでとかくごを決め、

「弓矢ゆみやで戦うには負けはしないが、はやり病やまいには負けてしもうた。まことに残念無念ざんねんむねん。わしは、今、腹を切つて死ぬが、わしの死後のちのち、後々の世まで、神としてお祭りをせよ。そうすれば、わしの力で村の者たちをえき病から守つてやる。」

と言ひ残して、田窪原のしげみの中（八反地のどだんさんのところ）にかくれて、切腹^{せうぶく}をして果^はてたんじゃ。

その所に、今では、お堂^{どう}が建てられており、その中に自然石の墓碑^{ほひ}があるんじゃが、一度ぐらいは見たことがあるかやの。

ほてから、和田吉盛の霊^{れい}をお祭りしとるのが志津川のお和田さんでの。お盆^{ぼん}には、みんなで盆踊^{おんぶ}りを奉納^{ほうな}して病氣^{びやうき}にならないようにお願いするんよ。そうすると、その年は病氣をせんそうな。

ある年、この辺^{へん}一帯^{いったい}で、ものすごくえき病^{えきびやう}がはやったことがあるんじゃ。おとなも子供も、次々と、このはやり病のた



めに死んでいったそうなの。

ところが、不思議なことに志津川の人
人は、おおかたこのはやり病にかからず
に助かったんじゃない。みんなは、

「これは、きつとお和田さんのおかげじ
や。」

「そうじゃ。そうじゃ。」

「ああ、ありがたいことじゃ。」

「これからも毎年、盆踊りをして、ようお祭りせんといけんの。」
と言うて、お和田さんのおかげを今さらのように感謝かんしゃしたそうなの。

こんなありがたいお和田さんじゃけんのを。盆踊りをして、はやり病にかから
んようにするとええぞなの。



首なし馬（志津川）

志津川のお和田さんの西の端はしに大きな石塔せきとうが二つ並ならんどろがな。その一つ、そうじゃ、二つに割われたのをくつつけているほうじゃが、よく見ると、首のない馬の絵がかいてあるがのう。それには、こんなお話があるんじゃがな。

むかし、吉山城じようじょうの和田河内守吉盛かわたのかみよしもりと荏原城えばらの平岡大和守房実ひらおかやまとのかみふさざねとの間に戦いくさがあつた時のことじゃがの。吉山城から戦に出かけていく途中、ある偉えらい侍さむらいが乗つとつた馬の首を荏原勢のある家来に切られてしもたんじゃと。首を切られたのは、あのお和田さんの西のところじゃつたんじゃが、その馬は首がないまま四、五丁（四、五百メートルぐらい）走つて、今の中地蔵の近くまでいって、そこではつたりとたおれてしもたんじゃやそうな。

それからというもの、夜よな夜な吉山城から殿様道とのさまみち（重信中学校北門から志津川へ通じる道）を

「カツカツ、カツカツ。」

と、ひづめの音をたてながら、首のない馬が行つたり来たりしたそうな。

ある秋も深まったころのことじゃ。吾平ごへいさんが、夜更よふけにそこを通りかかると、

「カッカツ、カッカツ。」

と、ひづめの音をさせて、こっちへ近づいてくるもんがあったんじや。吾平さんは背せすじがぞくつとし、おそろしくなつて、急いで橋の下にかくれたんじやと。ほしたら、その音が、橋のところまできて、ぴたりつとどまった。そおつと見たら、それは、今までうわさに聞いていた首なし馬じやつたんじやと。

その馬に侍がまたがつとつて、

「人くさい、人くさい。」

と、騒さわぎはじめたんじや。吾平さんは、きもがつぶれた気持ちになつたじやろうのう。橋の下でかたあくなつてふるえておつたんじや。生きた心地こころもせなんだが、一生けん命に、

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ。」

と念仏ねんぶつを唱となえとつたんじやと。

ところが、首なし馬にまたがつとつた侍が、

「念仏だ、念仏だ、かまうな。」

そういうと、馬は、また、

「カツカツ、カツカツ。」

と、ひづめの音をたてて通り過ぎてしまつたそうなの。

ほつとした吾平さんは、

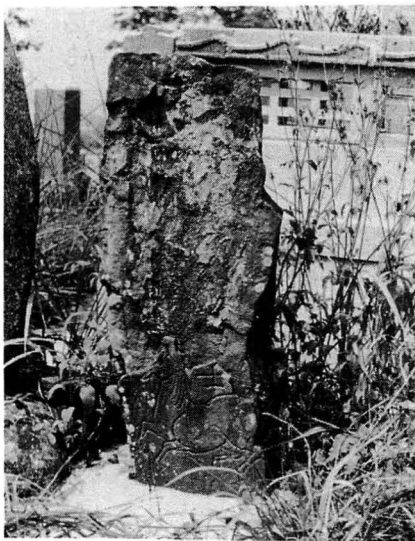
「やれやれ、きもがつぶれよつたわい。ああ、こわや、こわや。」

というて、橋の上に入り、落ち着きをとりもどしたんじやわい。急いで家まで帰つたんじやけど、その後、高い熱病にかかつて、たいへん苦しんだそうなの。

それからというものの、この首なし馬に出会うと、一人残らず熱病にかかつたんじやと。

そこで、村人たちは、この馬と侍の霊れいをなぐさめるためにお墓はかをつくろうと相談したんじやそうなの。

ほして、馬が首を切られたところへ、馬の絵の石塔を建て、馬がたおれたところへお塚つかをつくつたんじやと。



首なし馬の絵のある石塔

石塔を建てたり、お塚を作ったりして供養くようしてからは、首なし馬が出んようになった。
ほじゃけど、それから、村人たちは、夜道を歩く時、たいてい念仏を唱えながら歩い
たそう。



強力大明神のお狸さんごうりき たぬき（志津川弘川）

志津川の天満神社の東の方にお旅所たびしょがあるじやろ。そこに、それは大きくて、枝えだをうつそ
うとしげらせた大きな松の木があつたんよ。そりやあ、もう、そうとうにしげつとつたんで、
夏になると、近くのお百しようさんが野のら仕事の途とちゆう中でひと休みするのには、すずしいて
ちようどよかつたんじやそうな。ちようどよかつたんはよかつたんじやけど、それがいか
んのよ。おとなの人が二ふたかかえするほど大きなその松には、真ん中に大きなほら穴あながあ
いとつて、そこに、狸いぢぢくさんの一族が住んどつたんじやと。それで、ちようどよかつたと、一休
みしよる人やら、ちようど通りかかつた人やらをつぎつぎ化ばかして困こまらせとつたらしい。

ある日、近くのお百しようさんがひよいと見ると、いちめに咲さいたそば畑はたけの中で、女
の人が一人着物のすそをまくりあげて、さも困こまつたような様子で行いつたり来たりしとつた
んじやと。お百しようさんが、

「もしもし、ねえさん、こんなところで何しよんぞな。」

とたずねると、女おんなの人は、ふり向きもせずにもすます着物のすそをからげてから、



「こんなに水が出てしもうて、さつきからなんぼにも渡れんのでどうにもならん。橋はかかつとらんし、渡しはないし、早う渡らんと日が暮れてしもうて家に帰れんようになる。」と、おろおろしもつていうたんじやと。

「もしもし、おなごし、よう落ち着いて見とうみなされ。こりやあ、わしとこの畑じやがな。ただのそば畑じやがな。」

と、お百しよは、こんこんというてきかすんじやけんど、女の人とはなかなか本気にせなんだんじやと。それでも、長いことかかかってお百しよさんは、ようやつと女の人にわかつてもろうたんじやと。「よかった、よかった。」というて、その女の人を見送つたんよ。これは、その大きな松の木に住んどる狸が女の人を化かしとつたんど。

戦争中のことじや、松やにをとるために、この松の木に傷をつけての、あんまりぎようさん傷をつけたもんで、この松の木が枯れてしもうたそうな。それで、しかたなしに、この木を切ることにしたんじや。ところが、不思議なことに、この木を切つた五、六人の木こりさんが、つぎつぎと死んでしもうてのう。どうして死んだんかさつぱりわからんよ。こりやあ、やつぱり拝んでもらおうということになって、横河原の法華さんの祈とう師

に拜んでもろたんじゃと。ほしたら、

「そりゃあ、その大松に住んどった狸一族のしわざじゃあ。」

というお告げがあつてのう。木を切りたおして狸さんの住むところをないようにしたとい
うので、おこつたんじゃそうな。

それからは、そこら辺の人々は、こりゃあすまんことをしたわいと思つて、おことわり
のお祭りをするにしたらそうな。

今は、その松があつたところに切りかぶだけが残つとるじゃろ。この切りかぶは、大き
な松の後に植えられて、また大きになつとつたんが、松くい虫にやられて切つてもたか
ぶじゃと。それは、ついこのごろのことなんよ。

みんなの姉さんや兄さんらも、その大きな松のところを集まつてから水泳に行つたりし
よつたんじゃけんな。三代目の大きな松も、けつこう大きく茂つとつたけん、暑いときは
日かげになつていよいよよかつたそうな。

切りかぶの横には、小さなおむろがあるがな。これが、お狸さんをお祭りしとるおむろ
なんじゃと。この辺の人らで、今でも、おりおりにお祭りしよらい。

かなあみ やぶ
金網を破った絵馬

(志津川出口)
いでぐち

志津川の天満神社の拝殿に、馬に乗った中国風の武将の大絵馬がかかっているがのう。これは、天保十二年（一八四一）に、この辺の大金持ちじゃった米田屋さんが、松山の絵かきさんに教えてもろうてかいた絵を奉納したといわれとるんじやが、なかなかりっぱなもんじや。

この絵馬には、こんな話があるんよ。

むかし、ある村人が田のあぜ道を歩いてとつて、ふと、天満神社の方を見ると、この絵馬にかかれとるんと同じ姿の武将が馬に乗って、どうどうとお宮の中から出て来たそうな。そんなことが、それからもたびたびあつての、村では、

「きつとあの絵馬が、額の中からぬけ出して、武将とともに夜な夜な村の方へ出かけて行



天満神社にある絵馬

きよるんぞな。」

「そうじゃ、そうじゃ。きつとそうにちがいないわい。」

「わしも見たぞな。あの絵馬とそっくりじゃったぞえ。」

と、いつの間にやら、そんなうわき話が広まったそうな。

そこで、村人たちは相談をして、絵馬の上にごくがんじょうな金網かなあみを張り、外へ出られんようにしたんじやと。

「これで大いじょうぶじゃ。」

「そうよ。これなら、もう外へは出られまい。」

そう言うて、村人たちは、お祈りいのをして帰ったんと。

ところが、それからしばらくして、また、馬に乗った武将を見たという、うわきをする者が出てきたので、みんなが天満神社へ行ってみると、不思議なことに、金網やぶが破られとるんよ。

「だれが破ったんぞ。」

「わしや、知らんぞな。」

「困こまったことをするもんじやのう。」

そんなことがあって、また、金網をいつそうじょうぶに張り直したんじゃと。

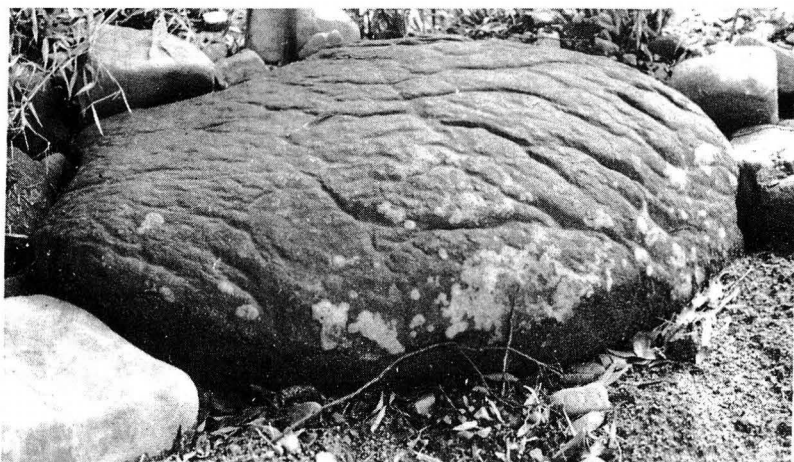
ところが、金網を張った次の日には、もう金網が破られとる。それから、なんぼ金網を張つても内側から、け破ったようになってしまったそうな。その上、馬に乗った武将を見たという村人も、そのたんびに現れたそうじゃ。

どうとう、村人たちは、

「なんぼ金網をつくろうても、もうしょうがないぞな。」
というて、それからは、そのままにしておくことにしたんじゃ。そうして、今さらのように、その絵馬のすばらしさに感心したそうな。

こういういわれがあつての。今でも、天満神社のこの絵馬の金網は、破れたままでほっとるんじゃそうな。





菅公の腰かけ石

かんこう こしかけ
菅公の腰掛石 (志津川・出口)

天満神社にお祭りしてある神様は、菅公という
てのう、菅原道真公よ。境内けいだいの東の方に、平べつ
たい大きい石があるがの、それが道真公の腰をか
けなされた石じゃそうな。

道真公はのう、代々学問で天皇てんのうにお仕えた家
に生まれたんじやが、生まれつき頭のええ上に、
よう学問に励はげんだんで、文章博士もんじょうはかせという日本でい
ちばんえらい学者になつたそうな。

そじゃけん大勢のお弟子でしさんから敬うやまわれ、した
われたそうな。また、たくさんの本も書き、いろ
いろな手柄てがらもたてたんで、宇多天皇うだに認めみとられて、
とうとう右大臣うだいじんというえらい大臣になつて、正し

くりつぱに国を治めていたんじやと。

その時の左大臣は二十九歳の藤原時平ちゆう方じや。藤原家は代々高い位をもらうてい
る家柄じやけん、若うても左大臣になられたんじや。

宇多天皇は、天皇の位をゆずられて、上皇となつておられたが、道真公の方が年も上じ
やし、学問にすぐれ、りつぱな政治をするので道真公を大事にしよつたんよ。

そこで、自分の思う通りにならない時平は、道真公がじやまになつて、まだ十七歳の醍
醐天皇にありもせん悪口を、もつともらしゆう告げ口したんじや。天皇はそれを信じられ
て、道真公から大臣の位をとりあげ、遠い九州の山の中の大宰府に流しものにすることに
きめたんじや。道真公は一言の申し開きも許されずに罪人となつて、さみしい大宰府の副
長官に格下げされることになつたんじやが、副長官というてももう、みんなに監視されて
おる中で、まるでろうやの中のようなくらしになるんじや。

道真公は仕方なく、わずかのお供を連れられて、京の都を立ち、船で瀬戸内海を下る途
中しけにあつて、今治の桜井の浜に船を着けられたんじや。ほじやけんそこには今、綱敷
天満宮があるそうじやが、そこから歩いて重信町のまどの峠を越えられてのう、樋口から
志津川へこられてお休みになられたんじやそうな。

そのころの志津川の人は、山すその「お和田さん。」のある
とこ辺に住んでおったそうな。そして今の天満神社の辺りか
ら南は広い川じゃったそうな。道真公は、その川の岸の大き
な石の上に腰こしをかけたられ、旅のつかれを休めながら、西の空
をあおぎ、これから九州の筑紫つくしの国へ流されていく身の上を
悲しんでのう、

しばしいて やすらう心 鎮川しづかわの

流れゆく身は つくしのの果ては

と、歌をよまれたそうな。お供の人たちもみな悲しんで、涙
を流し、この石をぬらしたそうな。その石が、この腰掛石こしかけいしじ
や。このお歌からこの辺のことを「しづ川。」というようにな
ったんじゃが、いつのまにか「志津川しづかわ。」となつてしもうたそ
うな。そのあと松山市の久保田の履脱くつぬぎ天神のあるところ
で、しばらく休まれてから大宰府へ旅立たれ、大宰府へ着かれて
からは、都みやこのことをなつかしみながら亡なくなられたそうな。



ごうりんさん（志津川）

むかし、この地方で戦いくさがあつたんじや。志津川の吉山城主よしやまと荏原の城主との戦いでな。この話は、その戦いくさをしている時のことじやが、吉山城主わだ、和田河内守吉盛の家来が目を矢やでうたれたことから話が始まるのじや。

目を矢でうたれた家来は、矢を抜ぬこうと、必死で矢をひっぱつたんじやけんど、なかなか抜ぬけなんだんじや。

矢を抜ぬこうと思つてはいずれまわつとる家来をものかげからじつと見とつた村人たちは、荏原の侍さむらいたちにおじて助けに行くことはできなんだんじやそうな。

そこへ、刀をもつた荏原の侍たちがどやどやとやって来たんじやと。そして、元気のええ声で「おい、まだまだ生きているものがあるぞ。」



志津川グランドの南にある五輪塔

「吉山の家来だぞ。それ、やつつける。」

と、侍たちは、口々におらんで、刀をぬきながら、目に矢のさきさつている家来に向かつていったんじやと。

そこで、目に矢のさきさつている家来は、カのかぎり戦つたんじやけど、相手が多くて、なんぼたおしても、後から後からかかつてきて、どうにもならず、どうとう、切り殺されてもたんじやと。

ものかげから、じつとその様子ようすを見ておつた村人たちは、その死しがまがあまりにもかわいそうだったので、そこへなきがらをほうむつてあげることにし、供養くようの石塔せきとうを建てたということじや。

石塔せきとうは、五輪塔ごりんとうでの、そこから村人たちは「ごうりんさん」と呼よぶようになったんじやそうな。

それから長い間たつたある年のこと、村に目の病気がはやつたんじや。次から次へと、村人たちの目が赤くなつたり、目やにが出たり、ひどい人は、目が見えんようにもなつたんじやと。

村人たちは、考えたすえ、ごうりんさんをお願いすることにしたんじやそうな。ほした

ら、すぐのまに、村人たちの目は、次々と治なおってし
もうたということじゃ。

ほじゃけん、その後も、村人たちは、目の病気に
なると、ごうりんさんに病気が治るようにとお願い
するようになったんじゃ。お願いすると必ず治るの
で、後には目の病気の守り神といわれるようになった
たんよ。

目の病気が治ると、お礼にまえかけをかけたたり、
五色ごしきの紙を祭ったりしたそうな。

この五輪塔は、志津川の殿様道とのさまみち（重信中学校の北
門から志津川へ通じる道）にそったところにある泉
のすぐ南、こんもりと石を積んだ上に乗つとるで。



西岡にきた八幡さん（西岡河ノ内）

むかしむかし、岡八幡の神さんは、川の中でそりやあ見事に光りかがやいているところをな、西岡の人に見つけられたんじやと。

この神さんは、山の内の岡にあつた八幡さんでな、ある年の大洪水で西岡の土地へ流れ着いてきとつたんじやと。

それでな、今も、この神さんのことを岡八幡さんと呼んごるんじやと。

この神さんを見つけた人は、自分の家の庭にお祭りし、とても大切にしたんよ。そしたら不思議なことが起こつてのう。夜になるとどうもせんのに、家のどこかでギシツギシツという大きな音がしたんじやと。その家じゃあ、每晚毎晩、不思議な音が出るもんじやけん、これはどうしたことじやろうなあ、何ぞようないことでも起こるんじやろうかと心配になつて、今までより念入りに庭の神さんをお祭りしたそうな。

そしたら、これまた不思議なことになあ、ある晩のことじゃ。なんと、その家の主人がぐつすりと寝とつたら、その夢まぐらに神さんがお立ちになつて、



「ここは、どうも、見はらしもようないし、い心地もあんまりようないけん、もつと広々
とほうぼうが見わたせるような小高いところに祭るように。」

というたんじやと。

それで、その家の人は、ははあ、このごろ、どうもせんのに聞こえていた不思議な音の
正体は、神様だったのかとやつとわけが分かったんよ。そこで、この家の人は、村の人ら
にわけを話し、手伝つてもろうて、今の西岡の東はしに近い小高い土地にお祭りするよう
にしたんじやと。それから、今まで出ていた不思議な音は、ぴたつと止まつて、もう、
いっぺんも聞こえたことはなかつたど。不思議じやなあ。

それから、この神さんが流れ着いた^{あた}辺りの土地をなあ、今では、岡の宮と呼んどるんよ。

今の、岡八幡さんのお社は、明治四十年に新しく建てかえられたんじやと。その拝^{はい}殿^{でん}
は、^{えま}絵馬^{はいく}や俳^{はい}句^くの額^{がく}がかかつとるんよ。これはな、古い社殿にあつたものにちがいないん
よ。

今は部落の子供たちが、ししまいやさんばそうのけいこを熱心にしよるけん、秋祭りの
ときには、部落から見物人も大勢出てきてたいそうにぎやかなんじやと。



七霊之合碑

七社権現ごんげんと七人みさき

(西岡)

むかし、西岡の人々は、今、自衛隊じえいたいの演習地しゅうじになつてゐる丘の上の方に住んでおつたんじゃさうな。自衛隊の官舎かんしゃが建ちならんでおるじゃろう。そのすぐ東の草原の中に、ぽつんと細長い石が建つておるんじやが知つとるかのおう。その碑ひには「七霊しちれいの之合碑ごうひ。」とほりこまれてゐるんじや。

むかし、三木新三郎という七人家族の一家が、楽しくくらししておつたさうじや。そのころは、今のようにな草の原ではのうて、松の木やどんぐりの木などが生いしげつておつてのう、きじやうさぎなんかもたくさんおつたんじやさうな。

ある日のこと、お殿様とのが、家来たちをつれて、「おたか狩りが」ちゆうてのう。たかという強い鳥とこをばうて、小鳥やうさぎをとる狩りに来られたんじや。たくさんえものをとつたん

じゃけど、夕方近くになって、飛び立ったたかが一羽、どこへ行ったんか姿が見えんようになつてしまつたんじゃ。家来たちがあつちこつちどきがしまわつたんじゃが、どうしてもよう見つけんので、あきらめて帰つてしまたんじゃ。

その時、仕事を終えた新三郎さんは、子供たちのまっているわが家へ日ぐれの道を急いでおると、今「七霊之合碑」のたつている辺りにさしかかったとき、一羽のたかが草むらの中にじつとうずくまつておつたんじゃ。そおつと近寄つていったけどたかは身動きもしないのでうずくまつておつたんじゃ。手をのばしてそつとつかまえてしまつたが、やつぱりじつとしておつたそうなの。おたか狩りのたかは、たいへん人になれているので人間をおそろしからなんだんじゃ。

たかをつかまえた新三郎さんは家に帰つて、お腹をすかしてまっていた五人の子供たちの顔を見ると、急に家の裏へ行き、たかを殺して毛をむしり、おしるに入れてたいてのう、みんなでおいしい、おいしい、いいもつて食べてしまつたんじゃ。

その翌日のことじゃ。新三郎さんの、こんまい子供らが遊んでおつたのに、あんまりひろいて遊んだもんじゃけん、のどがかわいてしもうて、近所へいき、

「おばさん、水飲ませて」

「おやすいことよのう、水ならなんぼでもお飲みよ。」

と、湯飲みに水を一ぱいついでくれたんよ。そしたら、ごつくん、ごつくんとそれはうまそうに飲んでしもうて、

「ああ、うまかった。」

「どうしたん。よつぽどのどがかわいとつたんじゃのう。なんぞええおごちそうでも食べたんけ。」

「うん、あのなあ……………」

と、よんべのたかじるのうまかったことを話してしもたんよ。それを聞いた近所のおばさんは、「これは大事おおごとこうれんじじゃ。」と、新三郎さんどこへやってきて、

「新三郎さん、大ごとじゃがな。あんたらはよんべたかを食べたそうじゃけど、そのたかはお殿様のたかじゃがな。きのうもお役人さんが、さいさいたかをさがしに来たんぞな。食べたりましたんがわかったら、あんたら殺されてしまふがな。困こまったことをしたもんよのう。」

と話したんじゃ。さあ新三郎さんは腰こしが抜ぬけるほどびっくりしてのう、家のもんをひき連れて、夜のうちにこつそり山之内のおくの方へにげていったんじゃ。

一方、お役人たちは、また、たかをさがしにきて、とうとう新三郎さんの家のねきや、やぎねの下でむしられておったたかの羽根を見つけてしまったんじゃ。

「新三郎はどこにおる。だれか知らぬか 新三郎を見かけたらすぐにいつてこい。かくしたりすると打ち首だぞ。」

といわれても、村のもんは、新三郎さんがどこへいったもんやら知りもせず、役人の言葉にすくんでしもうて声も出なんだそうじゃ。

そのことは、山之内の人へも伝わっていき、谷のおくに住みついている一家が新三郎さんたちであることもわかってしもうたんじゃ。それで山之内の人らは相談して、これはかくしとおせるもんじゃない。かくしとつたら大事になる、というこ



とになって、恐る恐るお役人さまに訴えて出たんじゃ。かわいそうに新三郎さん一家は、どうどうお役人にめしとられてしもうたんよ。

お役人が、新三郎さん一家七人を連れもどし、子供らから先に打ち首にしようとするど、「お役人様、最期さいごのお願いです。わが子の死ぬのを見るのはつろうございます。どうか、わたしから先に打ち首にして下さい。」

と、新三郎さんがお願いしたそうな。そこで新三郎さんから先に、次々と七人とも首を切られたんじゃそうな。かわいそうなことよのう。

役人たちはその下の方にあつたつばえつばえで刀の血を洗あうてひきあげたそうな。今はそのつばえはないけど、つばえのあつたところは残つとらい。

むごたらしい殺され方をした人は、仏様ほとけによくなれず、みさきになって六人の人を殺すんじゃそうな。そしたら仏様になれるんじやと。そこでのう、七人殺されたんじやけん、七人のみさきは四十二人も殺すようになるんじや。西岡の人たちは四十二人も殺されるよなことがあつてはいかんけん、新三郎さんら七人の霊れいを拝おがんでなくさめ、人を殺さずに、早く仏様になつてもらおうよう、七社権現さんへお祭りして拜おがんごるんじや。おかげで、西岡の人々はまだだれも七人みさきに殺された人はおらんそうじや。

みなみよしいちく

はなし

南吉井地区にのこる話



ばなしちず か話地図

- ① どじょう亀さん
- ② 蛇のたたり
- ③ 茶 縞 狸
- ④ 菅公の腰掛石
- ⑤ 橋の下の泣き声
- ⑥ おさえさん
- ⑦ 高 坊 主
- ⑧ 一升五合シャリシャリ
- ⑨ 弘法大師の二つ石
- ⑩ お 産 狸



みなみよしいちく
南吉井地区

- ① 四角なむくの木とむく宮
- ② 立石狸
- ③ 牛鬼塚
- ④ 牛淵の村移りと経塚
- ⑤ お鷹殺しと七人みさき
- ⑥ 六十歩松
- ⑦ ほごつり
- ⑧ 長塚の石地藏
- ⑨ 雨乞い面の由来
- ⑩ 三高松



四角なむくの木とむく宮さん（見奈良柚寿之木）

見奈良のお天王さん（素鷲神社）の南の方に、なんぞいわれがありそうな、大きなむくの木があらう。

この木は、幹が四角になっているんで、みんなから、不思議がられとるんよ。

もう四百年くらいはたつとると思うが、緑の葉をいっぱいつけたころには、昼でも暗うてのう、人びとはおそろしがって、あんまり近よらなんだそうな。

その木の下には、むく宮さんというて、小さなお宮があらう。

このむくの木には、こんな話があるんよ。

むかし、ここに、頭の髪はぼうぼうで、いっぺんもふるに入つたことのないような、きたらしい老人が、ぼろぼろの着物を着て住んどつたが、だれも、男じゃろるか女じゃろるか見分けられなかつたそうな。あんまりみすばらしいし、ものもいわんで、みんなはおそろしがつとつたんよ。

そんなにおそろしそうな、老人じゃつたけど、どことなく、心のやさしそうな人にも

見えたんと。

ある日のことじゃった。それはそれはだいな
書きつけをうきしてしもうた村の人が、

「困こまったなあ。あの書きつけがないと、わしや生
きとれんが。」

と泣なきながら、行ったり来たりしとると、

「これ、村の人、おまえなんで泣いとるんぞ、そ
のわけをいうてみい。」

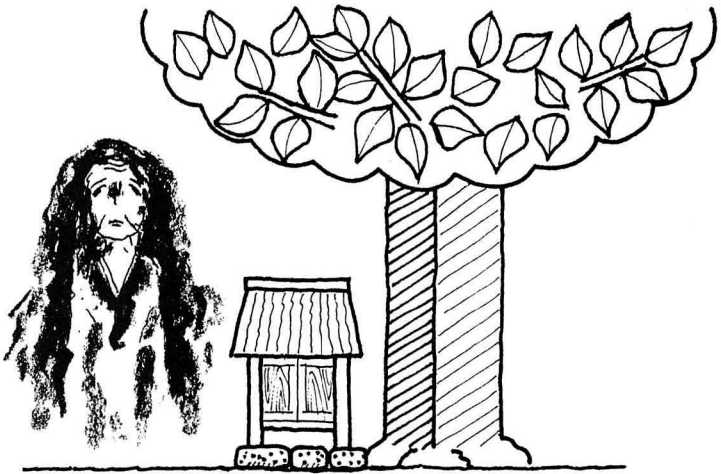
とやさしく、老人は、声をかけてくれたんよ。

村人が泣きながら、そのわけを話すと、

「よし、わしがうらなつてやるけん、もつと、く
わしく話してみい。」

どこの老人は、自信がありそうに、相談にのつて
くれたんじや。

老人はじいっと、呪じゆもん文をいうとつたが、やがて、



「その書きつけはのう、お前の家にあるぞ、もう三日したら、出てくるけん心配するな。」と、親切に教えてくれたんよ。

村人は大喜びで家に帰り、およめさんや家のみんなに話し、この日がくるのをまつとつた。すると、どうじゃろ、老人がいうた日に、ちゃんど出てきたんと。

このことが評判ひょうばんになつてのう、村人たちは、なにか、困つたことや心配なことがあると、すぐに行つてうらなつてもらふようになつたんよ。それがまたよう当たつたんじゃ。

村人は、

「お世話になるばかりじゃいかんのう。」

というて、ごちそうを持つて行つてあげたり、着物を作つてあげたりするようになつた。

このように、みんなと仲なかよくなつていた老人じゃつたが、ある日、近所ちかところの人が、

「おはぎがでけたけんお食たべんか。」

というて持つて行くと、

「ありがとう。これはうまいのう。いつもありがとう。」

と、おいしそくに全部食べてしもうた。そして、よわよわしい声でぽつんとひとこと、

「わしは、もう死ぬんじゃ。一か月後には死ぬんじゃ。お世話になつたのう。」

と、自分が死ぬ日をいうたんと。これをみんなに話すと、

「あの老人、気でも変になつたんじゃないのか。」

「自分の死ぬ日なんか、わかるもんか。」

と、だれも信用せなんだ。ところが不思議なことが起こつたんよ。一か月後にこの老人は、灯ひが消えていくように、静かに死んでいったんと。

村人は、びつくりするやら残念がるやら、みんな泣いたそうじゃ。

「あの老人は神様じゃ、神様じゃけん、何でも知つとるんじゃ。」

「みんなで、お葬式そうしきをしてあげないかんのう。」

というて、むくの生なまの木で棺かんをつくり、お葬式をしてあげたんよ。

ところが、不思議なことがおこつたんじゃ。その棺の四すみから、木の芽めが出てきたんじゃ。そして、四本の芽はずんずん大きくなつて、おたがいが、兄弟のようにだき合つて、四角い幹になつてしもうたんと。

村の人たちは、この老人が神様のような力を持つていたことにおそれ、また、お世話になつたご恩おんにむくいるため、お宮をつくつてお祭りすることになつたんじゃ。

その、老人の霊れいを祭つたのが、この、むく宮さんといわれどるお社やしろなんよ。

立石狸たていしだぬき
(見奈良柚寿木ゆすき)

むかし、今の東温高校の門の前の道はたに「金毘羅道」を示す道しるべが立つとったんじゃと。

それで、村の人らは、この辺りのことを今でも「立石」というとるんよ。

昭和の初めごろまでは、この辺りには、相原屋敷が一軒あるだけで、一面雑木林に囲まれたさびしい原じゃったんじゃと。

「立石狸」は、この辺りに住みついとって、人をよう化かすので有名な狸じゃった。

ある日のこと、いつものように、松前からおたたさんが、頭の上へごろびつをのせてお魚を売りに来た。

志津川の方へ行こうとして、この辺りに来たとき、いつも通りよる道がわからんようになつたんと。

あっちへ行ったり、こっちへ行ったりしよつたら、どうどう大きな川のところへ出てしもうたんよ。



「おかしいなあ。」
と思ったが、おたたさんは橋がないので仕方なく、着物のすそをからがせて、お魚を入れた
ごろびつを頭の上にのせたまま、そろりそろりと渡り始めた。
わた

ところが、なかなか向こう岸につけん。川もだんだん深うなってきたので、なりふりかまわずよけいにすそを高うからげて、川の中へどんどん入って行こうとした、その時、「おばさん、なにしよるんぞな。」

と、声をかけた人がおった。

ふり返ってみると、顔見知りのお百姓ひやしやうさんが立っておった。

「川が深いもんじゃけん。」

と、返事をするとお百姓ひやしやうさんは、不思議ふしぎそうな顔して、

「おばさん、川でて、ここは畑はたけじゃがな。」

そういわれておたたさんは、周りまわをよう見

たら、今まで川だ川だと思つとつたところは、

そこら一面に白い花はなが咲さいとるそば畑はたけじゃった。

ふと気付いて、頭あたまの上のごろびつの中を見

るとお魚ういが一匹ひきもおらなんだ。

おたたさんは、立石たていしだぬきに化まかされとつ

たんじゃと。



「金毘羅道」を示す道しるべ

牛鬼塚 (田窪水木)

香積寺こうじくじの北の田の中に、土まんじゅうどのようなお塚つかがあつて、その上に五輪塔ごりんとうが祭つてあるがな。あれを牛鬼塚うしおにづかいうて、近づいたら病氣になるといわれとるんよ。

むかし、位の高いお公家くげさんが、大勢の家来を連れて、道後の湯で旅の疲れをいやしとつたんじやと。

ある晩ばんのこと、お公家さんの寝ねている部屋の辺あたりにあやしげな人影かげがしのびより、中の様子をうかがつてゐるんよ、お公家さんは、やにわに刀のさやははらつておどり出て、「あやしき者め、何やつじや。名をなのれ。」

と、いうと、

「問答もんとう無用むよう。お命をちようだいに参上まへした。かくご召めされい。」

と切りつけてきた。お公家さんは必死で防ふせいだが二人に一人、どうとううでに傷きずを負おい、もうこれまでかと思つたとき、おそばづきの家来たちがおつとり刀でかけつけ、二人の賊ぞくはたちまち切り殺されてしもうた。

「お頭様。大丈夫でございますか。」

「うむ。傷は浅い。それよりも、くせ者は何者か。」

そこで、家来がくせ者の黒装束をむしりとると、意外なことにそれは、二人ともお公家さんの重臣な
んじゃ。お公家さんは、はじめて自分に謀反をくわ
だてる者がおることに気がついたんじゃと。

そこで、すぐ重臣たちを集め、その晩のうちに宿
をぬけ出す準備に取りかかったんよ。

やがて、四、五人の家来に守られて宿をぬけ出し
た一行が、村境まで来たとき、お公家さんは、さき
ほどの傷の痛みがひどくなって、もう一步も歩けん
ようになったので、家来たちは、近くの百姓にたの
んで、牛をわけてもらい、それに乗せることにした。

ところが、一行がこの田窪原まで来たとき、お公
家さんの乗った牛があばれだしたんよ。これは、ど



うしたことかと、暗がりをよく見ると、子牛ほどもある山犬が五、六匹、牛を取りまいて、今にもおそいかかつて来そうな気配なんじゃ。家来たちは刀をぬいて山犬を切り殺そうとするんじゃが、なにさますばしこくてどうにもならんのよ。そのうち、一匹の山犬が、とうとう牛の横腹に食らいついたらしい。

ちようどその時じやった。山犬に向かっていた家来の一人に、お公家さんがいきなり牛の上から切りつけたんよ。

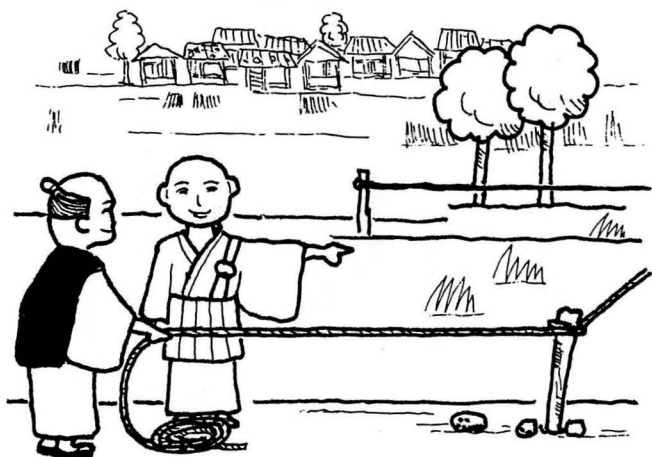
「何をなさいます。お頭様。」

と、さけんで家来はばったりたおれてしもうた。血のにおいをかいだ山犬は、飢えたおおかみのようにその家来に群がった。

「許せよ。」

お公家さんは、そのひと言を残して、その間に他の家来たちと無事にげのびることができたんよ。

後でこの事を知った村人たちは、山犬のぎせいになった家来をほんとうにかわいそうなことをしたもんじゃとあわれに思い、お塚を作って手厚くほうむり、五輪塔を建てて祭つてあげたということじゃ。それが、この牛鬼塚のいわれなんじゃと。



牛渕うしづちの村移りうつと経塚きょうづか

(牛渕経塚)

今の道音寺どうおんじは、むかし浮嶋神社うきしまの南の方にあつた
 んじやと。そのころの道音寺は七堂伽藍がらんを備え、支
 院いんが六十もあつた大きなお寺じやつたそうな。

今も、その名残りなごのお寺の名前が地名として三十
 三だけ残つとるんじやと。

今から約四百年ほど前の、天正年間てんしやう(一五七三〜一
 五九一)の事じやつたそうなが、この地方で大きな
 合戦があつてのう。そのときにお寺の建物は、みん
 な焼けてしもたんじやと。また、そのころは重信川
 がよう洪水こうすいになりよつてのう、人家や田畑をおし流
 して、いっつも川筋すじが変わりよつたんよ。

今の牛渕部落はのう、もとの道音寺のあつた古屋敷ちゆうどころにあつたんじやが、毎年のように何回も洪水に見舞われるもんじやけん、今のところへ村移りしたんじやそうな。そして、そのときに道音寺も今のところへ建てられたんじやと。

村移りについては、こんな話が残つとるんよ。そのころの牛渕村の庄屋じやつた相原善兵衛ちゆう人が、道音寺の住職じやつた俊齊上人と協力して、移転地の屋敷は四すみに四方固めをし、八つ縄を引いて、屋敷と道路をごばんの目のように区切つてから、村人を移転させるようにしたんじやと。

今の牛渕部落が他とちごうて、道路や家なみがきちんとなつとるのはそのためじやそうな。しかし、村移りというのは、そう簡単にはいかなんだとみえて、始めたのは、天和二年（一六八二）で、終わったのは天保八年（一八三七）というから、百五十五年間もかかったことになるんよ。

そして、この村移りのとき、村人たちは、合戦で焼け残つた道音寺の品々を、一か所に集めて塚をつくり、ていねいに納めて供養したということじや。それが経塚ちゆうもんじやそうなが、浮嶋神社の南の方の田の中に、小高い塚が今も残つとらい。

お鷹殺しと七人みさき（牛渕五月田）

浮嶋神社の南の田の中に、「七人みさき」と呼んぶる助之丞一家のお墓があつての、ここに、次のような伝説があるんよ。

むかし、助之丞、右左衛門という兄弟の武士が、戦をのがれて、この土地へ来たんよ。兄弟は、武士を捨て百姓になつて、田畑を開き、今のサヤの神さんの南側に、新しく家を建てて住みついたので、「新開屋敷」と呼ぶようになったんよ。

松山城主の蒲生公は、お鷹狩りが好きで、たびたび牛渕へおいでになつておられたそう
な。

ある年、殿様が、牛渕へお鷹狩りにおいでになられたとき、大事にしとつたお鷹を浮嶋神社付近で、見失つてしもうた。すぐに家来や村人たちに命じて、お鷹をさがさせたが、なんぼにも見つからなんだ。けど、やつこのことで見つけたときは、お宮の南東のほうの田で死んどつたんよ。

このことを知つた殿様は、たいそうおこつて、お鷹を殺した者をさがせと、きつくお命

じになり、見つけた者には、ほうびをとらすといわれたんよ。

助之丞の家には、助作すけさくという男が働いとつたが、ほうびに目がくらんで、

「私の主人が、お鷹をうち殺しました。」

と、うそのうつつたえをしてしもうた。

これを聞いた殿様は、

「何たるふとどき者、七人殺せ。」

といわれて、早々とお城へお帰りになられたんよ。

このことは、たちまち村じゅうに広まって、大きわぎになった。村人はすぐ助之丞一家の命ごいをしたが、一人の子供以外、かわいそうにも、全員殺されてしもうたんよ。

そのとき、子供の命を救ったのは、浮嶋神社の神主かみぬし相原能登守あいはらののどのかみだといわれとる。三男で三歳さいになるこの子供は、生まれつきたいそう利口りこうじゃったので、村人たちは、いっつも感心しておったんじやと。

能登守は、助之丞一家が殺されることを知り、この子供だけは、何とか助けてやりたいと思ひ、着ていたドテラの下に、こっそり子供をかくし、家に連れてもどつたんよ。

そして、はきみ箱に子供を入れ、下男げなんに命じて、土居村（現在松山市）の万福寺まんぷくじににが

し、和尚おしやうさんに、子供を育ててくれるよう頼たのんだそうな。
さて、殿様がまたお鷹狩りにおみえになられた。そのとき、ろう屋の門に七人のさらし首があるのをごらんになられ、



「これは、どうしたことじゃ。」
と、おたずねになった。

「先日のお鷹を殺した百姓一家の者でございます。殿がそのとき、七人殺せとお命じになりましたので。」

と、家来がお答えしたんよ。

これを聞いた殿様は、顔色をかえられ、

「たわけ者め。一人殺せとは申したが、七人殺せとは申さなんだぞ。」

と、おっしゃって、たいそうごきげん悪く、お鷹狩りもせず、お城へ帰ってしまわれた
そうな。

このことがあつてから何十年かたち、命を助けられた子供も、万福寺の住職じゆうしやくになつた
と。

ある日、年老いたこじきが、万福寺の門前に立ち、食べ物をめぐんでくれるよう、頼ん
どつた。住職が出て、なにげなくこじきの顔を見ると、どこかで見覚えのある人じやつた。
こじきは、しばらく住職を見ていたが、とつぜん逃げ出して行つた。それは、父の助之丞
をお鷹殺しのはん人であると、うそのうったえをした、助作のあわれな姿すがたじやつた。

六十歩松（牛渕牛頭守）

牛渕うきしまじんじやの浮嶋神社のうらの方に、この近くまで、大きな松の木があつたんよ。

学校帰りの子供たちや、村の人たちはのう、この木の前にくると、必ずというてええぐらい立ち止まって、上を見あげたり、木の下で休んだりして、みんなに親しまれておつた木じゃつたんよ。

大同四年（八〇九）というけん、今から、千二百年ぐらい前になるかのう。この牛渕に、弘法大師こうぼうだいしさんが開いたと伝えられる、道音寺どうおんじという、古い大きなお寺があつた。今も道音寺はあるが、むかしの道音寺は、それはそれは大きかつたそうなの。

天正（一五七三〜一五九二）のころ、この辺りあたで、大きな戦いくさがあつてのう、七堂伽藍しちどうがらんと、支院しえんが六十坊ぼふもあつたという、この大きな道音寺は、焼けてしもうたんよ。

信仰心しんこうのあつかった、村の人たちは、

「わしたちを守つてくれている仏様ほとけが、焼けてしもうた。仏様、おきのどくにのう。」

「戦でなくなつた兵士は、わしたちでお祭りしようじゃないか。かわいそうなのう。」

「戦はいやじやのう。死んだ人たちにも子供やおくさんがおろうかのう。」
と、みんなで悲しんだり心配したりして、仕事も手につかんだそうな。

そこで、村の人たちは総出で、仏様の灰や、戦死した人たちを運んで、このところにお祭りしたんよ。そして、この前を通る人は必ずお参りしたんと。

そこに植えた松がすくすくと大きく育ち、松のかげが六十歩もの広さになるので、その名がついたんじやそうな。(一歩は約三・三平方メートル)

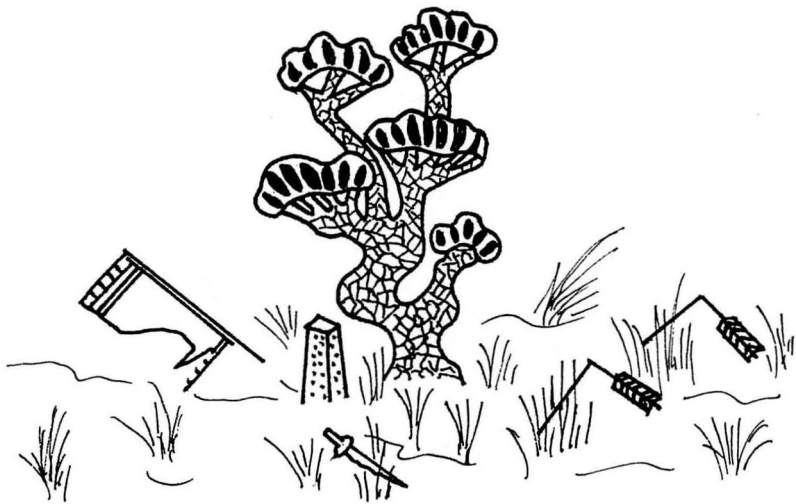
この松は、別の名を「御陵松」ともいうとらい。

今から六百年ほど前はなあ、南北朝の時代というて、朝廷も武士も、南朝と北朝に分かれて長いこと戦争が続いたんよ。

南朝の末ごろの天皇に長慶天皇さんという方がおられてのう、この天皇さんは、気のどくな悲劇の天皇さんじやつた。

力の弱い南朝方をもり返そうと、今の越智郡、玉川の奈良原宮から湯山に入り、この牛淵にこられたんよ。

そして、味方になる兵士を集めて戦ったが、
敵方てきがたの力が強うて、長慶天皇さんの南朝方は
負けてしもうた。天皇さんは、文中ぶんちゆう三年（一
三七四）徳威原とくいばらの激戦げきせんで負傷かしょうされ、いろいろ
と手当をしたけれど、とうとう近くの法水院ほつすいいん
でおなくなりになったんよ。村人たちは、こ
のお気のどくな天皇さんを、てあつく浮嶋が
原にほうむって、お墓はかに、松を植えたんじや。
この松が大きくなって、牛淵じゆうを、や
さしく見守しっているように、高く、そして元
氣しよく四方しほうに枝を広げていたんよ。
村の人たちは、天皇さんをほうむったので、
「御陵松」と呼よぶようになったんよ。





ほごつり（牛淵牛頭守）

むかし、浮嶋神社の辺りは家が少なく、木がうっそうとしげつとつて、さみしいところじゃったそうな。この神社の裏道は、ほごつりが空から下りてきて、人をつり上げるので、人々はこわがつつたんじやと。

ある晩のこと、一人の男が、松山のけつこん式に招かれたんじやが、つい、おごちそうを食べるのに夢中になつてしもうた。残つたおごちそうを、家族に食べさせたいと思い、帰りにおりにいっばいつめてもろたんよ。

ちようどやみ夜なので、ちようちんに明かりをつけてもろうて、家へ急いだ。

やつこのことで浮嶋神社の近くまで帰ったとき、ろうそくが燃えつき、明かりが消えてしまつた。けれども、もう少しで家へ着けるし、なれた道じゃけん帰りを急いどつたんじやと。

男が、ちようど神社の裏へさしかかたとき、なまあたたかい風が、すうつと吹いてきたんじや。男はうす気味が悪くなり、立ちすくんでしまつた。するとそのとき、音もなく、空からほごが男の前へ降りてきた。男はびっくりぎようてん、こしをぬかしそうになるほどたまげたんよ。そして、

「だれか、助けてくれ。」

と、さけんでにげ出したんじやと。

けれども、ほごつりは男を追わえ、あつという間に空へつり上げてしまつたんよ。

ざわざわゆれる麦の葉の音に気づいて、ふと我に返つたとき、男は神社の近くの田の中にいたんじやと。そして、持っていたおごちそうをさがしたが、全部食べられてしまつて一つもなかつたんじやと。

このほかにも、新村の竹やぶのあるところなどでも、ほごつりがよく出たそうな。



長塚の石地藏

長塚づかの石地藏いしじぞう
(牛渚岸ノ上)

「長塚の石地藏」というお地藏さんが、牛渚と野田の境さかいにあるんよ。

今から六百年ぐらい前の、南北朝時代なんぼくちゆうに、この付近で戦いがあつてな。

人々が、宮方みやがたと武家方ぶけがたの二つに分かれて、戦つたんじやが、それはそれは、すさまじい戦いじやつたので、大勢の兵士が死んだんじやと。

戦いが終わった後、あたり一面に兵士の死体が、ごろごろ横たわつておつたんよ。村人たちは、死体をほうむり、血のしみこんだ土を盛り上げて塚にし、無名戦士むめいせんしの寄せ墓よせはかとしたんよ。こんな塚がいくつもできたんじやと。さらに、村人たちは、あわれな最期さいごをとげた兵士の霊れい

をなぐさめるために、塚のそばに小さなほこらを
建て、石地藏を祭つて、供養くようしたということじゃ。

この辺あたりは塚がいくつも連なり、昼でもうす気
味の悪い所で、人々もあんまり近づかなんだそう
な。歩いていて首なし馬に出会つたり、夜な夜な
地鳴りがしたり、石地藏の首が落ちていたり、不
思議なことが多かつたんじやと。

それで村人は、念仏ねんぶつ供養をしたんじやが、あん
まり効きき目がなかつたそうな。

今では塚も切り開かれて、ほこらもこわれてし
まい、はだかの石地藏だけが残つとるんじやよ。

しかし、土地の人々は、毎年、春の彼岸ひがんには、
霊をなぐさめるために、念仏供養をしとるんじや
と。





雨乞い三面

あまご
雨乞い面の由来（牛淵、北野田）
ゆらい

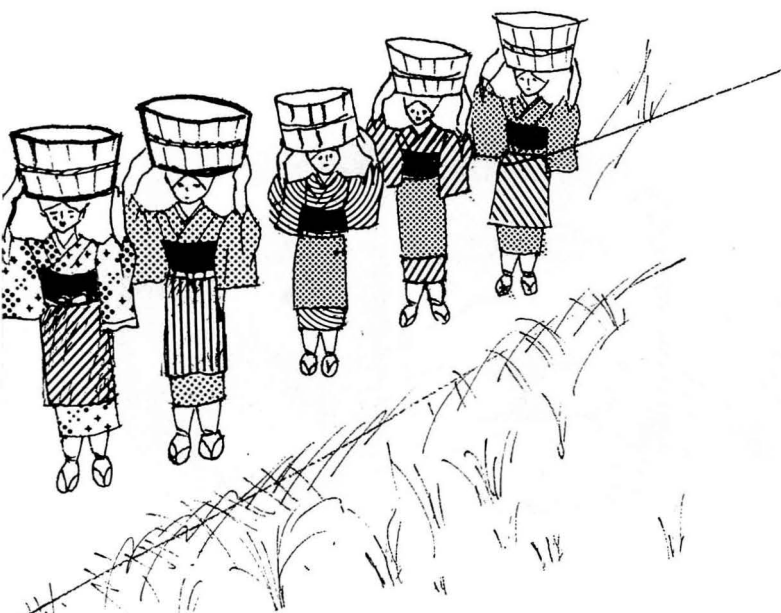
むかし、この地方で大ひでりが長く続くと『御面
雨乞い』という、それはそれは大へんな行事があつ
たんじゃ。

ひでりが続いてお米ができなんたらおおごとじゃ
からのう。御代官所が中心になつてのう、松前の浜
で潮をくみ、御面をお祭りしてから、おたたさんも
いっしょになつて大ぜいの行列でのう。

「雨をたもれ滝宮どん。」

とお祈りしながら河之内の雨滝さんまで行くんで
う。

その行列がここらを通るときは、みんな出て、お
むすびを出したり、お酒をついであげて一生けん命



で雨乞いをしたんじやよ。この雨乞いが終わるまでに七日かかるんじや。そうすると、どんな大ひでりでも、かならず雨が降ったんじや。

この御面は今、野田の徳威三嶋宮と、牛淵の浮嶋神社で一年交替にお祭りすることになっていて、その渡御祭は毎年十二月二十日に行われとるんじや。この日を御面祭といっているんよ。

この御面には、不思議な言い伝えがあるんじやと。

それはのう。伊予の国司越智益躬公が、越智郡の拝志郷で大三島大明神をお祭りしている時、海上に小舟が一せき浮かんできたんじや。益躬公は不思議に思つて家臣の長沢左近に調べさせたら、舟の中に箱が一つあった。その箱の中には、

三つの面があつたんじや。



公は、これこそ大三島大明神のおかげの現れじやと大よろこびで、徳威王楯明宮に納めたんじやと。

それから後、文中三年という年に合戦がおきたので別当の瓊秀法師が河之内の靈嶽にうつしたのじや。

(それでここを法師ヶ森というようになった)

乱がおさまってもとの明宮に御面をうつしていたが、また天正十三年に大きな戦がおきたので、こんどは河之内雨滝三島宮にうつしたそうじや。それから後、神社の佐伯前が牛淵三島宮へうつし、寛文六年に近江大掾が野田の三島宮にうつしてお祭りしていたんじや。

それから四十五年たった享保十七年の五月に、寺社奉行のお定書によつて、一年交替で野田と牛淵でお祭りすることになって、早や二百五十年もたったんじや。その御面は、それはそれはりっぱなもので、いろいろな本に写真がのせられているんじやよ。

三 高松（北野田北野）

今は、枯れたりたおれたりして、そのあとかたもないけれど、

北野田の徳威三嶋宮にはのう、天までとどくような、三本の大きな松の木があつた。

その松はの、灯明松・錦旗松・鶴巢松とよばれとつたんよ。

灯明松は、五百年はたつとるだろうと思われる、それは大けな、そして、不思議な松じやつたんよ。

毎年、大みそかのよいになるとのう、第一の枝えだに火があかあかともるんよ。この火は、野田の里さとからよう見えるんでのう、その火が、大きかつたり、小さかつたりすること、村の人は喜んだり悲しんだりしたそうじゃ。

「今年の灯明の火は、大きくあかあかとうもえるのう。来年は豊作ほうさくぞよ。」

「今年は米がようとれたが、来年も、二年続きでええ年が越こせらい。」

などと、氣象観測きしやうかんそくがなかつたむかしじやつたけん、この灯明の火の大ききで、来年の、米のできぐあいをうらなつたそうな。

火が小さいと、

「来年は、日照が続いたり、洪水こうずいがおきたりせなええがのう。」

「はやり病いが、広がりでもしたら大変ぞよ。」

と、心配したりするとうぐあいで、村の人たちの生活と、切っても切れない、大切な松じやつたんと。

この大きな松も、おいしいことに、昭和八年に、台風でたおれてしもうたんよ。

もう一本の松には、錦旗松きんきのまつという名がついとつたんよ。

今から六百年くらい前は南北朝時代というてのう、日本の武士ぶしたちが、南朝方と北朝方に分かれて、長い間戦いくさが続いたんよ。

ところが、北朝方の力が強く、南朝方の力はだんだんと弱まってきた。どうかして南朝方の力をもりかえそうと、征西將軍せいせいしやうぐんの宮が、この徳威が原へ来られたんよ。そして兵士をつのり、力が弱かった南朝方を立て直して、さあこれから北朝方を打ち破るぞと、この松の木のもとに錦にしきの御旗みはたを立てて、兵士たちをはげまし、士気しきを高めたといわれとるんよ。

この、むかしの戦の様子を知つとつた、この大きな松も、おいしいことに、大正のはじめ

かみなりが落ちて、焼けてしもうたんど。

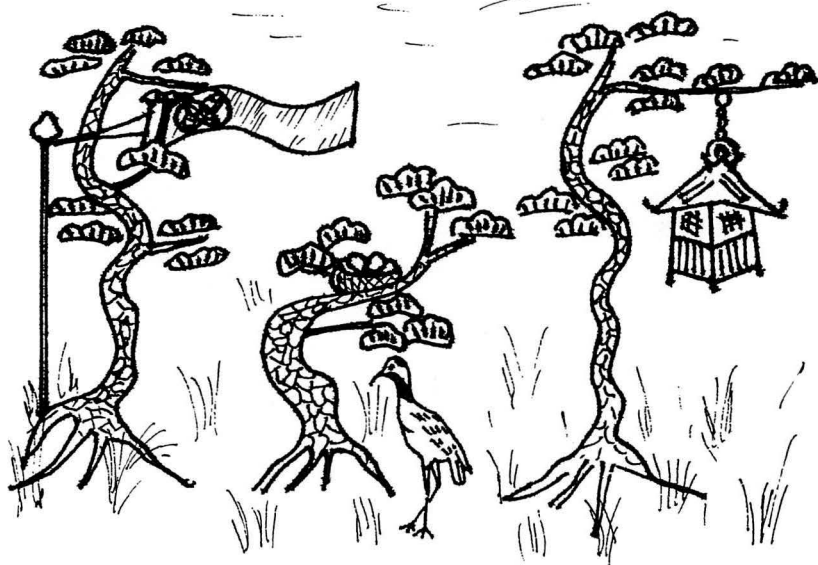
もう一本、鶴巢松つるすのまつというのがあった。

これは、鶴が巣をつくったんで、鶴巢松つるすのまつというとったんよ。

鶴はのう、おめでたい話にようでてるじゃろう。

このめでたい鶴が巣をつくって、ひなを育てたというんで、めでたい松じゃと、村の人から親しまれとったんよ。

この松も、枯かれてしもうて、今は、そのあとかたもない。おしいことよのう。



どじよがめ亀さん

(北野田深井)

北野田の西はずれに、「どじよ亀さん」と呼よんどるこけの生えた五輪塔りんとうがあつての、次のような伝説があるそうなの。

むかし、この里こゝろに豪族ごうぞくがいて、大勢の下男や下女を使つとつた。

この家の女主人は、たいへんなわがまま者じやつたが、下男の中に亀蔵かめぞうという律義者りつぎがおつたんよ。

北風きたかぜがピューピュー吹ふき、たいへん寒い冬の日、主人は、急にど



じょうが食べたいと言ひ出し、それを亀蔵に言いつけたんよ。主人の言いつけじゃけんしかたなく、どじょうをとりに行つたんと。

亀蔵は、あちこち探さがしまわつたが、どのいでもかちかちにおおりついとつて、一匹びきのどじょうもおらなんだ。亀蔵の手も足もこごえてしもうて、今にもたおれそうになつたんよ。亀蔵は、どじょうをとつて帰らんと、主人におこられると思つたが、寒いのでしかたなく家へ帰り、ふろ場でたき火をして、こごえ死にそうになつた冷たい体をぬくめておつたんと。

「どじょうは、どないしたんぞえ、とてもんたんかえ。」

と、主人がきつく聞くので、亀蔵は小さくなつて、

「いでがこおりついていて、どじょうは一匹もいませんでした。お許ゆるしてください。」
と、泣ないて頼たのんだんよ。

意地悪い主人は、

「このやくだたずめが。」

と、ロギたなくののしつて、亀蔵を後ろからけつり上げたんよ。不意打ちをくつた亀蔵は、
「あつ。」

と一声さけんで、燃えさかっている火の中へ、
顔をつつ込み、それがもとで、どうとう死ん
でもうたんじやと。

それから、この家には、亀蔵の霊がとりつ
いたのか、次々不思議なことが起こって、栄
えていた家も絶えてしもうたそうな。

村人は、あれた屋敷のそばに五輪塔を祭り、
亀蔵の霊をなぐさめることにした。今でも、
お墓には、青いしきみの花が立てられ、人々
がお参りしているそうな。



亀蔵の五輪塔



蛇へびのたたり（北野田深井）

むかし、野田の北はずれに、深い深い井戸いどがあつての、大きな蛇が住んどつたそうなの。

その井戸も、用がなくなりつぶされたので、それから後は、蛇を見た者もなく、村人から忘れられてしもつたんよ。

野田のお百姓しよさんが、こいを育てておつたんじゃが、りっぱなこいで、この辺あたりで評判ひょうばんになつた。この話を、松山に住むこい屋さんが聞いて、こいを買いに何回も野田に来とつたんよ。

ある日、平井で汽車を降りたこい屋さんは、いっつもと同じように、北の原を通りよつたが、暑くなつたので、一服することにしたんよ。そこは、木が大きくしげつと

つて、すずしい風がふいとつた。

松の木の根にこしを下ろ^おしているとき、ザワザワというなにかが地面をほうような音が聞こえてきたんで、音のするほうをふり向いてみたら、大きな蛇が、かま首をもたげて、赤いべろをちよろちよろ出しながら、こつちへ近づいて来るではないか。こい屋さんはたまげてしもうて声もよう出さなんだ。蛇とにらめっこしたらいかんと思ひ、知らんふりをしてじつとじつとつたが、まっさおな顔になり、がたがたふるえだした。蛇は、じいっこい屋さんをにらみつけとつた。けど、こい屋さんが何もしなかつたので、ザワザワという音をさせながら、向こうへ行つた。

「やれやれ、命が助かってよかつたわい。」

と言って立ち上がったが、体の力がぬけてしまい、その日はこいを買わずに、やつこのことで、家へたどり着くことができたんじやと。

この大きな蛇ににらまれたこい屋さんは、その夜、高い熱を出して、不幸にも死んでしまったんよ。

地もどの人々は、井戸をつぶして追い出した、蛇のたたりじゃないかというて、こい屋さんを供養^{くよう}したそうな。



茶縞狸 ちやしまだぬき
(北野田深井)

いま、北野田のリトルリーグのグラウンドの
辺り^{あた}は、むかしは松林が広がっていたさびし
いところで、狸がたくさん住んどったんじや
と。

その中に、いつも茶色の縞のかすりを着て
いて、村のおじいさんに化^ばけては、人を困^{こま}ら
せる茶縞狸というのがおったそ^うな。

この狸は、人を化かすのがじょうずで、こ
んな話もあるんよ。

ある晩^{ばん}のことじゃった。近くの家のおじい
さんがもうそろそろ寝よかいなと思いとよると、
表で、

「今晚は、今晚は。」

と、男の聲がするもんじゃけん出てみると、四十ぐらいの見かけん男の人が立っていて、

「そこまでもんたら、どうしても道がわからんようになってなあ、困つとるんじゃが、ちようちん貸してくれんかな。」

と、いうもんじゃけん、おじいさんは、

「ええ、お安いご用よ。」

と、ちようちんに火を入れて持たせたんじゃと。

それから、三十分もたつとろうかのう。また、表で、

「今晚は、今晚は。」

という男の聲に出てみると、何のことない。また、さっきの男が立つとるんよ。

「あんた、どしたんぞな。帰つたんじゃあなかつたんかな。」

「はい。ちようちんをお借りして、ちいとない帰りよつたら、道が二本も三本もになつてきて、なにがなにやら、さっぱりわからんようになってなあ。気がついたら、またここにきてしもたんじゃがな。」

と、ほどほど困り果てた様子なんよ。そこで、おじいさんは、

「そりやそうと、あんた、どこまで帰るんぞな。」

と聞くと、

「わしや、上村よ。」

「上村じゃったら、野田渡りを通つたらすぐじゃけん、土手まで息子に送らそわい。」

「そりや、すまんこつちやのう。」

息子は、男を連れて重信川の土手まで来ると、

「この野田渡りを通つたら、向こうは上村じゃけん、気をつけてお帰りな。」

と引返したんじやと。

息子が家に帰つて、床に着くかつかんうちに、また、表で男の音がするんで出てみると、案の定さっきの男なんよ。おじいさんは、あきれてしまい、

「あら、あんた息子が送つていつて帰つたんじやなかつたんかな。」

「ええ、今度こそと思うて、野田渡りを一生けん命歩いたんじやけど、なんぼ行つても行つても向こうの土手に着かんのよ。上村の灯が、ちかちかちか、そこに見えるのに、歩いてても歩いてもいつこうに着かんのじやがな。」

これには、おじいさんもほどあきれてしまい、息子を呼んで耳うちし、

「こりやこの男は狸かも知れん。お前ずつと家まで送り届けて、とど正体確しょうたいたしかめてこい。」

息子はいわれたとおり、男といつしよに野田渡りを通つて、後についていくと確かに上村にちゃんとした家もあり、おかみさんも出てきて、

「ほんとに、おせわになりました。うちの人はどうお酒を飲むもんじゃけん、また、川のまん中で寝とるんじゃないかと心配しとつたんよな。」

と、さほどたまげたようすもないんよ。

息子が家に帰つて、その話をすると、

「うん。ありや、茶縞狸のしわざにちがいない。近ごろ、めつたにわるさせなんだのに、たいくつしのぎに一しばいやつたんじゃろ、明かりを持つとらん人はうつつけじゃが、いったん化かされたら、次は明かりがあるがなからうがついにやられるんよ。松の木の上の茶縞狸が、しつぽを振かる方へあやつり人形みたいに、化かされた人は動かされてしまうんじゃそうな。」



菅公の腰掛石

(北野田深井)

北野田の深井というところは、むかしお城のあったところじゃそうなが、今でも、そこに大きなこけの生えた石があるんよ。

むかし、むかし、仁和(八八五〜八八八年)のころというけん、今から約千百年もむかしのことなんじゃ。

そのころえらい政治家で、そのうえすぐれた学者であった菅原道真という人がおつたんよ。

道真公が、讃岐の国(今の香川県)の国司という役人であったとき、伊予の国(今の愛

媛県)の様子を見てまわられたときのことじゃ。

ある年の秋のこと、道真公は大勢の家臣を連れて、この深井の里まで来られたんじゃと。そのころの重信町は、まだ今のように開けてなくて、人家も少なく、田んぼもあちこちにあるだけで、ほとんど木のおいしげった林や森が続く野原じゃったんじゃと。そして重信川は今よりもずっと北の方(今の内川の^{あた}辺り)を流れとったといわれ、大雨のたびに洪水^{こゝろ}を起こし、人家や田畑をおし流しては村人たちを苦しめていたそうなの。

道真公は、これを国の力でなんとかしなければならぬとお考えになり、香川県から、香川県からはるばる山を越^こえて、山之内から重信川づたいに村の様子を^{らん}ご覧になりながら、北野田まで来られたんよ。

村の人々は、今まであまり見たこともないような、身^となりの整^{ととの}った役人の行列に、どんなりつばなお方であろうと、仕事の手を休めてながめていたんじゃと。

そしたら、行列^{ぎょうれつ}がびたりと止まり、列の中^なごろにいた役人が馬^まから降^おりると、土手にあつた大きな石に腰^{こし}をおろして休^{やす}まれたんよ。

後でわかつたことじゃが、それが道真公で、今か今かと待つていた村の役人たちは、用意してあつた冷たい泉^{いずみ}の水と、とれたばかりの土地^ちのをもを召^{めし}上がつてくださいと差し出

したんじやと。

道真公はたいへんお喜びになり、

「毎年のように洪水におそわれ、作物もとれずに苦しんでいると聞いていたので、さぞ人々の心もすさんでいるにちがいないと思っていたのに、こんなもてなしを受けるとは…。」
と、いわれ村のために使ってほしいと、たくさんのお金をくださったということじや。

このことが、村中に知れわたると、人々は道真公というお方はほんとうにりっぱな政治家じや、そまつにしてはばちが当たると、土手の上で休まれた大きな石の周りに垣かきを、上に屋根を作まわって大切にしたということじや。

垣や屋根はくちて、いつのまにかなくなつたが、その石だけは今も菅公の腰掛石として語り伝えられているんじやと。



菅公の腰かけ石



橋の下の泣き声な（北野田新村）

むかし、新村へ、どこからかわからんが、女の人あかこが赤子をお負うて来たんよ。

この親子は、貧ますしいて身なりもようなかつたんで、村の人らは、

「やつかいもんが来たもんじゃ。」

と、あつちやこつちでこそそと話しよつたんじやと。

ある時、村の人はこの親子を追い出そうと思ひ、「水みどろ泥は、ええとこじゃけん連れて行つたげようわい。」

というて、親子を連れて村を出たんよ。

そじゃけど行く途中、

「ここで待ちよつてな。」

というて、川原へほつたらかしたまま、新村へもんできたんよ。

それも知らずに母親は、

「あの人ら、おそいなあ。」

といいもつて、いつまでも待つたんじやと。

日がくれても、もんでくれんし、周りまわりは川原じゃけん、食べ物まわはなんにもなかつた。

「オアー、オアー。」

と、赤子は泣くのに母親は、何一つしてやれなんだ。

そのうちに、親子は病氣になり、だんだんひどくなって、どこへも行けんようになったんよ。水泥へも行けず、新村へももどれず、橋の下でくらしとつたけど、とうとう村の人をうらみながら死んでしもたんじやと。

それから、夜、この橋を通ると橋の下から、赤子の声が聞こえてくるので、村の人は夜この橋を通るんをこわがるようになったんじやと。

おさえさん（北野田新村）

ずうつとむかし。新村に、おさえさんというきれいなむすめさんがおったんじやと。色が白うてやさしいむすめさんじやったんじやと。

このおさえさんは、機織りがじようずで、かすりの着物を一反織り上げると、ふろしきに包んでは自分で届けとつたんじやと。

ある時、かすりが織り上がったんで、届けに行く途中のことじやった。

新村のはずれは、昼でも人があんまり通らずさびしい静かな原が続いとつたんよ。おさえさんは、ふろしき包みをかかえて急いでそこを通りよつたら、枯れ草がカサカサと鳴つた。はつと振り向いたけどだれもおらん。また歩きよつたら、カサカサと音がするんで振り向いたら、そこに見たこともないきたない身なりの男が立つとつた。

「あつ、うわさに聞いた賊じや。」

と思ひ、おさえさんは、一生けん命走つてにげた。

あんまり走るもんじやけん、ついにぞうりが破れてしもて、はだしでにげたけど足から

は、血が出て痛うて走れんようになったんよ。
かくれるところも見つからんので、足をひきず
りもって走った。

「ああ、もうだめじゃ。」

と思て、辺り^{あた}を見るとこんもりしげつとるア
オキがあつたんで、

「ここじゃ。」

とここにかくれた。

賊は、

「おかしなこつちや。たしかに今まで、わし
の目の前におつたのに。」

と、アオキの前をうろうろしはじめた。

おさえさんは、息をころして、じいつとア
オキのしげみにかくれとつたけど、ちようど
かぜを引いとつたので、せきが出そうになつ



た。じつとこらえて口をおさえとつたんじゃ
けど、こらえれんようになって、

「ゴホン。」

と、ついにせきが出てしもたんよ。

「あつ、ここじゃ。」

というて、賊は、おさえさんにおそいかかつた。おさえさんは、どうすることもできず切られてしまい、賊は、反物をとつてさつさと
にげて行つた。

切られたおさえさんは、もう虫の息で、

「あの時、ぞうりがやぶれなんだからなあ。せ
きが出なんだからなあ。」

と、くやみ、

「これから、ぞうりを^{そな}供え、^{おが}拝んでくれたら、
せきをなおしてあげる。」



どいもって死んでしもたんじゃと。

それから、村の人は、

「かぜを引いてせきがひどいけん、なおしてください。」

というて、そのアオキへぞうりをぶら下げだしたんじゃと。

その後、アオキは、どんどん大きくなって、道いっぱいにしげり、人が通れんようになつてもたんじゃと。

それで、村の人が、このアオキを切つてもたんよ。そしたらその年に、かぜがはやつて、村の人がようけこと死んでしもたんじゃと。

それで村の人は、こりや大へんなことをしてしもたといって、大きい足中ぞうりを作つて、アオキがしげつとつたところへぶら下げて、おわびしたんじゃと。



高坊主 たかぼうず

(北野田新村)

新村の飛梅神社の辺りの話
じゃ。

むかし、この神社の北側は、
うっそうとしげった竹やぶが
あり、両側から道におおいか
ぶさつて、昼でもうす暗いと
こじやった。

ここに、高うて大きなえの
きがあつての、その木には、
狸の親子が住んでおり、何匹
もの子狸が、木の下を通る人

を見ては、いたずらしておったんよ。

ある晩の^{ばん}ことじゃった。この小道を男の人が通りよつたら、どこからともなしに白い着物を着た小坊主^{こぼうず}が、すうつと出てきたんじやと。

「なんじやろう。」

と、男はそれをじいつと見よつたら、だんだん高うなり、だんだん太うなりして、男においかぶさるように近づいてきたんよ。

これが、狸のいたずらとも知らず、男はそこにほんやり立ちすくんで、がたがたとふるえだした。すると、ますます高うなつて、天に届^{とど}きそうなほどの高坊主になつたんじやと。

男は、

「もうだめじや。」

と、ぼうつと立つとるうちにひつくりかえりそうになつてしもた。

そしたら、高坊主は、そのままどこへともなしにすうつと消えてしもたんじやと。



一升五合シャリシャリしやうごんごう

(北野田新村)

むかし、新村しんぞんに自然しぜんの石いしでできとる
小さな橋はしがあつたんじやと。

雨がしとしとと降ふる晩ばんのこと、一人
の男おとこがこの橋はしを通とほりかけたら、橋はしの下
でシャリ、シャリと小豆あずきをどぐような
音が聞きこえてくるんで、

「なんの音ねじゃろ。」

と、男おとこは耳みみをすましてじつと聞きいてみ
たら

「一升五合シャリ、シャリ。」

といっているではないか。

何の姿すがたも見えんのに

「一升ごん合シャーリ、シャリ。」

というので、男はきみ悪うなつてがたがたふるえだしたんじやと。そして、もう夢中むちゆうで走つてにげたんじやと。

次の日、男は隣となりの人にそのことを話すと

「そんなばかなことがあるもんか。」

というて信じなんだが、何日かして、雨がしとしとと降る晩、隣の人ひとは、前の話を思い出し、一人で橋へ行つたんじやと。

そしたら、ほんとに

「一升ごん合シャーリ、シャリ。」

と聞こえてきたんで、

「ヒャー。」

と、腰こしがぬけそうになつて、ふるえもつて家へとんで帰つたんじやと。

こんなことが何回もあつたもんじやけん、それから、村の人らは雨が降る晩は、この自然石しぜんいしでできとる橋を通らんようになったんじやと。



弘法大師こうぼうだいしの二つ石ふたついし（南野田若宮）

南野田に「二つ石」ちゅうのがあらい。

むかし、弘法大師こうぼうだいしちゅうえらいお坊ぼうさんが、四国

を回まわって仏ほとけの教けえを説といとつたんじやと。

ある日のこと、そのお坊ぼうさんがこの土地にも来ら

れて、村のこう族むらじじやつた横張よさばり九右衛門きゆうゑもんの家で托鉢たくはつ

をしたんじやと。九右衛門きゆうゑもんが玄関げんかんに出てみると、う

すぎたない身みなりの僧そうがわんを差し出して、

「何でもけつこうです。どうかお恵めぐみくだされ。」

と、いうたけど、九右衛門きゆうゑもんは生まれつき欲張よくばりじや

つたけん、

「お前まへのようなこじき坊主ぼうずには、恵んでやるものは

なあにもない。さつきと立ち去れ。」

と、いうて門の戸をピシヤリとしめておくへ入ってしもたんじゃと。いやな思いをした坊さんは、そのままだまってどこかへ行つてしまつたそなた。

次の日の朝のことじゃ。部落の組頭くみがしらがふうふういいもつて、九右衛門の家へか駆けこんできたんよ。」

「横張様、横張様。た、たいへんでございます。村の泉いずみの水が一滴てきもなくなつて、泉の底がまる見えになつておりますらい。」

これを聞いた九右衛門は、そんな馬鹿ばかなことがあるもんかと、組頭を連れて、さつそく泉へかけつけたんと。すると、こりやまたどうしたとか、昨日きのうまであれほどたくさんわいて、青い水がいっぱいあつた泉が、組頭のいうとおり、泉の底まですつからかんになつとるんよ。

「ううん。こりやまたどうしたことじゃ。まったく不思議なことじゃ。」
と、九右衛門も首をかしげるばかりよ。

そのとき、泉の周りまわを回つていた組頭が、見なれない二つの大きな石を見つけて、
「横張様。ちよつと来てみてつかあさい。こんな石は今まで見たこともなかつたんでござ

いますか……。」

「どれどれ。おう、こりやまたおかしな石じゃ。この石が水の出口をふさいどるんかも知れんぞ。今すぐ、村の若い者に言いつけて取りのけさせてみい。」

そこで、さつそく村の若い衆が呼び出され、石の根もとを掘り続けたんじゃが、なんぼ掘っても掘っても、石は地中深く続いとって、取り出すことはできなんだんじゃと。

さすがの九右衛門も村の人々も、これは不思議なことじゃ。きつと何かのたたりにちがいないと、おそれおののいたということじゃ。

それからというものは、毎年のように日照りが続き、泉の水が田に引けんので米がとれなんだそうじゃ。そして九右衛門の子どもたちは、悪い病氣や災難などで、次から次へと死んでもうて一人もおらんようになったんじゃと。それで、さすがの九右衛門も弱り果て、見るもあわれな姿になってしまったということよ。

このありさまを見た村の人々は、

「あれは横張でなく、欲張りじゃ。泉がかれたんも、子どもが死んだんもそのむくいじゃ。」と、うわさしあつたそうな。

そして、これは弘法大師のたたりがちがいないと、二つの石の近くに大師堂を建て、手厚くお祭りすることにしたということじゃ。そのお祭りは今も毎年続いとるんじゃと。

お産狸だぬき
(南野田)

むかし、それはうでのたつ、産婆さんばさんがおったんよ。

赤ちゃんをとりあげるのが大変たいへんじょうずなんで、あつちからもこつちからも、たのみにきよったんと。

ある晩ばんのことじゃった。

「わしは、高井のもんじやが、いま、うちのよめさんは、赤んぼうができそうで苦しんでる。はようきて、お産をさしてくれ。」

というて、一人の若者わかものがきたんよ。

産婆さんは、見たことのない若者なもんじやけん、

「行つてあげてええが、お前さん、どこの、だれぞえ。」

と聞くと、男は、何かもごもごいうとつたが、

「わしとこは高井じや、道あんないするけん、はようきてくれ、お願いじや。」

あんまり、若者わかものが熱心ねっしんにたのむもんじやけん、産婆さんがいっしょに行つて見ると、若



いよめさんは、今にも子供が生まれそうじゃった。

やがて、元気なかわいい赤んぼうが生まれ、家の人みんなが大喜びをし、すぐにおごちそうをならべて、お祝いわいとなった。

「産婆さん、ありがとう。さあ、えんりよなく食べてくだされ。」

と、家の人みんなにすすめられて、産婆さんは、たいそうごちそうになったんよ。

「もう、おそいけん、わたしは帰ろうわい。」

と、産婆さんがいうと、若者は、

「それじゃ、わしが送っていく。」

というて、大ぶろしきに、たくさんのごちそうと、お礼のお金をつつんで、送ってきてくれた。

「帰ったよ。きょうは、高井でたいそうごちそうになった。その上、おみやげまでたくさんもろうたわい。」

と家の人について、産婆さんは、おみやげをご先祖様せんぞにお供えそなしといたんど。

よく朝のことじゃった。産婆さんは、みんなにごちそうを食べてもらおうと思ひ、お仏だんの前にきてびっくりきょうてんして、そこにへなへなどすわりこんでしもうたんよ。

「そんなことはない、たしかに、おいしいごちそうじゃったのになあ。」

「おかしいのう、あの親切しんせつそうな人たちがのう。」

と、産婆さんはどうしてもなつとくがいかなかった。

それもそのはず、お供えしとったごちそうは、馬ふんに化ばけとるし、お礼にもろうたお金は、全部しばの葉っぱになつとつたんよ。

産婆さんは、はじめて、狸にだまされたことに気づいたが、もうあとの祭りじゃった。

「それにしても、高井の狸は、じょうずに化けるのう。」

「ゆうべ食べたおいしかったごちそうは、何じゃったんかなあ。」

と、感心したりくやしがつたりしたという話じゃ。

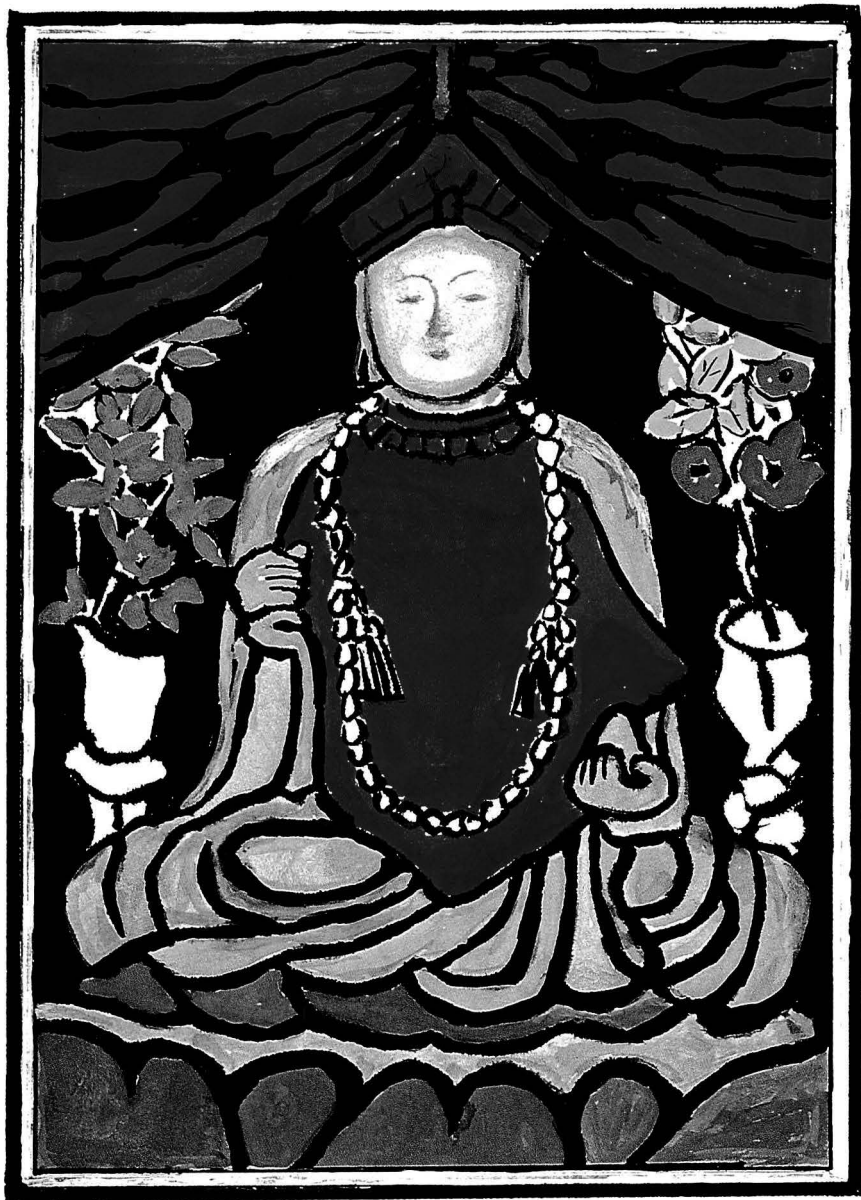
この狸、化けるのが、大変じょうずなもんじゃけん、産婆さんが、

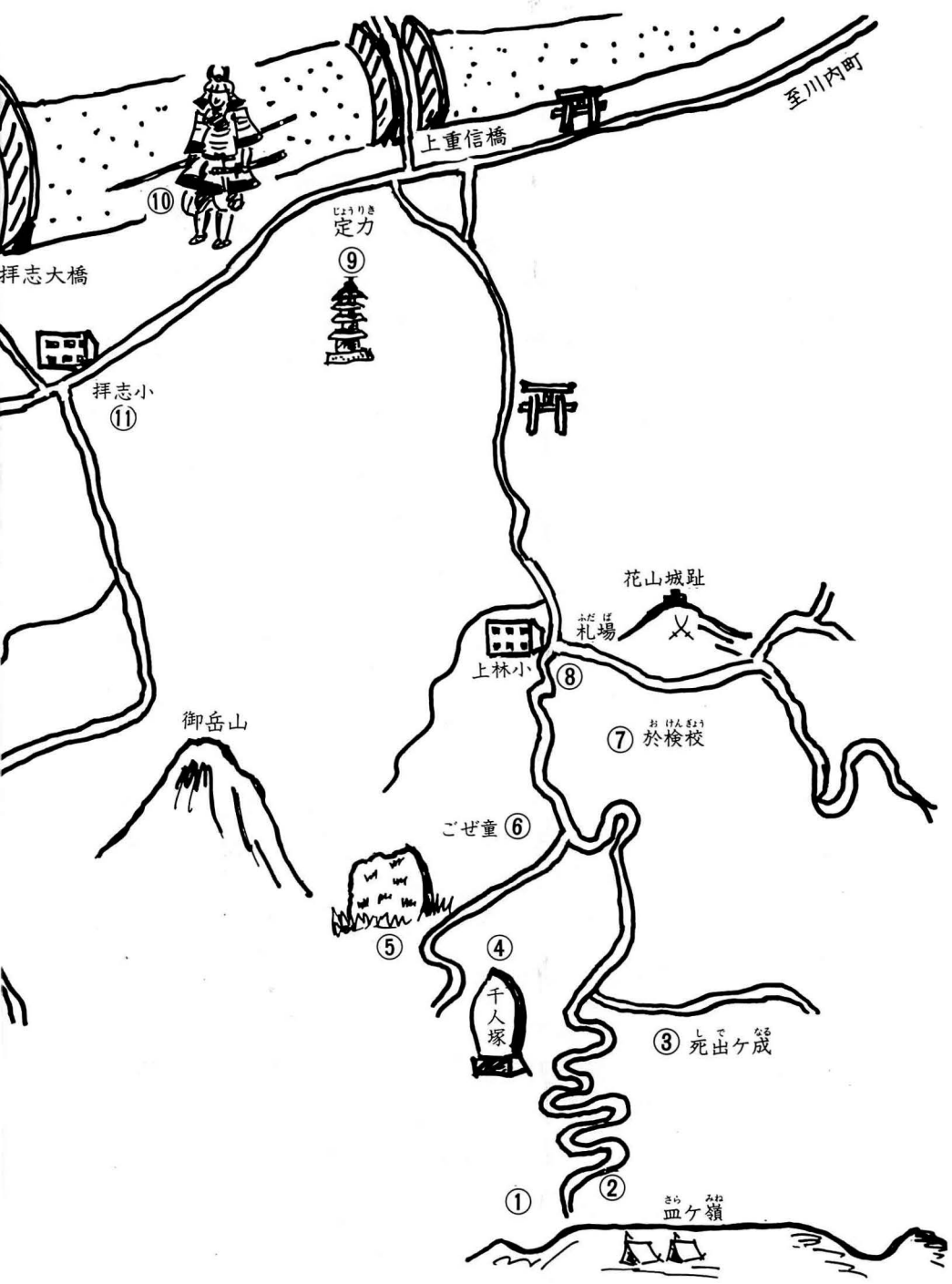
「こんどこそ、だまされんぞ。」

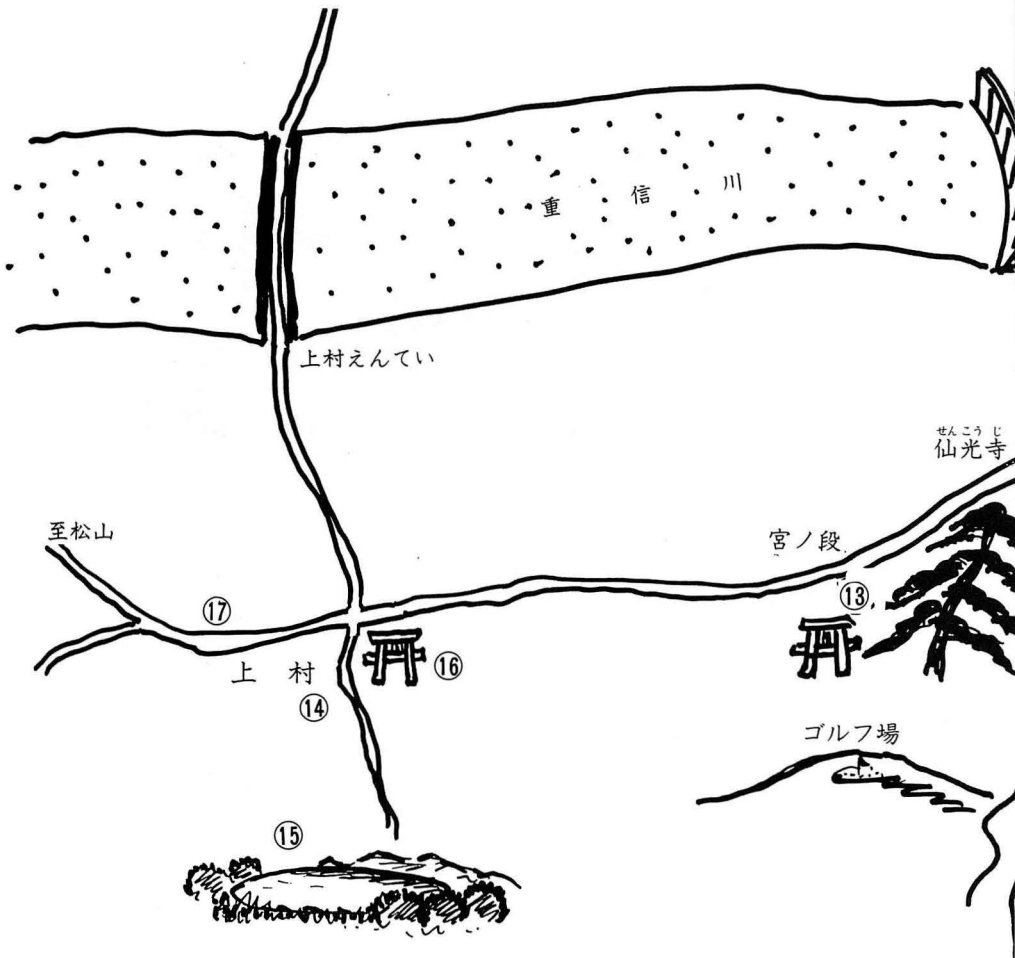
と、なんぼ気をつけておつても、うまいぐあいにだまされたんじやと。

それから、高井の里の狸に、「お産狸」という名がついたんと。

はい し ち く
拝志地区にのこる話







はいしちく ばなしちず
拝志地区のむかし話地図

- | | |
|-------------|-------------|
| ① 山爺・山婆 | ⑩ 刀をさがす怪火 |
| ② 不入山と吉岡一味斎 | ⑪ おさんが淵 |
| ③ 矢取地藏 | ⑫ 芋根八軒 |
| ④ 千人塚 | ⑬ お宮の大松 |
| ⑤ ごせ石 | ⑭ 將軍地藏さん |
| ⑥ ほろせ岩 | ⑮ 彦八池 |
| ⑦ えじろ狸 | ⑯ お幸がえる |
| ⑧ お京が淵 | ⑰ 高市家のお大師さん |
| ⑨ お定力さん | |



やまんじい やまんばあ
山爺・山婆（上林）

今から二百五十年ほどまえ、そうよのう、江戸時代の中ごろかな、上林に、半助という鉄砲の名人がおったんじやと。

その半助は、まえから、ええうでまえの獵師になりたいと思うとつた。それで、家のものといっしょに住んどると、どうも気が散つて心が落ちつかんというので、ひとり村を出ていった。

ひきじ やまこ
引地山を越えて、山のおんごくへずんずんとはいつて行くと、太いモミの木があった。

半助は、ここならよかろうと思つて、そこに小屋をこさえて、ひとり住むことにした。

ある日のこと、半助が鉄砲の手入れをしていたら、大きな、見たこともない男がやってきて、

「それ、なんぞう。」

と、めずらしそうにいいよつてきた。

半助は、ははあ、こいつが話に聞いていたあの山爺じゃなあ、と思つたけれど、知らんふりをして、

「これか、これはなあ、火吹き竹^ふじゃ。おもしろいぞ。吹いてみい。」

といった。すると、

「ほうか、これは変わった火吹き竹^ふじゃのう。わしにちよつと吹かせてくれ。」

といつて、山爺が鉄砲の先を口にくわえたので、半助は、今じゃと思つて引き金を引いた。

「ズドーン」

と、大きな音が、山や谷にひびいた。

おどろいた山爺は、

「だましたな、半す……………」

と、たった一言そういうて、口から血^ちをたらたら落としもつて、山おくへにげていった。

半助がにげてゆく山爺の後をつけていってみると、つらじろの滝たきの岩屋の中へはいつてもうた。

半助は、岩屋の入口の小さな木かげにかくれて、中の様子をうかがうておった。

「半助にやられた。」

と、しんどそうに山爺がいうと、

「よし、そんなら、わしが雑仕女ぞうしおんなに化けてあだをうつて来てやる。」

と、いきりたつておこりよる山婆の声が聞こえてきた。半助はたまげて、こりや大ごとじやと思ひ、小屋へすつとんでもんてきた。

あわてて、じまんの鉄砲てつぽうに八幡大菩薩はちまんたいほの命いのちたま玉たまをこめて、もうすぐ山婆が来るにちがいない、来てみいうち殺してしもうちやる、と、うずうずして待っていた。そしたら、見たこともない女が来て、

「わたしを雑仕女にやとうてください。」

というのである。半助は、ははあ、これが、あの山婆が化けて来たんじゃないな、と思つたけど、知らんふりで、はじめは断ことわつたが、山婆があまりいので、わざと置くことにした。

「よっしゃ、わしの家に置いちやるわい。そしたら早速ですまんがのう、川へ行って水を

くんできてくれや。」

「へえ。」

と、女はていねいに頭を下げて、大きなおけを持って、谷川へ水をくみに出かけて行った。

半助は鉄砲を持って、後をつけて行った。

そして、ええかくれ場所はないもんかと、さがしとつたら、ちょうどええかやぐろがあつたけん、そこで待ちぶせしたんじや。そして、水をいっぱい飲んで女がもってきたので、「ズドーン。」

女は、もんどりうってひっくりかえつた。見ると、やつぱりそれは、山婆じゃつた。

山爺・山婆の話は、つらじろの滝といっしよに、今も語りつがれている。



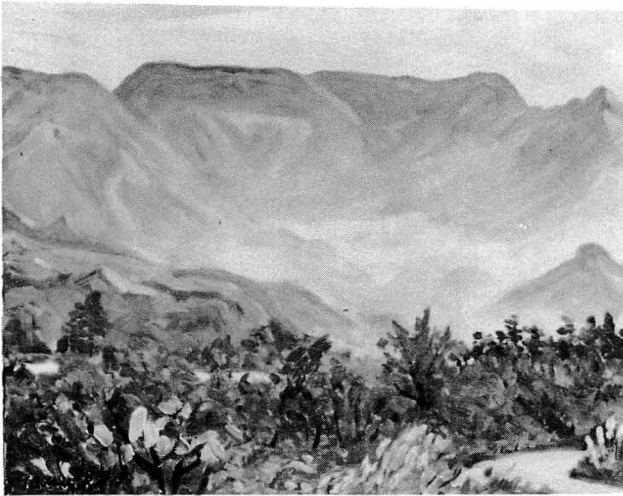
いらずやま よしおかいちみ さい
不入山と吉岡一味齋

(上林上ヶ成)

皿^{さら}が嶺^{みね}の下の上林^{とうげ}峠に、不入山という山があつての、その名のとおり、村人はおそれてだあれもこの山には入らなんだということじゃ。この不入山には、むかしから天狗^{てんぐ}が住んどるといわれとつて、気味の悪いことがなんぼでも起こるんじやと。

不入山には、二^{ふた}かかえも三^みかかえある大きなけやきの木がしげつとつて、山に入りこむと空も見えんほどじやつたそうな。

ある時、たきもんをとりに行つた村の延^{のぶ}やんが、木をコーンコーンと切りよると、別の



皿ヶ嶺の遠景

所でも同じようにコーンコーンと音がする。善やんが来て、木を切りよるんじやな。

「ヨーイ、善やんヨーイ。」

大声を出して呼んでみたんじやけど返事がない。あいかわらず山は、コーンコーンと木を切る音がしよるぎりじやった。なんぼその辺をさがしてみても、音がするぎりで善やんの姿が見えん。

「こりや気味が悪い。はよいの。」

延やんは、大急ぎで山を降りたそうな。

まだ、こんなこともあつたんよ。

不入山をぬけて、久万の畑野川へ出る道があるんじやが、この道は、むかしは人がよう通りよつたんよ。ある日、畑野川の治さんという人が、馬の背なかにぎょうさん炭を積んで、城下へ売りに行きよつたんじや。ちようど不入山にさしかかった時、急に馬が息を荒げて動かんようになった。

「おい、あおよ、どしたんぞ。はよ行かんと昼までにお城下へ行けんがや。子供らと約束したおみやげも買って帰らんといかんのに、しゃんとせんか。」

治さんは、馬をしきりにけしかけたんじやけど、とうとう動かんので、しかたなし、また、

畑野川へ引き返したそうな。

畑野川の人も、あの山はこわいというてもっぱらのうわさじゃったらしい。

不入山には、不入山権現ごんげんという古い社やしろがあつてな。その社が三津の浜の方へ向いとるんで、港へ入りよる船がよう止まって動かんようになったこともあるんじやと。ずいぶんおそれおい社じゃったので、村の人らは、牛や馬がたまげんように、船が三津が浜で止まったりせんようにと願つて、社を人目ひとめにつきぬくい、海の見えん道の下へ降おろしたんじやと。

それから、むかし、不入山には吉岡一味齋という武芸者がおつてな、剣術けんじゆつの修行しゆぎやうをしよつたんじや。湧水わきみずの相原家に泊とまつて、真虚しんきよという人について修行をしたんじやそうな。真虚という人はかなりのお年寄りで、道教の教えや剣術にもすぐれた人じゃった。一味齋は、毎日山に入つて一心に修行しゆぎやうに励はげんだということじゃけん、この人こそ天狗の正体じゃったのかも知れんなあ。

いずれにしても、この山は村人からおそれられ信仰しんじやうされとつたらしい。

不入山権現は、むかしは上林字上ヶ成あざ、人によつては上ヶ谷ともいうが、そこにあつたらしい。上林峠じやうの八畳岩じやうという大岩の手前から、こんまい谷を上つた所じゃそうな。今で

もこの大岩は、むかしのままで残つとらい。

社のあつた場所は六畳から十畳ぐらいの広さで、江戸時代の記録にもこのことが書かれとるらしい。その後、道の下へ場所を移して、今は農業の神様として祭られとる。雑木におおわれて場所はわかりにくいけど、湧水の上のくるみ谷というところにある滝の上らしい。

むかしは、たくさんのお参りがあつたらしく、ゆうて参道の跡もあるし、石がきも残つとるというこじや。このごろはめつたにないけど、昭和の中ごろまでは、ひでりの時なんかには雨乞いのお祈りをしよつたそやな。



矢取りじぞう
矢取地蔵（上林死出ケ成）

上林の湧水わきみずから、十四丁ちようぢう（約千四百メートル）ほど山へ入ったところにシデガナルというところがあつて、そこに、こんまいお地藏さんが祭られとるんよ。

むかしは、毎年八月に、お念仏ねんぶつを唱となえてお通夜つやをしようたそうなんじゃが、今でも、土地の人らが春と秋の二回、そうじをしてお祭りしよるそうな。

このお地藏さんには、こんな言い伝えがあるんよ。

むかし、土佐の長曾我部ちそうがべの軍勢が、上林峠とうげをこえて伊予に攻め入ったことがあつた。たちまち伊予の軍勢は打ち敗やぶられてしもて、さんざんなめにおうたんじゃ。その時、伊予の加門守かもんのかみ・与門守よもんのかみの二人の武将が追手をのが



れて、山ににげこみ絶壁ぜつぺきの岩山にかくれたんじやと。深手ふかてを負うとつた二人の武将は、いたわり合ひもつてじつとひそんどつたが、やがて、その岩山で死んでしもたんよ。

それからしばらくして、この岩山でおそろしいことがおこり始めたんじや。

岩山の前の畑野川道を人が通りかかると、どこからやらわからんのじやが、矢やが飛んできて、ぎょうさんこと死人が出たんじやと。

戦いくさに敗れた二人の武将ぶしょうの、無念むねんの思いがそうさせたんじやと、村人はうわさし合つたもんじやつた。

困こまりはてた村人たちは、その岩山の前にお地藏さんを祭つて、二人の武将の死後のしあわせを祈いのつたんじやわい。それから後は、不思議なことに、もう矢は飛んでこんようになつたということじや。

村人たちは、そのお地藏さんのことを、だれいうとはなしに、矢をとり除のぞいてくれた地藏ぢざうというので、「矢取地藏」と呼よぶようになったということよ。

今も上林に残るお話じや。

人によつては、「矢飛び地藏」などと呼ぶ人もあるそうな。

千人塚づか (上林上駄馬だば)

ごぜ部落を過すぎて、むかしの皿さらが嶺みねの登山道の入
り口あたりの道はたに、老人会の人々が建てた「千人
塚入口」と書いた立て札ふだがあるがの。

そこから、細い山道を九町ほど(約九百メートル)
登ったら、右がわに、また立て札ふだがあらう。そこか
ら、ちよつと杉山すぎの中を西の方へ行きよると、四角
の石を積みならべた石ぐろがあるのよ。その石ぐろ
を「千人塚」というんよ。

この千人塚はな、ちよつとした家ぐらいある石が
きの山で、十三段だんの石段がある。その石段を上ると、
上が平らになっていて、そのまん中あた辺りに、お地蔵じぞう
さんが祭まつってあらう。



千人塚

その地藏さんの台石だいしには、寛永四年（一六二七）ときぎまれているが、これは、戦いくさがあつて、その後百年ぐらいして、建てられたものらしい。

この千人塚は、むかし、この辺りあたであつた戦争で死んだ人を、祭つてあるということじやが、いまでも、わきみず・こうち・なかすじ・ごぜなど、近くの人は、八王寺のお堂に集まつて、毎年三月二十四日には、お念仏ねんぶつをあげとるんよ。ちかごろでは、九月十五日におが拝んどるんじやそうなが。

さて、その戦の話というのは、こうなんじや。

今から四百三十年前、天文二十二年（一五五三）ごろ、久万くまの大除城おおよけじょうの大野という殿様とのさまと、荏原えばらにおつた平岡ひらおかという殿様が戦をしたときのことじや。

上林とうげをこえて、せめこんで来た大野軍と、これをむかえた平岡軍とは、この千人塚辺りで、はげしい戦いがあつたらしい。両軍あわせて千人ちかくの兵士が、戦つたということじや。そして、その兵士の中には、上林にすんでいたお百姓しやうさんも、たくさんいたということじや。むかしのお百姓は、ふだんは田畑をつくつていて、戦争がおこると、殿様の命令で戦に出ることになつていたらしいんじや。

とにかく、この戦は、戦上手な大野軍が勝ち、平岡軍は、荏原しんげの城へにげかえつたとい

うことじゃ。

しかし、この戦いで、敵も味方も、大勢の人が死んだんじゃ。そこで、上林の人たちは、自分たちの仲間の死んだ人も、敵の死んだ人も、みんな集めて、ここに石の塚を作り、地藏さんを建ててお祭りしたのが、この「千人塚」だということじゃ。

この千人塚の辺りからは、古いさびた刀が出て来たという話もある。

とにかく、死んだ人を、敵も味方もなく、一所に集めてほうむり、今もなお拜んで供養しているが、上林の人の心のやさしさがわかる話じゃのう。



ごぜ石（上林ごぜ石）

ごぜ部落を過ぎ、林道を十四町ほど（約千四百メートル）登ると、上林から久万の畑野川へ通じる旧道に出合うが、そこから右へその旧道を二町ほど（約二百メートル）降りると、そこにうす暗い杉林があり、その中に大きな岩があらう。

人が二人すわったようなかつこうをした岩じゃがの、その岩は「ごぜ石」と呼ばれとるんよ。その岩の前には、竹のつえがだいぶこと立てかけてあり、また、その岩の根もとには、こんまい石の地藏さんが祭つてあるんよ。

このごぜ石には、こんな話が伝わとるんよ。

それは、三百年ほど前の話じゃが、



ごぜ石

三月のお彼岸ひがんのころ、この里では、めずらしく吹雪ふきになって、日暮れには、辺りあた一面に深い雪が積もってしもたんじゃ。谷間たにまの日暮れは早く、家々では、家族そろって、夕飯ゆうはんを食べているころじゃった。

そのとき、この里に、どこから来たのやら、「ごぜ」さんが女の子の手を引いて、疲れつかきつつたどりついたんよ。ごぜというのはの、目の見えない女の人で、家々の門口かどで三味線しゃみせんをひいたり、歌を歌ったりして、お金をもらって歩いていた人なんよ。

このごぜさんの親子は、疲れてもいるし、雪も深いので、とても山ごえはできんと思ひ、どこかの家で、とめてもらおうと、一けん一けん、家をたずねて歩いとつたんじゃ。

「今晚ぼん一晩、とめてください。」

と、たのんでまわったけど、どうしたものかどの家も、かたく戸をしめてしまい、この親子をとめてくれる家は、なかつたんじゃ。

かわいそうに、ごぜさんは、夜どおしかけて上林とうげをこえようと考え、女の子を連れて、とうげ道を登りかけたんよ。

ところが、深い雪と強い風で、体はここえてくるし、転ころんだり起きたりで、体中みず、傷だらけになるし、疲れはてて、とうとう今のごぜ石のあるところまで来て、動けなくなり、

そこに、うずくまっつてしまつたんじゃ。

「ひもじいよう。苦しいよう。」

とおらびながら、とうとう死んでしまつたといふことじゃ。

そんなわけがあつて、だれいふとなく、この岩を「ごぜ石」、このあたりを「ごぜおらび」、やがて、「ごぜわらべ」と呼ぶよふになつたんじゃと。それから、いつの間にやら、そのごぜ石は、ごぜさんとその女の子が、並んでうずくまつてゐるよふな姿になつてもうたんじゃと。

さて、それからといふものは、その村には、病人やけが人が多く出て、不幸なことがつきつきと起こつた。これは、まちがいなく、あのごぜさんに情けをかけなかつたことのためたりじゃ、と思ふよふになつて、村人たちは、山伏さんおしを呼んで来て、ご祈きとうをしてもらつたんじゃ。すると、それからといふものは、一つも悪い事が起こらんよふになつたといふことじゃ。

おまけに、目の悪かつたごぜさんの、このごぜ石に、目の不自由な人がお願がんをかけると、おかげがあるといふことでの。岩のところそこに、供そなえられてある竹のつえは、目がよくなつたお礼に、祭るよふになつたといふことじゃ。

このごぜ石には、もう一つのお話があるんよ。

それは、むかし源平げんぺいの合戦かっせんのあつたころの話じゃが、戦いくさに負けた平家の生き残りの、多田蔵人くらんとという人が、この上林に落ちのびて来てくらししていたんじゃ。そのうち、この庄屋とよさんのむすめとけっこんして、しあわせにくらすようになったんじゃが、京に残っていた蔵人のつまは、夫おつとのい場所を風のたよりに知って、この上林へさがしに来たんじゃ。

「わたしの夫、多田蔵人を知りませんか。」

いつまでも帰って来ない夫を、さがし回ったが、村人は、いつもお世話になっている庄屋さんや、幸せに暮らしている蔵人にえんりよして、みんなが口を閉ざして教えなかつたんじゃそうな。

つまは、村人のあまりのしうちに、なげき悲しんで、とうとう目が見えなくなり、石になってしまったそうじゃ。



ほろせ岩（上林ごせ童^{わらべ}）

上林のごせ部落に、村上義一^{ぎいち}さんという人のお家がある。そのお家の庭にほろせ岩と呼^よばれている大きな岩がすわっている。たて九尺九寸^{しゅうじゅうすん}（三メートル）横一丈三尺二寸^{じちゆう}（四メートル）あまりもあり、高きは、六尺六寸（二メートル）もある大きな岩じゃ。

この岩の上へ人が上がると、体に「ほろせ」が出るといわれ、この家の人はもちろん、だれもこの岩の上へ上がる人は、いないということじゃ。ほろせというのは、今でいうじんましんのことじゃ。とくに、女の人があるとの、とてもひどいほろせが出るということじゃ。



さて、このほろせ岩の話をしよう。

むかし、村上さんのご先祖ぞに、山伏さんおしがおられたそうじゃ。山伏さんというのは、山野でね起きして、はげしい修行しゆぎうをし、村人の病気を直したりすることができるとえらい坊さんのことでの。この山伏さんも、体の悪い人に薬を作つてあげたり、おいのりをしてあげたりするのが、とてもじょうずな、えらい山伏さんじゃった。

この山伏さんがおいのりをするときには、必ず、この大石の上で護摩ごまをたいておいのりをしたそうじゃ。護摩ごまというのは、おいのりをするときに燃もやす火のことじゃ。

ちようどこの山伏さんがいたころ、日本は、豊臣とよとみと徳川とくがわという二人の殿様とのさまが、戦争をしていたごろじゃった。この上林かみじりからも、徳川方に味方して、足軽あしがるという兵士へいしになつて、大阪おお城を落とすために、戦いくさに出かけていたんよ。

それで、家の人は、出かけて行つた兵士のことをたいへん心配おぼし、早く大阪城おおが落ちて、戦いくさが終わつて、帰つてくれるように、いのつていたんよ。

そこで、この山伏さんに、戦いくさが終わつたかどうか、大阪城おおが落ちたかどうか、拜おがんでもらつた。

山伏さんは、この大石の上で、護摩火をたいて、一心においのりをしたんじゃ。

しばらくおいのりをしていた山伏さんは、

「いま、ちょうどお昼の十二時に、大阪城は落ちた。戦は終わった。」
というお告げがあつたことをみんなに話したんじゃ。

なん日かたつて、兵士が帰つて来た。その兵士に、戦の終わった日を聞いてみると、それは、山伏さんがいったとおりの日と、ぴったり合つていたんじゃ。遠い大阪での出来事が、おいのりでわかる、えらい山伏さんということで、この辺りの人は、みんながおどろいたんじゃ。

このえらい山伏さんが護摩火をたいて、おいのりしていたのが、あの大石の上じゃ。あの大石は、もつたいない大石じゃ。あのもつたいない大石の上へ、山伏さんよりほかの人が上がったらばちがあたる。ばちがあたつてほろせができると、みんなからいわれるようになったんじゃ。

これがほろせ岩の話じゃが、じつさいにこの岩の上にながって、ほろせのでた人もいるそうじゃ。

えじろ狸 だぬき
(上林於檢校) おけんぎょう

むかし、上林の於檢校に、
大上又衛門おおうえまたえもんというお百姓しやう
さんがおった。

ある年のこと、その年は、お天氣のぐあいもようて、
又衛門の家でも、お米がぎょうさんできて、喜んでお
つたんじゃ。

お正月も近づいたある日、又衛門は、馬に米俵だわらをぐ
つすりつんで、松山城下じやうかの札ふだの辻つじへ、米を売りに行つ
たんじゃそうな。

お金もたんまりもらい、鼻歌をうたいながら、ええ
気げんでもどりよつたら、田窪たのくぼもすぎて、いよいよ重
信川をわたろうとしたとき、川の岸に、年のころ十七、
八ぐらいの、それは美しいむすめさんがしゃがんでお



つたんじゃ。そのむすめさんが又衛門に、おじぎをちよつとして、はずかしそうに、

「どうか、川をわたしてくださいませんか。」

というんじゃそうな。

又衛門は、きれいなむすめさんじゃし、わたしやろうと思つて、手をとつて馬の背せ中ちゆうに乗せてやつたんじゃと。そしたら、にぎつたむすめさんの手が丸まるいので、これは、まぢがいのう、狸じゃと思つて、馬へがんにがらめにくくりつけて、とちゆうでにげられんようにしてしもたんじゃと。

川をわたつたところで、むすめさんは、

「ありがとうございます。降おろしてください。」

と、礼をいつてたのんだんじゃが、又衛門は、返事もせず、家まで連れて帰つてしもうたんよ。

家に着くと、又衛門は、およめさんに、

「おつかあ。今はんは、ごちそうするけん、早よう、湯をわかせ。」

というたんじゃ。そしたら、そのむすめさんは、びっくりして、

「わたくしは、じつは狸じゃけど、川をわたりたいばつかりに、むすめに化ばけて、あなた

さまにたのんだのです。うそをついたのは悪いのですが、ほんとうに悪気があつたわけではありません。どうか、お許しゆる下さい。」

「これからは、悪いことは、いつきいせず、この部落には、悪い病気を起こさせないようにするから助けて下さい。」

というので、又衛門は、

「それでは、こらえてやろう。これからは、みんなのためになることをせいよ。」

といつて、なわをといて馬から降ろして、にがしてやったんじやと。

狸は、喜んでえじろ谷へにげこみ、それから、そこをなわばりにして、過すごすようになったそうな。

それから後、この狸は、昼でもうす暗いえじろ谷にいて、時々は、そこを通る人を化ばかしておつたが、不思議なことに、この部落には、悪い病気は起こらんようになったそうな。そこで、この部落の人は、この狸をえじろ狸と呼よんで、かわいがつたということじや。

お京が渚ふち（上林かだ札場）

上林の札場の小学校からすこし上ったところに、松根東洋城の句碑まつのとうようじょうのくひがあるのがの。そこから左へ向かって、三のせ川へ下りたところの竹やぶの下に、青い渚があるんじゃない。

この渚は、滝たきの水で底がえぐられてできたもので、どのくらい深いかわからん。気味の悪い渚じゃ。

渚の上は、つるつるした一枚岩で、その上でも歩こうものなら、すぐ、すべってしまいそうな危あぶないところじゃ。渚は、三角の形をしとらい。

この渚をお京おきょうが渚と呼よんでおるが、その渚の西側には、お地藏おぢざうさんが祭られておらい。

その地藏さんは、いまから百七十五年ほどまえの、



お京が渚

文化四年卯年（一八〇七）に建てられたらしく、文字が刻まれておらい。

この淵に、むかし、カッパが住んでおったそう。人や馬を水の中へさそいこんでは、殺していたんよ。カッパというのは、水の中に住んでおって、人間の子どものようなかっこうをしており、体には毛が生えており、頭には皿をかぶり、別名をエンコともいわれ、悪いことばかりしておったんじやと。

そのエンコにとられた人は、たくさんおるそうじやが、その中に、次のようなかわいそうな話があるんじや。

上林の札場に、岩太郎という青年がおった。岩太郎の家は、お金持ちでの、お京さんという女中さんが働いとったんじや。そのお京さんは、たいへん気だてがよく、やさしい上に、とても美しいむすめさんじやったそう。

お京さんと岩太郎は、同じ家に住んでいたから、やがて、おたがい好きになり、それで、ある日、岩太郎は、思い切って、二人のけっこんをゆるしてくれるよう、両親にたのんだんじやと。そしたら両親は、かんかんになって、

「おまえは、うちの後取りじや。女中なんかとけっこんは、ぜったいにゆるさん。」
といて、ゆるさなんだそう。むかしは、こんなこともあつたんじやのう。

お京さんは、このことを聞いて、三日三晩^{ぼん}、泣きく
れておった。すると、三日目の晩に、まくらもとに、
カツパが出て来て、

「いいところがあるけん、こつちへ来い。」

といって、お京さんを、この渚へさそいこんでしまつ
たというんじゃ。もちろん、お京さんは、この渚でお
ぼれ死んだんじゃ。

その後、村の人たちは、このような死にかたをした
お京さんのことを、かわいそうに思い、その渚のそば
に、小さなお地藏さんを建てて、お祭りするようにな
り、また、だれいうとなく、この渚をお京が渚と呼ぶ
ようになったということじゃ。

また、このように、供養^{くよう}するようになってからは、
いたずらカツパも出なくなり、この渚で死ぬる人も、
なくなつたということじゃ。



お定力さんじょうりき（下林定力）

下林の定力という所に、その辺りあたの人らが、むかしから、お定力さんと呼んで、それはそれは大事だいじにお祭りしている小さいお社むらがある。そのお社から少し上がった山の上には、お定力さんのお塚つかがある。

むかし、この定力に、定力左衛門さえもんという武士ぶしが住んでおったそうなの。この左衛門は、ものすごい力持ちの上に武芸ぶげいにもすぐれていて、それはもう強かったそうなの。それだけじゃのうて、強い上に心もやさしい武士での、いつも、困こまった人たちを助けてやったり、それを自分の事のように喜んだりして、部落ぶらくの人達の世話せわをようしよつたらしいわい。

そじゃけん、左衛門は、みんなから大変、なんというかのう、そう、うやまわれていたそうなの。

ところが、その左衛門が病気で死んでしもうてのう、この時は部落の人たちは、みんな、毎日毎日、悲しんで泣ないてばかりいたんよ。



そのうち、だれから言い出したか知らんが、今まで左衛門に世話になったことのある人らが、山の上にお塚を、そして、そのふもとにお社を建てて、お祭りを始めたそうなの。

それから何年かたって

「山の上のお塚と、ふもとのお社をいっしょにして、お祭りしたらどうかのう。」
「そしたら、お参りしてもひとところ都合ごうがええぞえ。」

ということになって、みんなで、山の上のお塚をふもとのお社の横へ降おろしたんよ。

そしたら、不思議な事が起こったのう。

あくる朝お社の所へ行ってみたら、きのう降ろしてきたお塚がないんじゃないの。

さあ大変、みんな大きわぎになってお塚をさがしたんじゃそうな。

「おうい、お塚が山の上にあるぞ」

だれかが大声でおらぶんで、みんなが山へ登って見たらお塚が前にあつた所に建つていてのう。

「だれが、わるきをしたんぞ。」

と、みんなでぶつぶつ言いながら、また、ふもどのお社の横へお塚を降ろしたんじゃ。

ところがどうぞえ、次の朝になると、また、お塚が山へ帰つとるんじゃわい。

「だれぞう、こんなわるきをするのは。」

みんなが、口ぐちに

「わしじゃないぞ。」

「わしや知らんぞ。」

といい、お塚を山の上へ、もどしたもんはおらんのよ。

それから、何回も何回も、ふもとへ降ろしとくのに、また、山へもどつとるんで、どう、部落の人の中から、

「お塚さんは、下のお社がおきらいなんじゃ。」

「夜のうちに、自分で山の上にお帰りになるんじゃ。」

ということになって、それから、お塚を降ろすのをあきらめてしもうたそうな。

そうじゃけん、今でもの、お定力さんは、山の上とそのふもとにあらうがえ。

「いやがるお塚さんを、たびたび動かしてすまなんだ。」

ということ、だれがしたんか知らんが、お塚のそばに松の木を植えたんじゃそうな。

今でも、定力の山の上に、大きな松の木があるはずじゃがのう、それを切ると、たたりがあるというて、みんなからおそれられているんじゃと。



お定力さんの社

刀をさがす怪火（下林）
あやしび

むかし、松山城のお殿様このさまの由来けらいに、足立重信あだちしげのぶという武士ぶしがおつての、戦いくさのある度たびに、いつもお殿様のために、命を投げ出して働き、手がらをたてていたんよ。

お殿様も、こんな重信の働きを見る度に、それはそれは喜ばれての、ある日のこと立派りっぱな刀を、ほうびじやいうて重信あなに与えたそうな。

刀をもちうた重信は、それはもう喜んで「家の宝じゃ」というて、いっつもこしにさし、はなさず持つておつた。

ところが、ある日また戦が始まつたんじやが、今度は今までよりもはげしい戦いになつてしもうてのう。いつものように、まっ先になつて死にもぐるいで戦つていた重信は、お殿様からいただいた宝物の刀を、なくしてしもうたことに、気がついたんじや。

そじやけど、はげしい戦の最中さいちゆうじやけん、さがそうとしても、どうにもならん。

困こまつてしもうた重信は、ある日、おそろおそろ殿様に刀をなくしたことをお話しすると、殿様は大変おこつてのう、

「刀が見つかるまで、家から出てはいかん。」

と、重信に命じてしもうたそうな。

家に閉じこもった重信は、来る日も来る日も、お殿様に申しわけがのうてなやんでいたんじゃが、

「このままじつとじつとたんでは、

お殿様に許してもらえず、今までのように、お役に立つことができません。」

こう思った重信は、ある日のこと、こっそり家をぬけ出して刀をさがしに出かけたそうな。戦のあった所へ行つて、なんぼさがしても刀は見つからん。



そじゃけん、次の日も、また次の日も、夜おそくなる、ちようちんを持ってこつそり家をぬけ出してさがし続けておつたんじゃが、そのうちに大勢の敵に見つかつてしもてのう、重信は、だんだん増えてきた敵に取り囲まれて、どうにもならん。一人で必死になつて戦つたけど、どうとう、敵のうつた矢が重信の胸に当たつて、その場で死んでしもうたんじゃと。

この時、足立重信が刀をさがしまわつて死んだところは、下林の別府の渡り場よ。

そうそう、むかしはのう、川に橋がなかつたけん、小さい舟に乗つて川を渡りよつての、その舟に乗つたり降りたりしとつたところを渡り場といよつたんじゃが、その近くじゃといわれとるけん、今の通学橋のかかつとる辺じゃないかのう。

こんなにして、足立重信が死んでからは、雨の降る晩は、いっつも別府の渡り場辺で赤い火が、ゆらゆらと行つたり来たりしていたそうな。

おさんが渕ふち（下林）

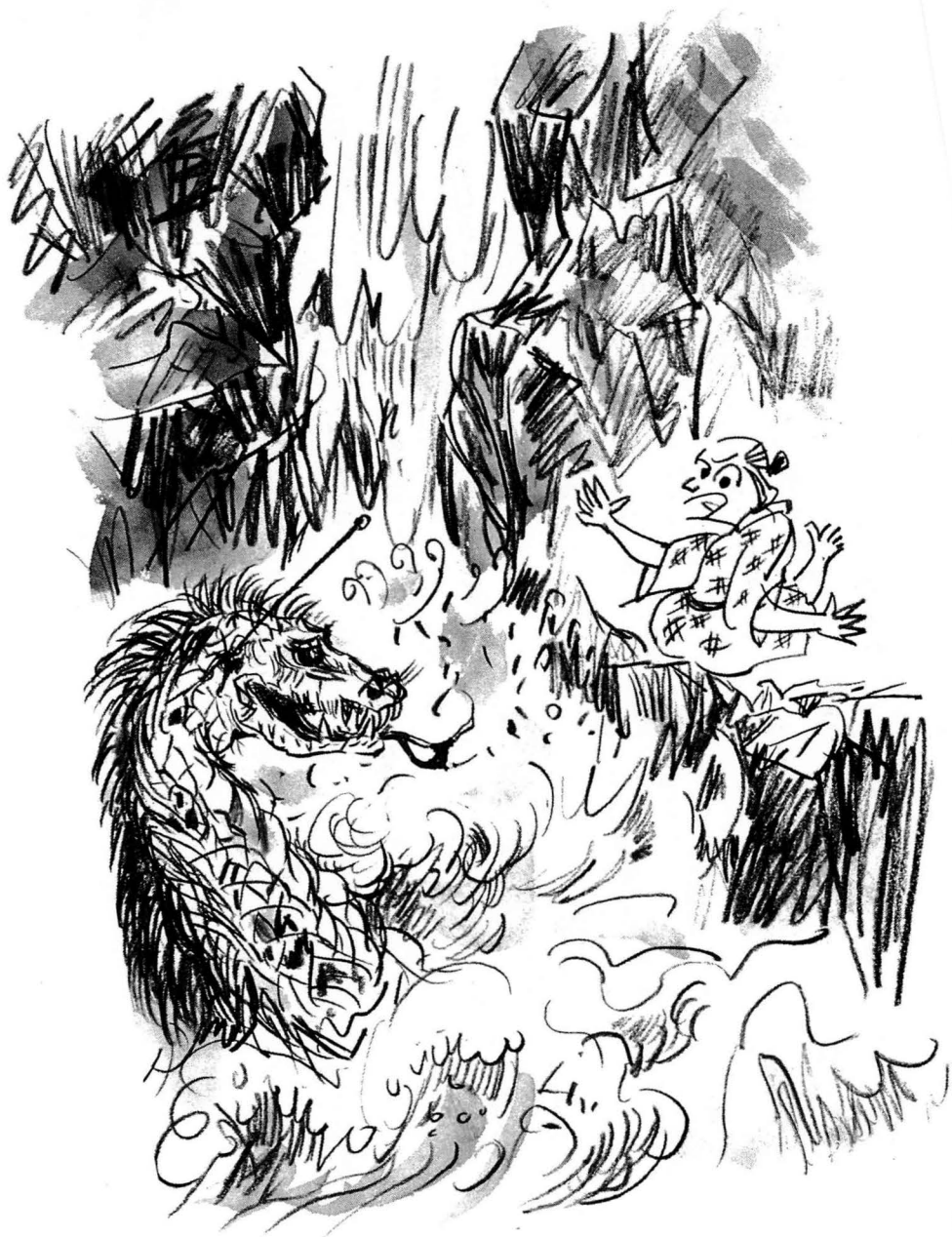
むかし、下林のある庄屋しんやさんの家に、おさんという、それは、それはきれいなむすめさんが女中として働いていたそうなの。

ある晩ばんのこと、おさんは仕事も済すまして、女中部屋べやでひとり縫ぬい物をしよつたんじやと。ところが、そこへのう、この辺では見られん、せいひのすんなりした若者が、障子しょうじも開けて、すうつと入つて来たんじや。その若者の顔というたら、今まで見たこともない、それは、それはきれいな顔じやと。

ふたりはすぐ仲なかがよくなつて、それからというたら、その若者は、毎晩のようにおさんの部屋に来て、いつとき過すごし、また、知らんまにおらんようになるんじやそうなの。

そのことを知つた庄屋のおくさんが、

「あれほどの若者は、この辺にはおらんはずじやが。知らんまに来て、また、知らんまにおらんようになるのはおかしい。何ぞが化けて、おさんをつれに来よるんにちがいないわい。このままほつといたら、おおごとになるわい。」



そういうて、一人で心配しとつたんじゃと。

ある晩のこと、

「今晚こそは、若者の正体を見破つてやろう。」

と思うて、おさんの部屋に行つて、

「わたしも今晚はいつしよに縫い物をするけんの。」

というて、いつしよに縫い物をしながら、若者の来るのを「今か、今か。」と待ちよつたんじゃそうな。

いつときしてのう、きれいな顔をしたあの若者が、いつものように障子も開けんで、すうつと入つて来たんじゃと。おくさんは、

「しめた。」

と思うたけど、わざと知らんふりして、若者と世間はなしをしながら、着物を縫いよつたんじゃと。おくさんが話しかけると若者は、問われるままにいろんなことをしゃべつていたそうな。

すきをみておくさんは、自分の着物を縫うふりをしてのう、若者の着物のすそに糸を縫いつけて、糸を長うにしといたんじゃと。いつとき話しよつた若者は、また、知らんまに

おらんようになつたそうな。

それで、おくさんは、夜の明けるのを待ちかねてのう、下男げなんを起こして糸の行方ゆくえをたどらせたんじゃそうな。下男が一本の糸をずうつとたどつていくと、その糸は深い淵ふちにとどいとつたんじゃと。

ふしぎに思つた下男が、淵の中をそおつとのぞいてびっくりしたそうな。青くすんだ淵の底で、一匹びきの大蛇だいじやが、のどに針を立てて苦しんどるんじゃと。

とんで帰つて、そのことをおくさんに話したら、おくさんも、びっくりしてさつそくおさんの部屋に行つてのう、

「おまいとこへ毎晩たずねてきよつた若者は、ありやあ、大蛇じゃつたぞ。おまいをさらに来よつたんじゃ。」

と、話したんじゃと。

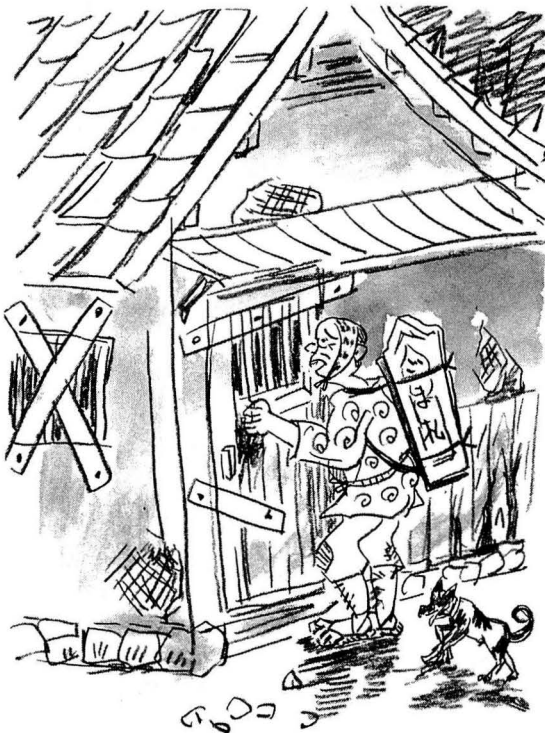
そのことを聞いたおさんは、それは、それは悲しんだそうな。子どもまで生まれるようになつとつたおさんは、生きる望みうしのを失うて、大蛇のいた淵に身を投げて死んだんじゃと。それからこの淵を、「おさんが淵」というようになったそうじゃ。今はこの淵は下林のどこにあつたんやらわからんそうじゃけどな。そんなお話があつたんじゃと。

いもね はちけん
芋根八軒 (下林芋根)

下林の芋根というところは、今はお墓があるだけで、人の住んごる家はないけど、むかしは八軒の家があったそうなの。

この芋根という組の人らは、みんなそろって怠け者なまであんまり仕事をせなんだそうなの。

ある日、一軒の家で養子ようしさんをもろうたんじゃ。平作というたいへん働はたらき者のその養子さんは、朝は暗いうちから、夕方はおひいさんが西の方にかくれてしまうまで、田や畑で



いっしょうけんめい仕事をしたんじやそうな。

それで、平作さんの来た家は、たいへんくらしがらくになつて来たんよ。

ところが、それを組の人らが、うらやましがるようになつたんじや。

「なんとかして、あの働きもんの平作を、この組から追い出してやろや。」

みんながねたんで、こんな相談をしていたんじやそうなが、ちようど、讃岐（今の香川県）の金比羅さんのお講ちゅうのがあつての、組からだれかが代表でお参りに行くことになつていたんじや。

「ちようどええわい、こんどはあの平作を金比羅さんのお参りに行かして、ついでに、この組から追い出してやろや。」

ということに相談したんじやが、それを知らん平作は、喜んでお参りに出かけたんよ。

むかしじやけん、何日も歩いて金比羅さんにお参りして、そして、護摩札ちゅう大きな大きな木の札をもらい、それを背中に負うて元氣にもどつてきたんじやわい。

ところが、組のもんらは、平作さんが留守の間に、その家に入れんようにどこもき打ちしてしもたもんじやけん、平作さんは帰つても住む家がのうなつてしもうてのう。

そんなことから、みんなの悪だくみを知つた平作さんは、自分がせっかく組の人らの代

わりにお参りしてきたのに……。ひどいことをするもんじゃと、組の人らの仕打ちをうらんだり、悲しんだりして、とうとう金比羅さんのお札を背おったまま、池にとびこんで死んでしまったそうなの。

そんなことがあつてから、不思議なことが起こつてのう。

どの家もどの家も、次から次へと不幸せなことばかりで、一人死に二人死にしてみんな死んでしもたんよ。

しかし、組の中の一軒だけは、前に平作さんを追い出そうちゆう相談にのつたらなんだもんじゃけん不幸せにならず、一人も死なずにすんだそうなの。

また、平作さんの家も、よそから子供をもろて家が続き、今どこか知らんが立派にくらしているという話じゃわい。

お宮の大松（下林宮ノ段）

「そうよのう。」

といいながら、おじいさんはこんな話をしてくれた。むかしといつても江戸時代の終わりころじゃ。築島神社に大松の切り株があるげ。その大松の話なんよ。

この松は、幹の根元から、枝を張っている末までが同じ大きさで、三かかえもあつてのう、おまけに三十メートルにも余つてまっすぐじや。

また、枝はお宮の広場をおおつていて、村の人は、夏の暑いきなかに田の草取りをした後の「昼中休み」には、このお宮の拝殿によつてきて、松から吹きおろしてくる涼しい風にあたりながら、世間話や昼寝なんかしよつたんよ。



この地方は、むかしから水不足で、お月夜でも田がやけるといつとつたんじゃ。この松の木の上に黒い雲が出ると、必ず上林の方から夕立がきて田に水がたまり、日にやけんで済むんで、人々は、この松は神様から授かった松じゃといつとつたんよ。

ところが、麦をかるころじやつた。ある晩のこと拝殿が大火事になつて、あつという間にお宮が焼けてしもたんよ。

信心深い村の人たちは、幾晩も寄つてお宮を建てる相談をしたけど、なにさまみな貧乏でお金が集まらず、庄屋さんも困り果てとつた。

だれいうとなく、

「宝も身のたてかえじゃけん、この大松を売つてお金をこしらえては。」

といいだしたんじゃ。庄屋さんも初めは反対じやつたけど、しぶしぶ承知したんじゃと。

この話は間もなく、広島の方の船大工に聞こえ、ぜひ松の木をわけてくれんかと、広島からとんで来たんじやつと。村人は神様の松じゃけん、と一晚みんなが寄つて松の下でたき火をし、

「どうか許してください。」

と、涙なみだを流して別れをおしんだそうじゃ。

翌朝よく早く、人夫にんぶが白しようぞくに身をかためて、松の木にしめなわを張り、おはらいをしてから、のこを入れたんじやと。松の皮かわの部分までは、のこの目が入ったんじやけんど、そこからはびたつと、のこが動かんようになり、人夫がわかるがわるのこびきを交替こうたいして、やつと木の部分にのこの目が立ったんよ。ほしたら松の木から赤い血がどつと流れたんで、みんなたまげて腰こしをぬかしてもたんじやと。

その晩になって、仕事にかかわった人夫は高い熱が出て、みんなわけのわからんうわごとをいいながら、死んでもうたそうな。

今でも大松の根元にのこのひき跡あとがあるげ。あれがそうなんじやと。このことがあつてから村人は、松の木を神様の松として、大切にしたそうな。村人は深く反省し、やがてみんながお金を出し合つて、りっぱなお宮を建てたんが、今の築島神社じやと。

この大松も、昭和五十五年、松食虫まつくいむしのためにかれてしもて、今は切り株かぶが残つとるけどな。

將軍地藏さんしょうぐんじぞう（上村上ノ段）

上村の部落の中ほどに、多くの人々の信仰しんこうを集めているお地藏さんがあるがな。このお話をしてみよう。

今から七十年ほど前のことじゃそうな。そのころの上村にはのう、どこの辻つじにもお地藏さんが祭つてあつたんじゃそうな。そして部落の人らは、ようお参りしよつたんじゃと。

ところがあるとき、

「あっちこつちにあるお地藏さんをお参りするの
はしんどいのう。」

「どうせなら、まん中どころに集めたらどうじゃ
ろうかのう。」



「みんながお参りするのに、便利なほうがええぞ。」

ということ、今ある將軍地藏さんのところに、部落中のお地藏さんを持って来たたんじやと。

そしたら不思議なことに、お地藏さんを集める世話をした人や、運んで来た人らがつきつきと病氣にかかつて、大そう苦しんだんじやそうな。そして部落中に、

「將軍地藏さんのとこにはほかのお地藏さんを持ってきたけん、おおこりたんよ。」

「位くらゐのちがう地藏さんをいっしょにしたけん、ばちが当たったんよ。」

といううわさが、広まったんじやそうな。

病氣がだんだん広まり始めたもんじやけん、部落の人らはたまらんようになってのう、もとあつた所へお地藏さんを全部返したんじやと。そしてみんなで病氣なまが治なおるようになつたんじやそうな。そしたら病氣もはやらんようになり、安心してくらせるようになったんじやと。

今でも八月二十四日には、將軍地藏さんのお祭りがあつて、さきの葉に願いごとを書いてお祭りしたら、願いごとがかなえられるという言い伝えがあるんよ。その日には、もちまきやくじびきなどもあつて、ゆかた姿の人らがにぎやかにお参りしよらい。

彦八池 (上村上ノ段)

今、上村にある十ほどの池の中で、いちばん新しいのを新池というんじゃないかと、またの名を彦八池とも呼んでるんよ。

この話は文化四年というけん、今から百七十五年前のことなんじゃ。

上村はむかしから、上の山の谷から出る水をためて稲を作りよつたんよ。それも今の上の段だけのことでのう、下の段は、重信川があばれ川で、いつはらんするかわからんけん桑や大根がちいと作られるだけで、ほとんどが原っぱじゃつたんじゃと。

八代將軍吉宗の時代になつて、各地に新田が作



られるようになり、上村もこのころから、今の下の段の方に田んぼができたたんよ。
ほじゃけんど田んぼを作っても水がないのでう、新しい池を作らんどいけなんだんじやと。

ちようどそのころ、上村の上の段に彦八という人が住んどったんよ。彦八は組頭くみがしらをつとめ、人々の信望しんぼうも厚あつかつたんじやそうな。毎年水不足のため、実にならん稲をながめて彦八は、どうしても池を作らにやならんと決心したんじやと。

組頭くみだちという責任せきにんもあつて、どこに池を作つたらええか村人と毎晩まいばん相談したんじやけんど、水のたまりもええし、新しい田んぼに水路を作るのには、みんなが住んどる家の辺りあたしか場所はなかつたんよ。

でも、そこには家だけじゃのうて、お墓はかやお塚つかがあつたんよ。人々は家を動かしたり、墓うらふを移したりすると、ばちがあたると思つて、意見がまとまらんなんだんじやと。水は欲ほしいけんど、先祖せんぞが築きずいてくれたもんをぎせいにすることはできなので、みんなあきらめとつたんよ。

彦八だけは、水をためることをあきらめんで、浮穴うけな村の庄屋しやうやに相談をもちかけたんじやそうな。ところがその話を聞いた家族や親類のもんは、大反対をしたんじやと。だれも話

にのつてくれんので、どうとう彦八は髪をそつて仏門に入り、仏につかえて、先祖伝来の家や墓を移すことをいっしんに願うたんじやそうな。

秋の彼岸も近づいたころ、ついに心を決めた彦八は、ていねいに墓を供養し、お念仏を唱えながら墓石を背負うて、四百メートルもはなれた丘の上に新しい墓地を作り始めたんじやと。それを見た人々は、彦八は氣でもくるつたんじやないかというて、だれひとり手つだうものはおらんだそうな。

お念仏をいっしんに唱えながら、雨の日もあらしの日もいっしょうけんめい墓石を運んでいる彦八の姿を見て、村の人たちは、彦八が仏様のように思えてきて、だんだん手つだうようになり、お墓もお塚もそして家の移転も終わつたんじやそうな。

この話が庄屋を通じて代官の耳に入り、代官は近くの村々から延べ二千七百人もの人夫を出して応援してくれたおかげで、新しい池は四年余りで完成し、水不足ものうなつたんじやと。

自分をぎせいにして、人のためにつくした彦八の尊い姿をたたえて、人々は、出来上がった池をだれいうとなく、彦八池と呼ぶようになったんよ。



お幸こうがえる（上村宮ノ元）

今から百五十年ぐらいいむかしの話なんよ。船川ふねがわ大明神だいめいじん（船川神社）のそばに、古びた物置小屋があつたそうな。あるとき、その小屋に母と娘むすめの二人の遍路へんろが住むようになったんじやと。

母親は病におかされ、やせおとろえて、これがこの世の人かと思えるような体で、稲いねわらの上にうすいふとんをしいて、横たわつていたそうな。そばにはお幸こうという小さい女の子が、心配しんぱいそうに母親の背中せなかをさすりながら、
「早う元気になって、いつしよに国へ帰ろう。」
といつていたそうな。

母親が元気じゃったら、あまえる年ごろのお幸

が、見知らぬ土地に来て、母親の病気は良くなる信じ、朝早うからせんたくをしたり、看病かんづうをしたりしているのを見て、村人たちは、母親を励はげまし、お幸をなぐさめずにはいられなんだそう。

ところが、お幸の看病のいかにもなく、母親の病気は、日を追うて悪うなるばかりじゃったんじやと。ついに自分の死をさどった母親は、お幸の手をとつてのう、

「長い間、不平ひとつ言わずによく尽くしてくれた。元気になろうとがんばつてみたけど、かなわなかった。心残りだけど仕方がない。国へ帰つたらお母さんに代わつて、お父さんやおばあさんに孝行こうこうをつくしておくれ。村の方々にはたいへんお世話になりました。後に残したこの子を、どうぞよろしゅうお願いします。」

といつて、死んでしもうたんじやと。

お幸のなげき悲しむ姿を見て、村人たちもみんな泣ないたそう。そして、母親を村人みんなで、手あつくほうむつてやったそう。

ひとり残されたお幸は、国から迎むかえが来るまで、庄屋しやうやの家であずかることになったそう。じゃが、子守りやお使いをしながらも、毎日母親のお墓はか参りだけは欠かさなんだんじやと。国からの迎えが今日来るか明日あす来るかと、墓のそばで待つていたけど、ついに迎えは来な

んだと。

そんなある日、突然^{とつぜん}大あらしが来て、田も畑も水びたしとなり、池や川の土手が切れて家が流され、それはひどいもんじゃったそうな。

このあらしの中を、お幸は、いつものように母親の墓参りに出かけたそうじゃけど、それつきりお幸の姿^{すがた}を見たもんはなかつたんよ。

寒い冬も^す過ぎ、暖かい春^{あたた}がきて、村人たちが彼岸^{ひがん}の墓参りに行ったときのことじゃ。母親の墓の近くの池の中で、聞きなれんかえるの鳴き^な声がしよるんじやと。よく聞くと、とっても悲しそうに、

「オツココオツコー。オツココオツコー。」

と鳴いとるんじやそうな。それを聞いた村人たちの間に、

「あれは、お幸のたましいがかえるとなつて、母親をしたつて鳴いているんじや。なんともふびんなことよのう。」

といううわさが広まつたんよ。

その池も、今から四十年ほど前に、土砂^{どしゃ}が流れこんでつぶれてしもうたんじやと。そしてお幸^{でんせつ}がえるの伝説も、ほとんど聞かれんようになってしもうたそうな。

高市家のお大師さん（上村竹ノ下）

寛政かんせいの中ごろというけん、今から二百年ほどむかしの話なんじゃ。

上村の高市さんの先祖せんぞにのう、万蔵ぞう、ふゆ、という夫婦ふうふがいたそうな。この夫婦は、若いころからとても信仰心しんこうのあつい人じゃったので、年をとってからは、二人そろってお大師さんにお参りに行くのを何よりの楽しみにしとったんよ。

おふゆさんは、機はたを織おるのがたいへんじょうずで、毎日ひまをみつければ、機を織っていたんじゃ。

あるとき、おふゆさんがいつものように機を織っているところへ、一人の旅のお坊さんぼうさんが現あらわれてのう、

「手ふきをなくして困こまつとるんじやが、ひとつわけてもらえまいか。」
というのよ。するとおふゆさんは、

「織りたてたばかりじゃけん、使つかいにくいかも知らんけんど。」

といいながら、おしげもなく、いま、織おったばかりの布ぬめを切きって差し出したんじやと。



そしたらお坊さんは、

「欲よぐのない心の美しい人よのう。」

といわれ、お礼にお大師さんの絵をかいわたて渡され、どこへともなく立ち去られたんじゃそ
うな。

おふゆさんは、きつそくこの絵をおつ仏だんに祭つて、機を織りよると、その絵がいつのま
にか自分のとこへ飛んでくるのでな。

「これはどうしたんじゃろう。」

おふゆさんは、そういつて機織りのじやまになるもんじゃけん、絵を仏だんのとこへ持つ
て行つて祭つておくと、またその絵がいつのまにかおふゆさんのとこへ飛んで来るのよ。

それでおふゆさんは、

「もしかしたらあのお坊さんは、お大師さんじゃなからうか。」

と思つて、仏だんにすわつて、

「仏ほとけ様のお告つげがありますように。」

と、一心にお祈いのりしたそうな。そしたらその晩ばん、あのお坊さんが夢ゆめまくらにお立ちになら
れて、

「あしたは、必ず家にいるように。」

と、あのお坊さんの声が聞こえて来て、お告げがあったんじやそうな。おふゆさんは、
「この夢がまさ夢じゃつたらええが。」

と、夜よの明あけるのを待ちよつたら、お告げのとおり、きのお坊さんが現れて、
小さい観かん音おん像ざうと鏡かがみを渡わたしてくれて、

「世よの中の困こまつている人を助けてあげなさい。」
と、静しずかに立ち去さられたそうな。

不思議なことにそれから後、おふゆさんに不思議な力が現れるようになってな。世の中
の出来事できごとが何でも鏡かがみにうつるようになったんじやと。

病びやう気で苦しんでいる人や、心配しんぱいごとでなやんでいる人は、おふゆさんにおが拜まがんでもろたら
なおるんじやそうな。この事ことがうわさになって、遠方とんぱうからも拜まがんでもらいに来きる人で、毎
日まいたいへんなにぎわいじやつたそうな。

夫おとこの万藏まんざうさんが死しんでからは、お堂どうを建たて、そこに入いって病びやう気きの人ひとや心こころ配ぱいごとのある人
を助たすけたんで、多くおほくの人々ひとびとから信しん仰やうを集あつめておつた。

おふゆさんが亡なくなって百五十年ひゃくごじゅうねんになるんじやけんど、今いまも百ひゃく年ねんを越こえる五葉松ごようまつの根元ねもと

の小さなほこらを拝みに来る人が絶えんそうな。そのほこらの中には、お大師さんの絵と、
観音像と鏡、それにおふゆさんの位牌が祭られているそうじゃ。

おわりに

◇ 郷土にはぐくまれ、保存されている文化財や民俗・風習・行事などの文化遺産を尋ねて掘り起こし、これを郷土教育資料として、次代を担う郷土の児童生徒に残しておこうという試みは、昭和四十一年から教育委員会によつて進められて来ました。これらは「しげのぶ」「ふるさとこみちしげのぶ」シリーズとして集録されています。

◇ 昭和五十七年・五十八年度は、郷土の各地に古くから口承されて来た昔話や伝説の集録を計画し、「重信のむかし話」として発刊することになりました。もちろん、昔話と伝説を論理的に分類して集録したものではないので、或るものは昔話的であったり、或るものは伝説的であり、その記念物らしいものが存在しているものもあります。ともかくも、郷土各地に伝承されて来たむかし話を、文字に再現することにより、ともすると忘れがちになる口承話を記録しておきたいという願いから、集録編集したものです。

◇ 集められたむかし話を、児童・生徒の郷土教育資料として親しみやすく読みやすいものにするために、用語や記述に留意したり、さし絵やカットに工夫したり、話の配列の

仕方や出所を記録する絵地図などにも配慮しました。

◇ 郷土の子どもたちが、この「重信のむかし話」に親しみをもち、活用して古き郷土の人々の生き方にふれ、その心をしのぶことによつて豊かな人間性を培う糧となればさいわいでありませう。さらに、大人の方々の御愛読も願つて止みません。

◇ まだまだ集録もれのものもあり、また、表現上の不備・編集上の不手際なども多いと思ひますが、愛読者各位の、今後の御指導をお願いいたします。

◇ 末尾ながら、発刊するにあたりまして、御監修いただきました別府頼雄先生・森正史先生に、心より感謝申し上げます。

編集委員会

編集協力者一覽

○指導してくださった人

別府 頼雄 (元重信町立拝志小学校校長)
森 正史 (愛大農学部附属高校副校長)

○編集した人

・文をかいた人

(南吉井小学校) (北吉井小学校) (拝志小学校) (上林小学校) (重信中学校)
池川 敏朗 菅野 忠雄 高橋 謙一 近藤 良信 八木 光秋
日野 康敏 藤井 紀子 青野 隆夫 奥村 藤英 橋本 矩之
明星 方夫 池口 直子 源田 員三 坂田 育治
中矢 俊江 永山 洋一 高須賀惠美子
高須賀康夫

・絵をかいた人

(県教委指導主事) 神山 朋也 (重信町絵画教室)
(松山南砥部分校) 松田 一 武田 麻子 久保田安恵
(東温 高校) 野村 彰史 栗田ワカ子 両村ユキエ
(重信町役場) 土居 照子 田中 郁子 猪原 宣子
(重信中学校) 富田 泰代 重見 忠顕 永野 通

・協力した人

(重信町教育委員会事務局)

森 邦好 教務課長
加藤 章 主査
和田 久弘 主査
宮崎 良輔 主事

重信のむかし話

昭和五十八年十一月三日 印刷発行

編集者 重信のむかし話編集委員会

発行者 重信町教育委員会

温泉郡重信町大字志津川九七二
電話〇八九一六〇一〇〇一

印刷所 有限会社青葉 函書

松山市小栗六丁目三一二三
電話〇八九一四三一二六五